



# 地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

## 令和6年度地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座 事業報告総括

地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座  
特任准教授（ネットワーク推進統括医） 泉 裕一郎

### 1. 活動概要

本講座は、熊本県の地域医療連携ネットワーク構想を推進するため、県知事が各医療圏域に指定する「地域医療拠点病院」へ、熊本大学病院（本講座）から医師を派遣することで、専門医療を実践するとともに、行政や医師会と協力しながら地域医療連携の強化に努め、また、医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師へのキャリア形成支援、各医療圏域における医療機能の向上を図るための調査・研究を行うことを目的に、熊本県からの寄附を得て、平成31年度から令和3年度までの3年間設置され、この3年間の活動実績を踏まえ、さらに令和4年度から令和6年度までの3年間、本講座が継続設置された。

本年度は、熊本大学病院の各診療科より選出された24名の専門医が本講座所属の特任教員となり、ネットワーク推進医として地域医療拠点病院（以下、拠点病院）に派遣され、同じく各診療科から派遣された常勤のネットワーク推進医と協力して業務を遂行した。

詳細な活動状況、地域医療の現状報告については、各特任教員の報告書を参照されたいが、以下に概要を記す。

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師への支援・指導は、主に通常の診療を通して専門的知識を提供し、手技を指導する形で行われている。加えて、若手医師の学術総会への参加の促進、発表の支援も行われている。ネットワーク推進医の配置が若手医師の教育体制を強化し、拠点病院での研修を希望する医師の増加に貢献する可能性が報告されている。

### 3. 診療支援の取り組み

各拠点病院において、ネットワーク推進医の専門性を活かし、外来・入院診療、専門性の高い手術・手技が提供された。外来患者数、手術数は高い水準で維持、または経年的に増加が続いており、地域完結型の医療に貢献していることが示唆される。特に、遠方への通院困難などの制約のある高齢患者への質の高い医療の提供に貢献している。一方で、内科系の診療においては、多くの疾患を合併する高齢患者の増加から、専門医療だけでは不十分であり、可能な限りでの総合診療の提供を必要とするケースが増えてきている。また、拠点病院内の常勤医の減少や、近隣の開業医の閉院と専門医の減少が進み、さらに、県境に位置する拠点病院では隣県からの患者受け入れにも対応する必要が現状としてあり、ネットワーク推進医を含む医師の派遣体制の必要性が高まっている。

その他、ネットワーク推進医が地域の講演会・研究会やワーキンググループへ参加し、啓蒙活動や多職種医療チームによる患者介入に貢献している。

## 4. くまもとメディカルネットワーク(KMN)の普及状況

文書送受信機能の利用状況からは、多くの施設で積極的にKMNの利用を推進していることが認められる。これまで普及が進んでいなかった拠点病院においても、文書送信数の増加や院内のKMN担当者の設置などの利用体制の確立に向けた活動について報告されている。KMN利用体制が確立している施設では、KMNによる迅速な情報共有を利用して大学病院－拠点病院間での合同カンファレンスを行うなど、利用の幅を広げている。

一方で、KMNの普及がほとんど進んでいない施設もまだ残っている。特に、情報の送信において院内システムがまだまだ不十分であることや、人員不足からKMNの担当者が設置できていないことなどが要因のようである。近隣の診療所とのKMNによる連携は、ほとんどの医療圏においてまだ少ないと思われるが、連携が確立すると利便性が高いことが報告されている。

## 5. 拠点病院としての役割の推進状況

多くの地域で高齢患者が増加しており、常勤医とネットワーク推進医などの派遣医師、非常勤医師の協力により、地域完結型の医療を推進している。ネットワーク推進医が担当する診療科の外来患者数は全般的に増加の傾向が見られ、地域完結型の医療に貢献していることが示唆される。また、ネットワーク推進医の派遣に応じて、玉突き派遣による医療過疎地域への医師の派遣が実行されている。KMNの普及についても、多くの拠点病院が積極的に取り組み、経年的に参加同意者数・文書送受信数の増加が見られる。県境に位置する拠点病院では、隣県の医療体制の影響も受けながら、患者の受け入れを行っていることが報告されている。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域医療における課題として、高齢患者の増加により総合診療が必要とされる現状と、一方で、医師の高齢化による医療圏域の医師不足の加速が危惧されている。地域住民の高齢化、患者の高齢化から通院困難者の増加や介護施設の不足が表面化してきており、公共交通機関の維持や訪問診療の推進、介護サービスの充実が求められている。拠点病院の体制として、医療経営・財政問題の解決と、医療の高度化が進む中で医療機能を維持・向上しつつ、若手医師のキャリア形成や医師の働き方改革を推進するためには、医療圏域ごとでの医療機関の集約化が必要であるとの意見が挙げられている。同時に、熊本県の地域医療連携ネットワークの維持のためには、本講座の骨子である医師派遣体制の維持も必須であると考えられる。

## 7. おわりに

各教員の事業報告を総括した。本講座は設置後2期6年となり、所属教員のネットワーク推進医としての活動は拠点病院にとって欠かせないものとなっている。地域医療の課題・解決策についても、地域の患者にもっとも近い視点で提言された貴重なものであると考える。

本講座は、次年度より改組され、熊本県の地域医療連携ネットワーク構築支援事業として継続される。熊本県の地域医療連携ネットワークの構築と地域医療の維持のために、引き続き活動を継続していく。

令和6年度(2024年度)地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座 特任教員一覧

部門	診療科名	定数	特任教員氏名 (ネットワーク 推進医リーダー)	職名	派遣先拠点病院
内科	腎臓内科	12	泉 裕一郎	特任准教授	宇城総合病院
	呼吸器内科		猪山 慎治	特任助教	人吉医療センター、小国公立病院
			坂田 晋也	特任助教	阿蘇医療センター、有明医療センター
			赤池 公孝	特任助教	小国公立病院、山鹿市民医療センター
			堀尾 雄甲	特任助教	上天草総合病院、再春医療センター
	消化器内科		徳永 堯之	特任助教	阿蘇医療センター
			松野 健司	特任助教	熊本労災病院
	血液内科、 膠原病内科		飯尾 悦子	特任助教	有明医療センター
	糖尿病・代謝・ 内分泌内科		坂田 康明	特任助教	熊本総合病院
			小野 薫	特任助教	小国公立病院、上天草総合病院
山本 正啓		特任助教	上天草総合病院		
外科	消化器外科	白濱裕一郎	特任助教	そよう病院	
		北野 雄希	特任助教	水俣市立総合医療センター	
	乳腺・内分泌外科	原田 和人	特任助教	水俣市立総合医療センター (R6.10.1～、前任 問端 輔)	
		後藤 理沙	特任助教	くまもと県北病院	
		穴見 俊樹	特任助教	人吉医療センター	
泌尿器科	西澤 秀和	特任助教	山鹿市民医療センター		
成育医療	小児科	3	永田 裕子	特任助教	小国公立病院、水俣市立総合医療センター
	産科		宮村 文弥	特任助教	小国公立病院、水俣市立総合医療センター、 有明医療センター
感覚・運動	整形外科	楠木 槇	特任助教	熊本総合病院	
		湯上 正樹	特任助教	阿蘇医療センター	
		米満 龍史	特任助教	そよう病院	
脳・神経・ 精神	神経精神科	杉本 一樹	特任助教	小国公立病院	
		都 剛太郎	特任助教	熊本県立こころの医療センター	

派遣先地域医療拠点病院	宇城総合病院
氏名	泉 裕一郎
診療科名	腎臓内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

派遣先病院において、それぞれ週1回の腎臓内科外来診療と維持血液透析患者の管理を行った。常勤腎臓内科医師との症例検討や、他診療科からのコンサルトに対応し、適宜治療介入を行うとともに、くまもとメディカルネットワーク（KMN）を利用した他施設へのコンサルトや紹介を積極的に行い、院内の利用推進の支援を行った。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

現在、派遣先に該当する医師は所属していない。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

腎臓内科全体での外来患者数は2022年に比べ2023年、2024年とも減少しているが、これは常勤医1名が定年退職したことによる。しかし、本事業が開始される2018年以前に比べると外来患者数は高い水準を維持している。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2022年（令和4年）度に構築された、地域連携室と医療秘書課の連携による文書送受信機能の院内利用体制が良好に機能しており、本年度も文書送受信数が高い水準を保っている。熊本大学病院を始め、隣接する医療圏域の病院（人吉医療センター、水俣市立総合医療センター、熊本労災病院、熊本総合病院など）との文書のやり取りはKMNで一本化されている。受信件数より送信件数が2倍以上多く、KMNを積極的に利用している状況が伺われる。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

宇城総合病院は、宇城圏域の中核病院であり、地域に救急医療を提供するとともに、高度医療機関への紹介や、急性期・回復期のリハビリ入院から転院までの調整を行い、他機関への橋渡しを行うハブ的な役割を担っている。人口対医師数の比較的多い熊本圏域と八代圏域に挟まれた、医師数の少ない地域にあり、東西に広い圏域の地域医療を支える上で同院の役割は大きい。

また、宇城圏域は高齢者の多い地域で、地域包括ケアシステムの充実も求められており、地域連携室を中心に周辺施設との連携を維持している。常勤医と熊本大学病院からの非常勤派遣医師が良好に協力し、地域医療拠点病院としての役割を積極的に果たしていると思われる。

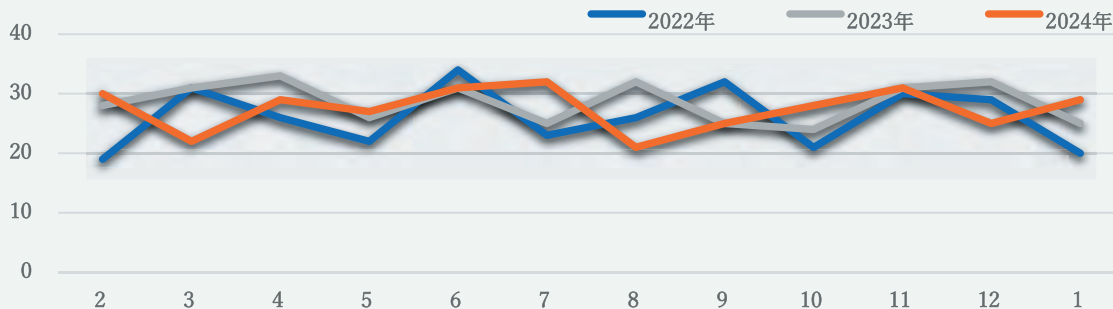
## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

宇城総合病院の診療活動は、30名ほどの医師によって成り立っているが、そのうちの約3割は、ネットワーク推進医も含めた非常勤医師に頼る現状があり、同院にとって医師の確保は常に重要な課題である。

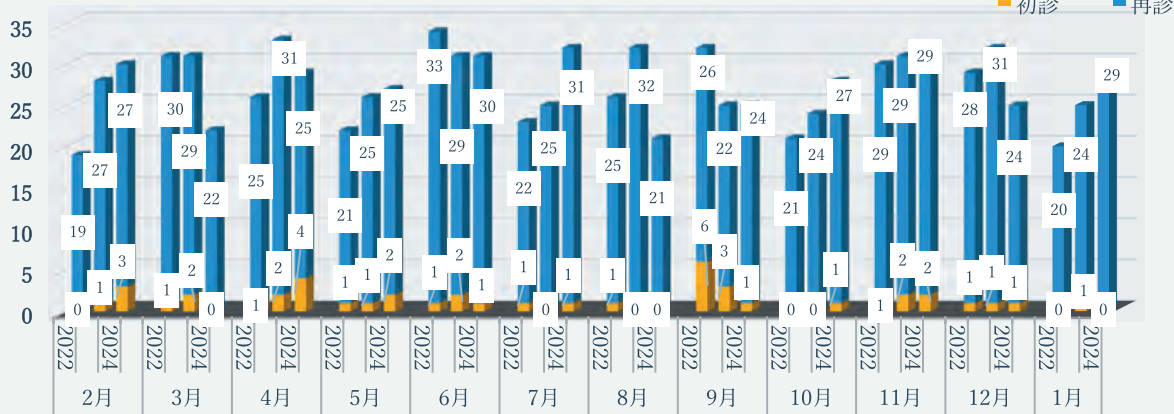
また、他の地域と同様に医師の高齢化が徐々に進んできており、今後、医師不足に拍車がかかる可能性が高い。当科が関わる透析医療に関しても、常勤ネットワーク医が主に業務を行い、報告者と熊本大学からの非常勤派遣医師、定年後の嘱託勤務医師1名で診療を分担することでなんとか維持されている。約80名の維持透析患者を安全に管理するには不安な体制であり、今後も継続的な人的支援が望まれる。

宇城総合病院 腎臓内科

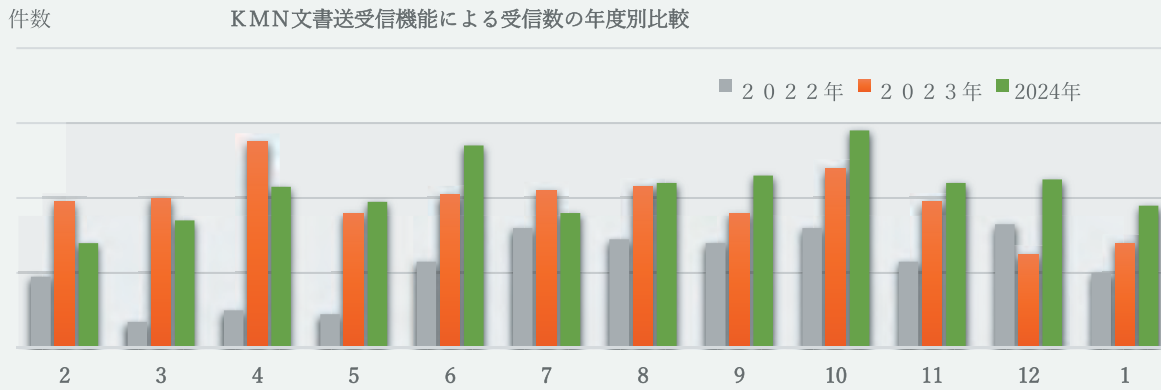
外来患者総数の推移



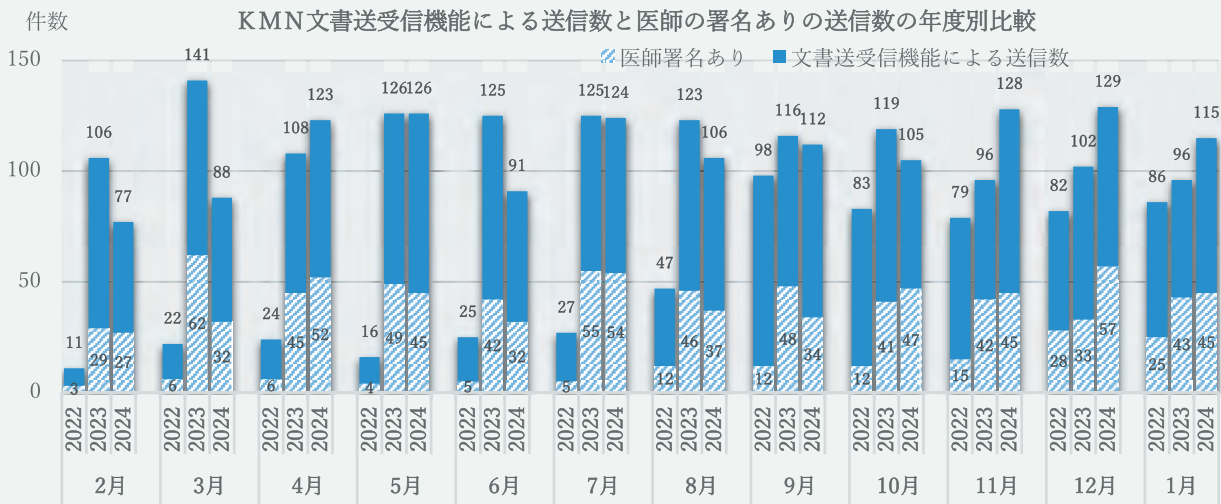
年度別外来患者数(初診・再診)の推移



KMN文書送受信機能による受信数の年度別比較



KMN文書送受信機能による送信数と医師の署名ありの送信数の年度別比較



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、人吉医療センター
氏名	猪山 慎治
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

小国地域及び人吉・球磨地域への医療提供を継続的に行っている。

具体的には、近隣の診療所、病院からの紹介を受け、呼吸器疾患を中心とした診断治療及び必要に応じて高次医療機関への紹介を行っている。

また、くまもとメディカルネットワーク（KMN）の推進のために、積極的なKMNの利用を行っている。

さらに、呼吸器内科若手常勤医、専攻医、初期研修医の症例相談、専門的なアドバイスならびに学会報告の指導を行っており、呼吸器疾患以外にも総合内科専門医として風邪や頭痛、関節痛などのプライマリー疾患や長年苦しんでいた症状の診断治療や教育、生活指導、常用薬の整理を行い、コミュニケーションを重視した良好な医師関係の構築および適切な医療を届けてきた。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

自治医科大学卒の専攻医に対しては、専門医取得に必要な症例登録や要約登録のアドバイス、学会集会参加の勧め、病欠時の外来患者代行、入院患者のアドバイスを行ってきた。初期研修医には、呼吸器疾患の診断治療の評価、アドバイス、呼吸器疾患の外来引継ぎを行い、研修医教育にも貢献している。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

小国公立病院では、外来診療を2枠で実施し、月間約100名の外来患者に対する診断・治療を行っている。呼吸器疾患の地域医療機関からの紹介は少ないものの、院内コンサルトは増加傾向にある。これまでに、肺癌や間質性肺炎、肝細胞癌、C型肝炎といった難治性疾患の診断を行い、適切な高次医療機関への治療紹介を実施してきた。今後も、地域住民の健康管理、予防医療、疾患治療を重視しながら、継続的な診療支援に取り組んでいく。

人吉医療センターでは、呼吸器内科の常勤医が2名在籍しているものの、命に関わる疾患を合併する患者が多く、診療支援が不可欠な状況である。外来患者の初診・再診数は例年とほぼ同様に推移しているが、呼吸器疾患の診療支援を十分に提供することで、近隣医療機関や地域住民に貢献できていると考える。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

小国公立病院、人吉医療センターともにKMNの利用は年々増えてきており、認知度も向上している。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

- ① 専門医療実践による診療支援：呼吸器疾患専門的診断、治療を行いながら、総合内科専門医として内科領域も専門的診断、治療を行った。
- ② 若手医師への指導：症例の相談、検査治療方針のアドバイス、学会報告や論文作成の指導、専門医取得の支援を行った。
- ③ 地域住民・医療従事者への啓蒙活動、専門的知識の提供：予防医療のための肺炎球菌や帯状疱疹などのワクチンの推進、自宅でできるリハビリテーションの情報提供を行った。
- ④ くまもとメディカルネットワークの普及：送受信数は増え、新規加入者も増加している。
- ⑤ 各医療圏における地域医療の現状と新たな方策の検討：人吉球磨地区の医療は常勤2名の負担が大きく、外来支援で何とか出来ているが、子育てと仕事の両立で疲弊がみられ、時間外労働も多く、もう一名の常勤医の追加が必要である。

小国公立病院は、自治医科大学卒や地域枠の若手医師と50-60代の医師で成り立っているが、マンパワー不足は感じる。地域枠の若手医師の支援、阿蘇医療センターの充足、連携をすることで、より専門性の高度な医療提供が出来る可能性がある。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

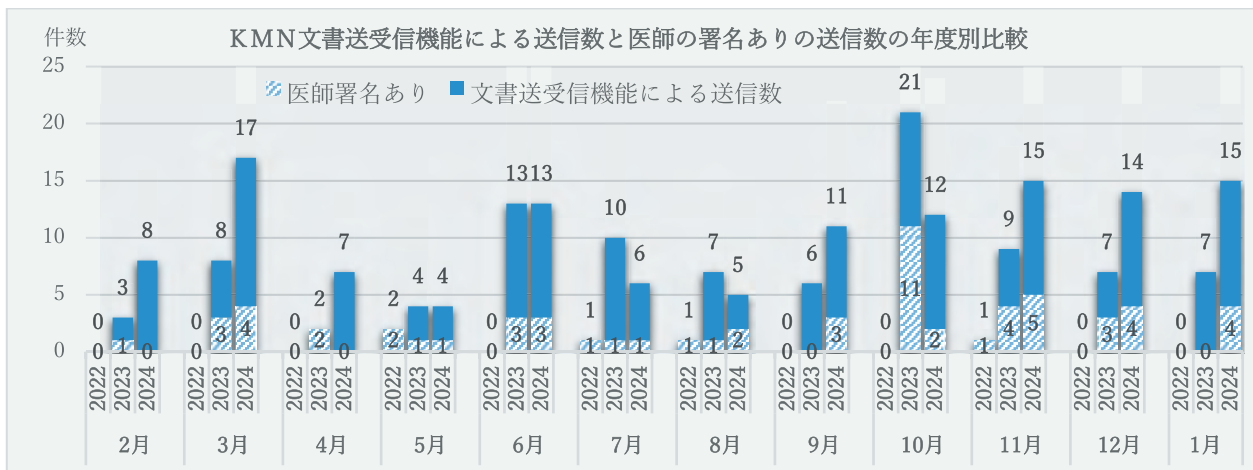
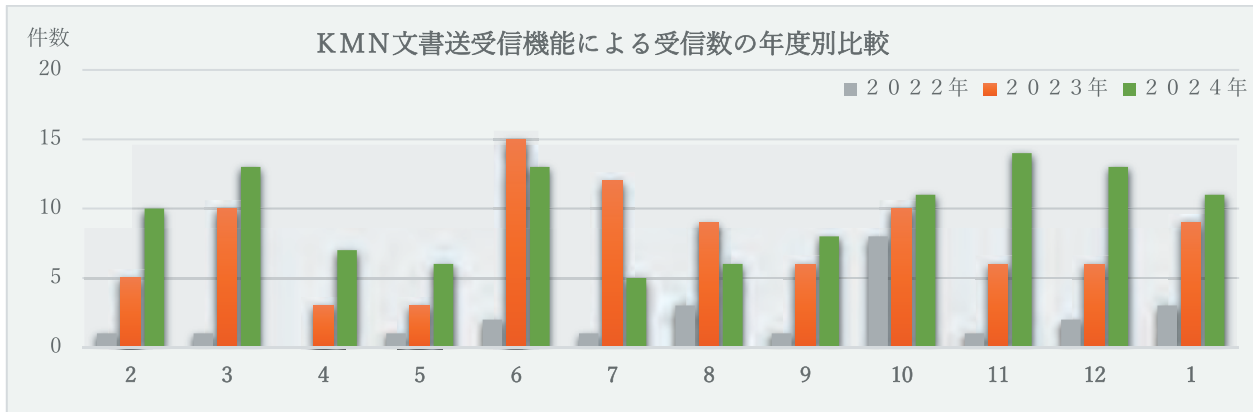
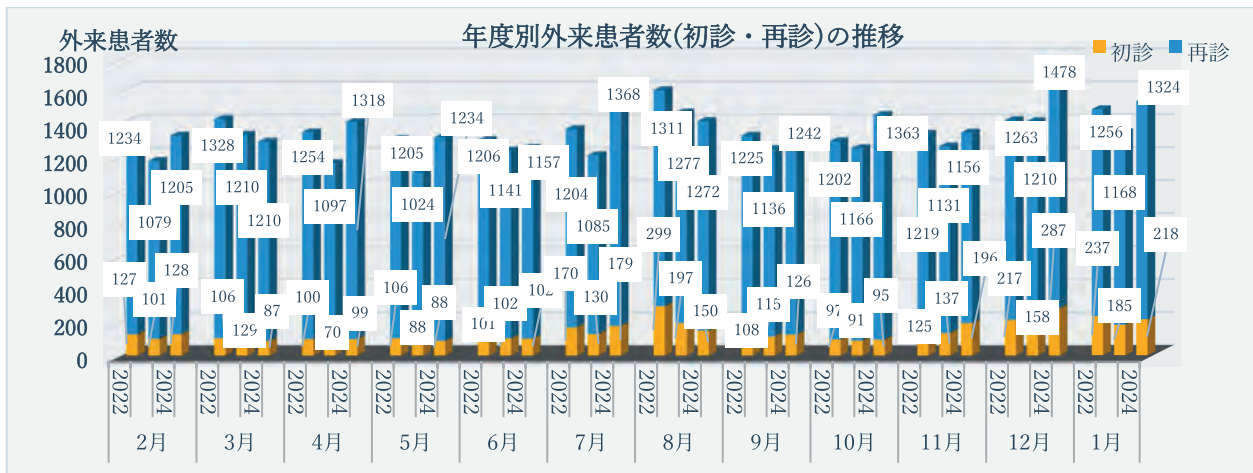
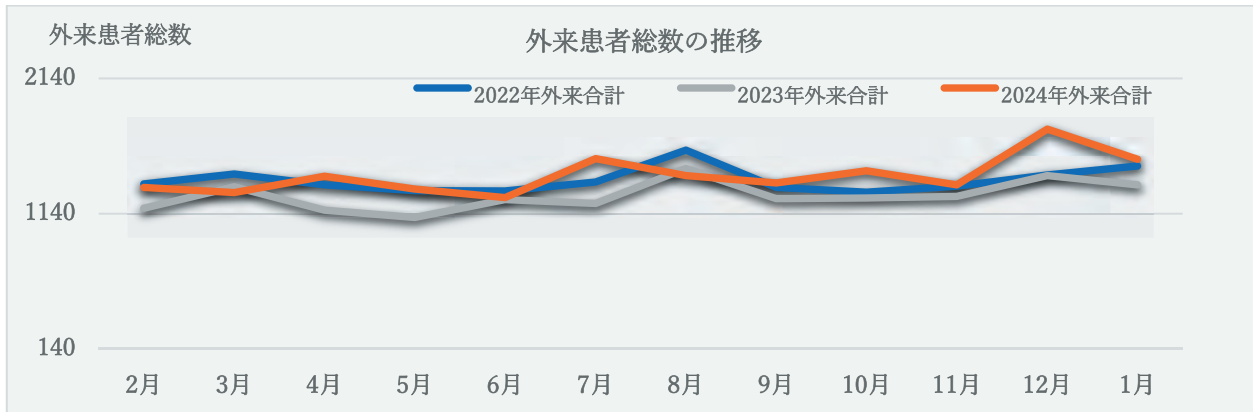
熊本大学病院は、高度医療を提供する熊本県の医療の中心であると同時に、地域医療支援の役割も担う必要がある。地域で活躍できる医師を養成するためには、地方勤務のインセンティブ（給与、勤務環境、キャリアパス）に関する制度改革が求められる。

また、副業・兼業制度や時短勤務の整備により、都市部の勤務医や子育て中の医師でも地域医療に貢献できる環境を整えることが重要であり、一部の医師に過度な負担がかからないよう、柔軟な診療体制を構築することで、地域医療のハードルを下げ、高齢化・過疎化が進む地域の医療を支えることができると考える。

さらに、若手医師が成長し、一人前の医師として自立できるよう、教育や金銭的支援、学びの機会を提供することも不可欠である。このような取り組みを、熊本大学病院の「地域連携ネットワーク寄附講座」を通じて推進していきたいと考えている。

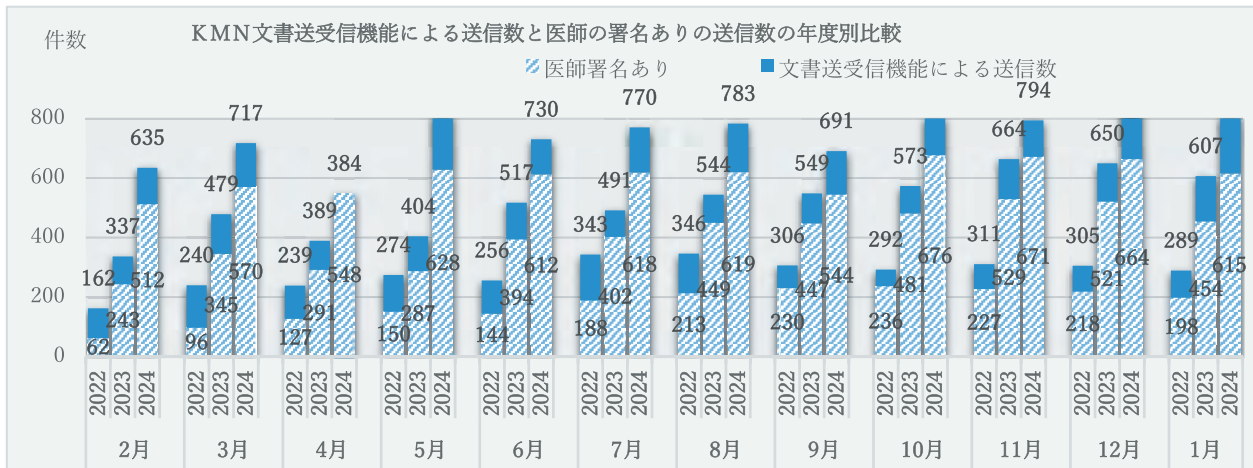
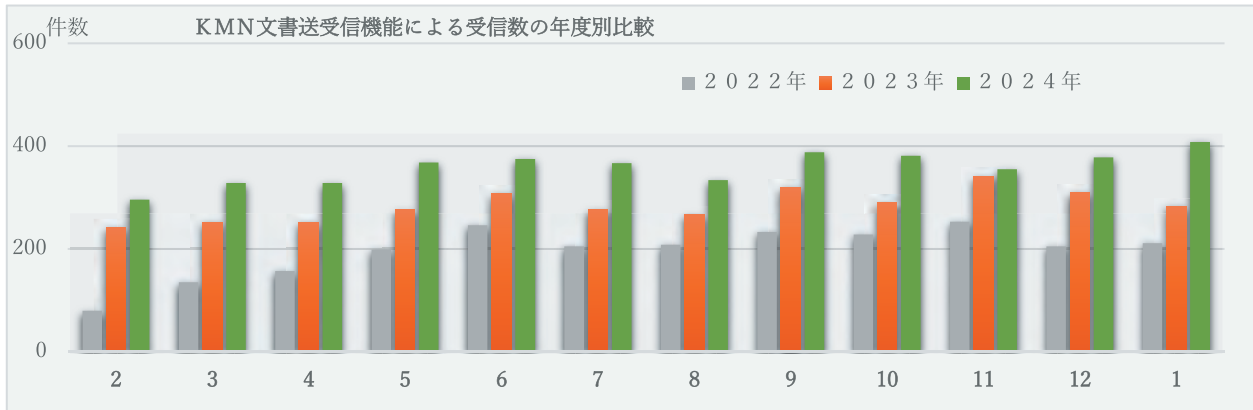
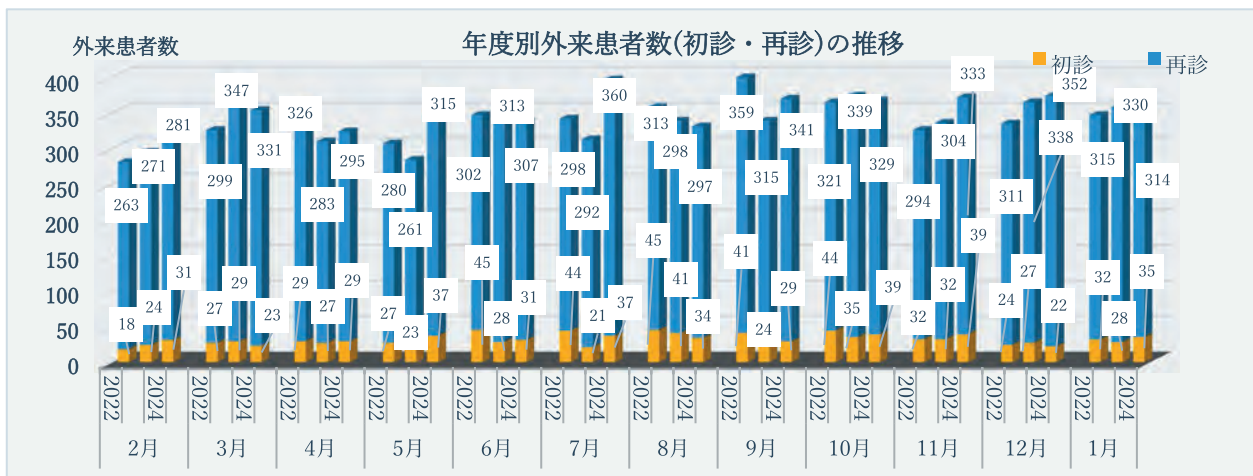
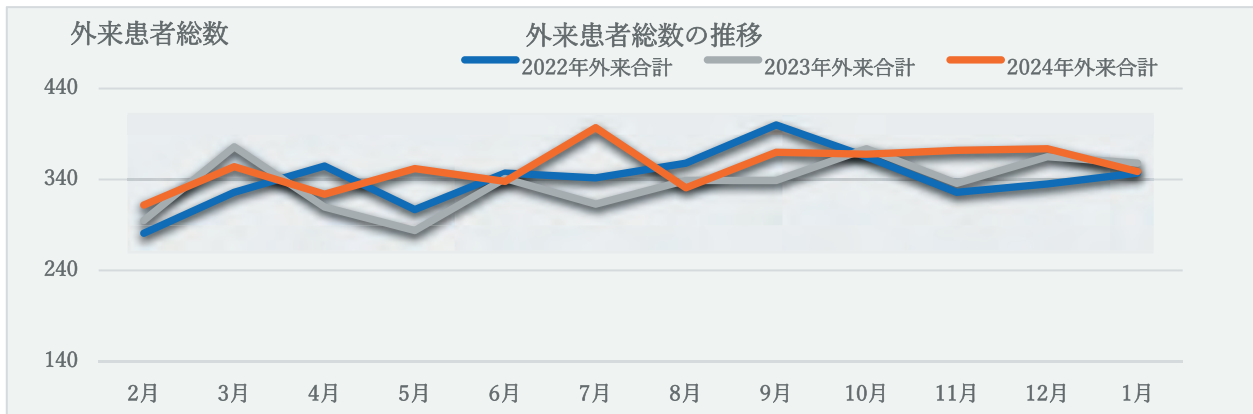
地域医療においても、最適な専門医療を患者さんに提供できるよう尽力していきたい。  
今後とも、熊本県のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

## 小国公立病院 呼吸器内科



地域医療連携ネットワーク実践学 寄附講座

## 人吉医療センター 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院	阿蘇医療センター、荒尾市立有明医療センター
氏名	坂田 晋也
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

### 【阿蘇医療センター】

- 毎週火曜日の外来診療を中心に支援している。
- 阿蘇の医療圏においては呼吸器内科専門医療施設がなく、阿蘇医療センターの外来において呼吸器疾患に対する専門的な医療の提供を実践している。また、現在常勤医師が1名派遣されており、病棟入院診療も提供している。
- 阿蘇医療センターは、医局内で診療科間の垣根が低く、症例の相談を行いやすい雰囲気がある。

### 【荒尾市立有明医療センター】

- 毎週金曜日の外来診療を中心に支援している。
- 現在、呼吸器内科の常勤医師が1名（および顧問医師が1名）体制となっており、主に入院診療は常勤医師により実施し、外来及び院内コンサルト症例に対する呼吸器診療の専門的な医療の提供を行っている。重症度が高い症例や専門的検査を要する症例の一部は、近隣の呼吸器内科専門施設との連携を取りながら地域医療を実践している。本院から呼吸器内科専門医師の派遣を行うことにより、他診療科で診療に難渋している症例などのコンサルトがより円滑となり、医師同士のネットワークも広がってきており病院内での専門医療の提供体制が充実してきている状況である。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

阿蘇医療センターに熊本大学医学部の地域枠入学医師1名が派遣されており、診療指導や日本呼吸器学会呼吸器専門医の資格取得に向けたキャリア支援を行っている。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

### 【阿蘇医療センター】

- 呼吸器内科の外来診療患者数は下記のとおりである。阿蘇医療センターにおける呼吸器内科外来の設置、専門医による診療の目的に近隣のクリニックからの紹介も増加してきており、院内の内科医師からのコンサルトも定期的に受けている状況である。

### 【荒尾市立有明医療センター】

- 1カ月当たりの外来診療患者数は約30～50名程度である。
- 荒尾市立有明医療センターでは、以前より呼吸器内科の外来でフォローしていた再診患者様の数が多く、診察予約枠が全て埋まっていることが少なくなかったが、専門的治療の後に安定した症例については、かかりつけ医や近隣のクリニックと連携を取りながら逆紹介も行っている。また、他科医師からの院内コンサルト症例も対応している。
- 近隣の呼吸器内科専門医療施設（大牟田天領病院）の呼吸器内科常勤医師数の減少（2025年4月より1名体制）に伴い、大牟田天領病院からの多くの外来患者の紹介を引き受けている。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

### 【阿蘇医療センター】

- KMN 文書送受信機能による受信数は増加傾向である。
- 地域連携室の担当者と連絡を取りながら、KMNに参加している病院への紹介時など病診連携にて利用を推進している。

### 【荒尾市立有明医療センター】

- 呼吸器内科の専門施設で最寄りの病院が大牟田天領病院、次いで近い病院がくまもと県北病院である。大牟田天領病院は福岡県にあるため KMN の利用ができないが、くまもと県北病院呼吸器内科へ紹介する際や、

熊本市内の病院への診療情報書の送受信にて KMN を活用している。

- KMN 担当者（地域連携室）のサポート下に、スムーズな KMN 利用が実施できている。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

熊本県地域医療拠点病院としての役割には、紹介患者に対する医療提供、へき地診療所への医師派遣等による地域のかかりつけ医の支援、地域の研修医、専攻医への教育、勤務環境改善に向けた取り組みがある。

### 【阿蘇医療センター】

地域のかかりつけ医からの紹介患者に対する医療提供が実施されている。特に、救急医療については阿蘇地域における救急診療を一手に担っている状況であり、かかりつけ医からの信頼が厚いと感じる。常勤医師によるへき地診療（波野診療所）で定期的な外来診療も実施されている。また、呼吸器疾患については当科への研修医や内科専攻医からの院内コンサルト症例を通じて専門医療の知識・技術の指導を実施している。今年度は常勤医師が1名派遣されており、入院症例の診療も提供可能となっている。

### 【荒尾市立有明医療センター】

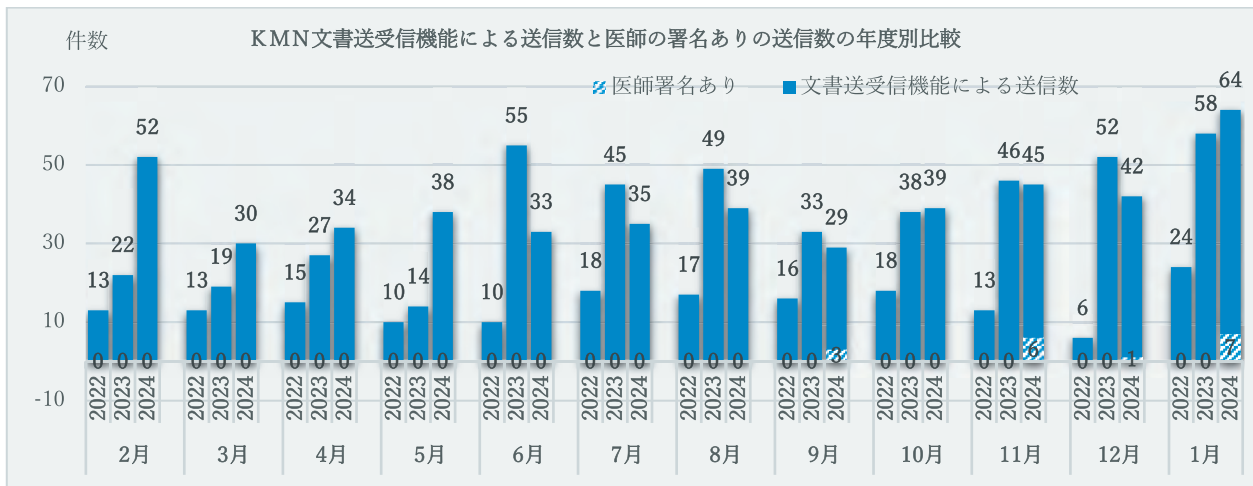
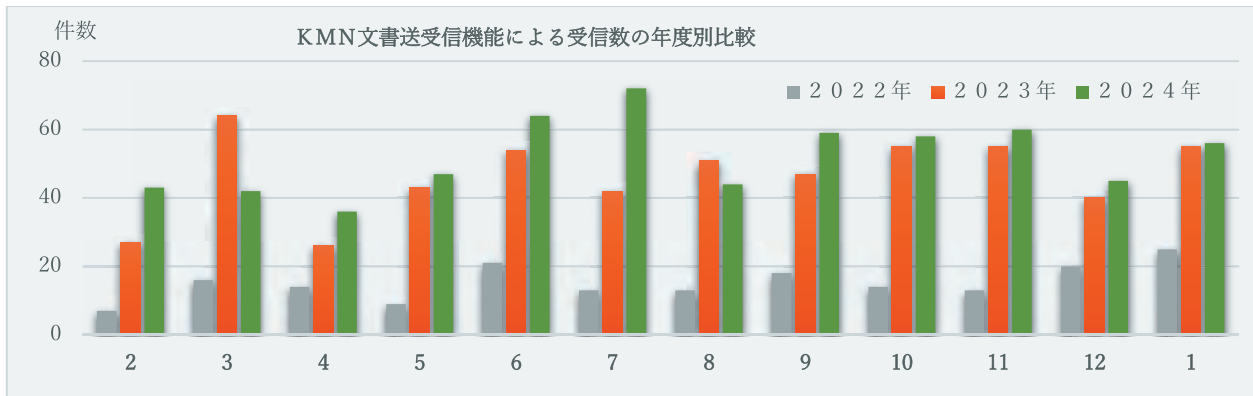
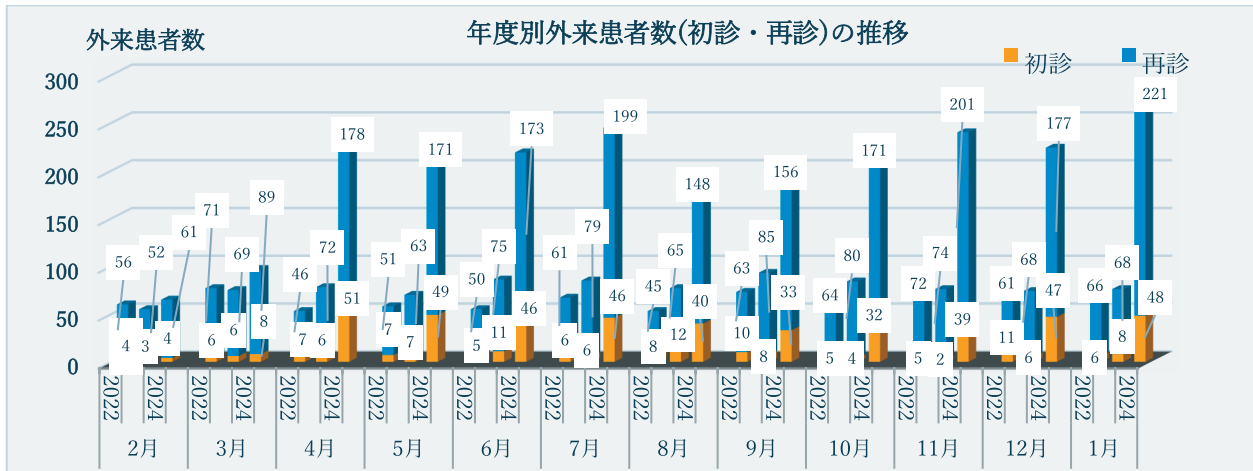
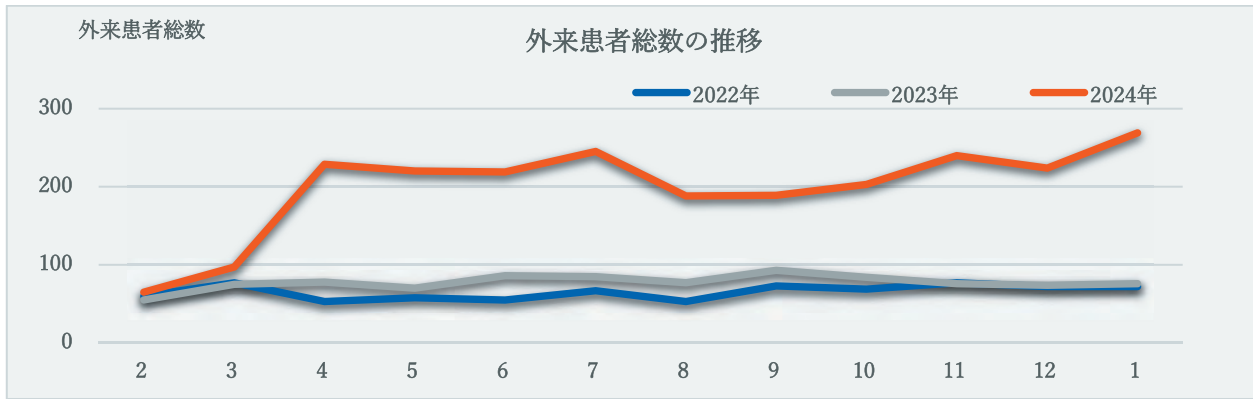
地域のかかりつけ医からの紹介患者に対する医療提供が実施されている。呼吸器疾患についても、呼吸器内科への院内コンサルトで専門的助言を受けながら可能な限り自院内で治療が完結できるよう努力されている。また、今年度は常勤医師が1名および顧問医師が1名勤務しており、入院症例に対する呼吸器診療も実施している。そのような症例でも、他の呼吸器内科専門施設でなければ検査あるいは治療などの対応が難しい症例については、近隣の専門機関あるいは熊本大学病院を含めた熊本市内の専門機関への紹介を提案している。勤務する研修医の数が多く、救急医療を含めた地域医療研修に熱心に取り組まれていると感じる。また、呼吸器疾患については当科への研修医からの院内コンサルト症例を通じて専門医療の知識・技術の指導を実施している。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

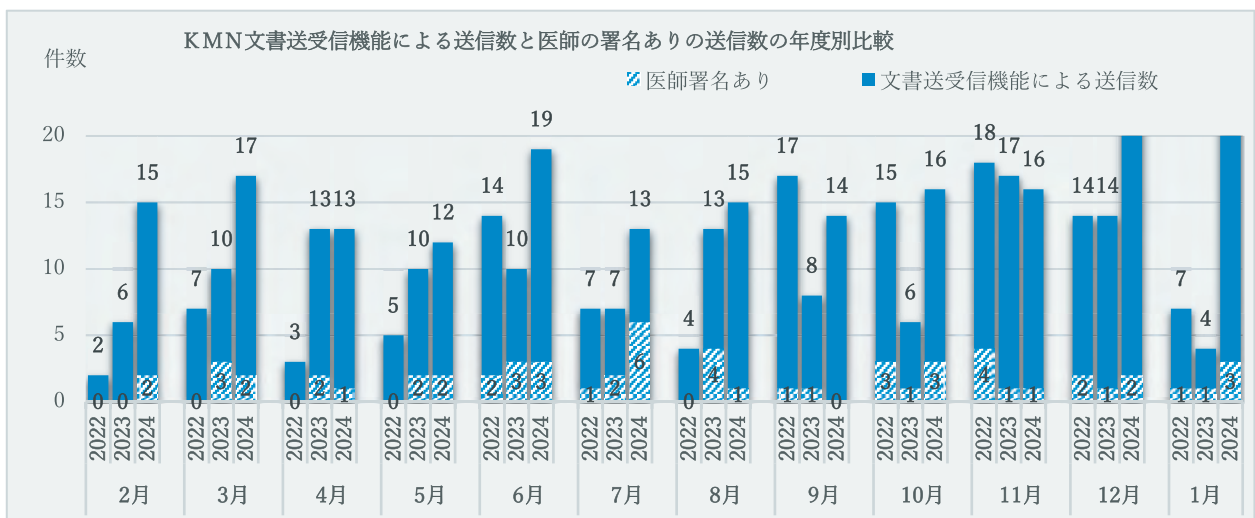
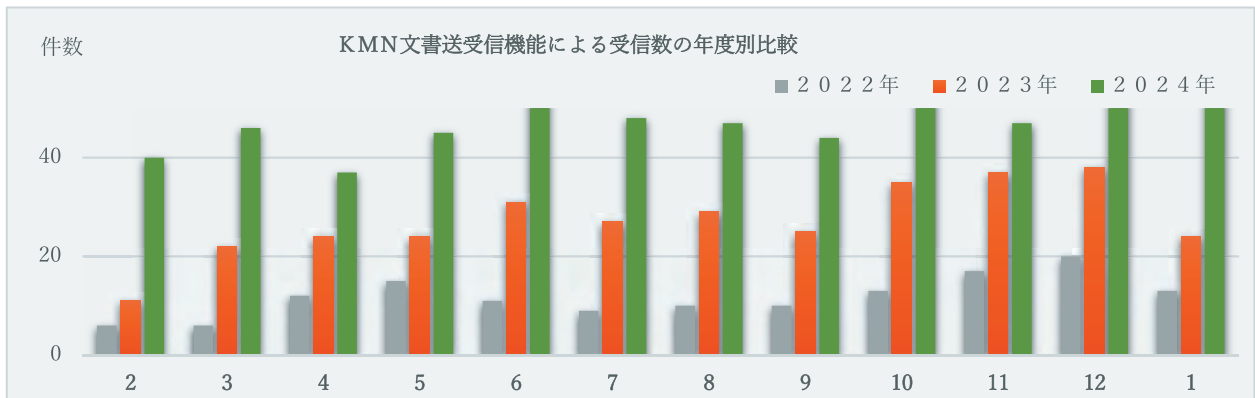
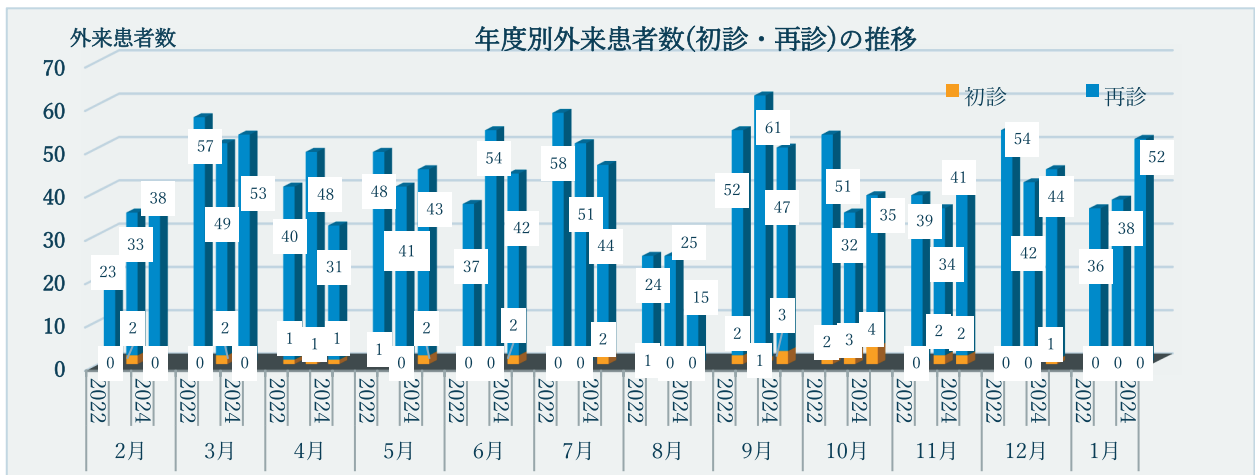
荒尾市立有明医療センターには今年度より呼吸器内科常勤医師が勤務しており、肺炎や気胸、気管支喘息発作をはじめとした呼吸器疾患で入院加療が必要なケースにも対応可能となったため、非常にスムーズな呼吸器専門医療の提供が可能となった。しかしながら、間質性肺炎、肺癌など専門的加療を要する疾患については、近隣の呼吸器内科専門施設や熊本大学病院への紹介など症例により適宜対応している。課題としては、高齢者が多い施設であり呼吸器疾患以外に複数の重い基礎疾患を有している症例があり、症例によっては近隣の呼吸器内科専門施設でも総合的なケアが難しい場合がある点である。基礎疾患毎に対処可能な専門医師、ないしは総合的な対処が可能な内科医師の配置が必要と考える。

阿蘇医療センターには今年度より1名の呼吸器内科常勤医師が勤務しており、入院症例の診療もスムーズとなっている。しかしながら、近隣のクリニックに呼吸器専門医が不在という状況であり、阿蘇医療センターへの紹介が集中している状況である。また、呼吸器内科以外の専門診療科についても常勤医師の数が少ない点が課題と考える。地域で完結出来るような医療提供の実施のためには、各専門領域の医師の配置が必要と考える。また、救急医療についても地域の中核となる病院であるため、救急部の専属医師の配置が望ましいと考える。

## 阿蘇医療センター 呼吸器内科



## 有明市立荒尾医療センター 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、山鹿市民医療センター
氏名	赤池 公孝
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

### 【小国公立病院】

診療内容として外来診療が主となりますが、呼吸器疾患合併や呼吸器疾患にて入院されています患者さんにおける呼吸器疾患の対応および助言などを行っています。

- 1ヵ月あたり30名程度です（病院全体では月1297-1547名）。
- 肺癌などの外科的治療・化学療法は困難なため、他病院へ紹介を行っています。

### 【山鹿市民医療センター】

活動内容としては、週1回3時間の呼吸器内科外来を行っています。

- 診療内容として外来診療が主となりますが、呼吸器疾患合併や呼吸器疾患にて入院されています患者さんにおける呼吸器疾患の対応および助言などを行っています。
- 1ヵ月あたり26-48名です。
- 肺癌などの外科的治療・化学療法は困難なため、県北地域の病院（くまもと県北病院や再春医療センター）を含め、他院呼吸器内科専門病院へ紹介を行っています。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

- 小国公立病院では若手医師からの相談もあり、必要時は電話や直接電子カルテを交えて指導も行っていきます。山鹿市民医療センターでは該当する医師がいませんでした。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

### 【小国公立病院】

- 1ヵ月あたり30名程度（病院全体では月1297-1547名）で、昨年より初診・再診ともに増加傾向にあります。呼吸器疾患に関しては間質性肺炎の管理や肺癌（経過観察や緩和主体の治療）症例の外来・入院治療も継続して診療できる状況です。

### 【山鹿市民医療センター】

- 1ヵ月あたり26-48名でした（内、初診は0-8名）。
- 当科にて継続診療を行いながら、近医クリニック紹介患者さんに関しては逆紹介も積極的に行いながら対応しています。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

### 【小国公立病院】

くまもとメディカルネットワークに関しては、昨年と同様になかなか難しい状況かもしれません。

そのような中でも使用実績はトータルで年間273件（受信117件、送信29件）あり、昨年と比較して増加傾向にはあります。

### 【山鹿市民医療センター】

令和6年度前期は全く使用ができていませんでしたが、後期より使用を行うこともあり、担当の方も配置いただいているため、経時的に使用頻度は増えている状況です。病院全体としても使用頻度は年々上昇しており本年度は621件に至ります（受信486件、送信135件）。KMN使用には比較的問題なく行えている印象です（ただやはり普通に診療情報を行うより手間はかかっている状況です）。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

### 【小国公立病院】

地域の拠点病院ですが、呼吸器内科において、気管支鏡検査などは施行できないため熊本市内への紹介が必要です。一方で、一般内科診療の需要も高い状況で、健診（X線読影）などのサポートも並行して行っています。

### 【山鹿市民医療センター】

来年度も本年度同等かそれ以上に患者さんの増加が予測されます。呼吸器内科としての専門的な検査機械がないため可能であれば呼吸機能検査（DLco測定や呼気NO測定）ができますと呼吸器疾患における地域医療への貢献ができるかと考えます。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

### 【小国公立病院】

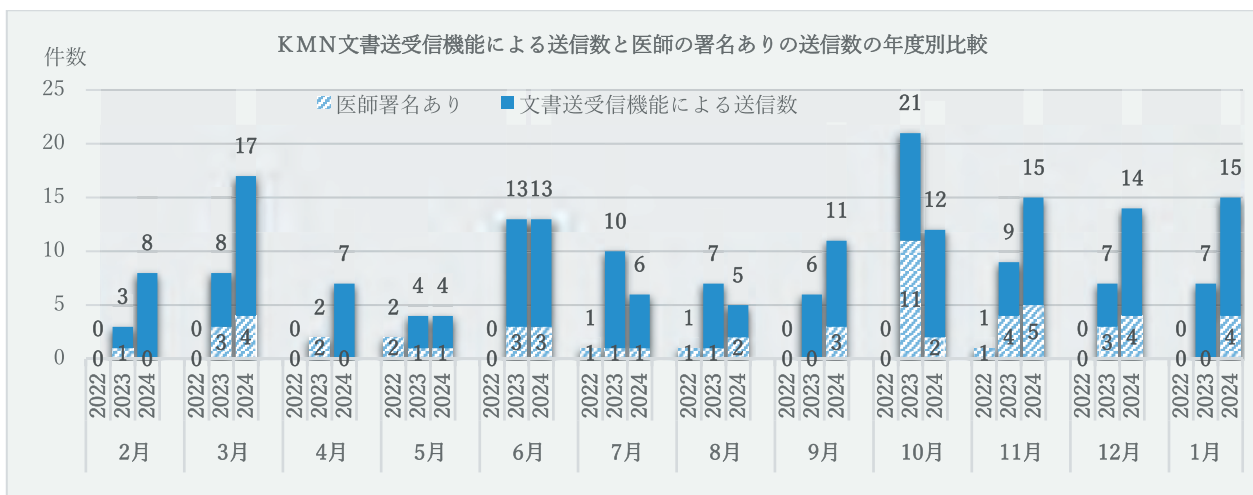
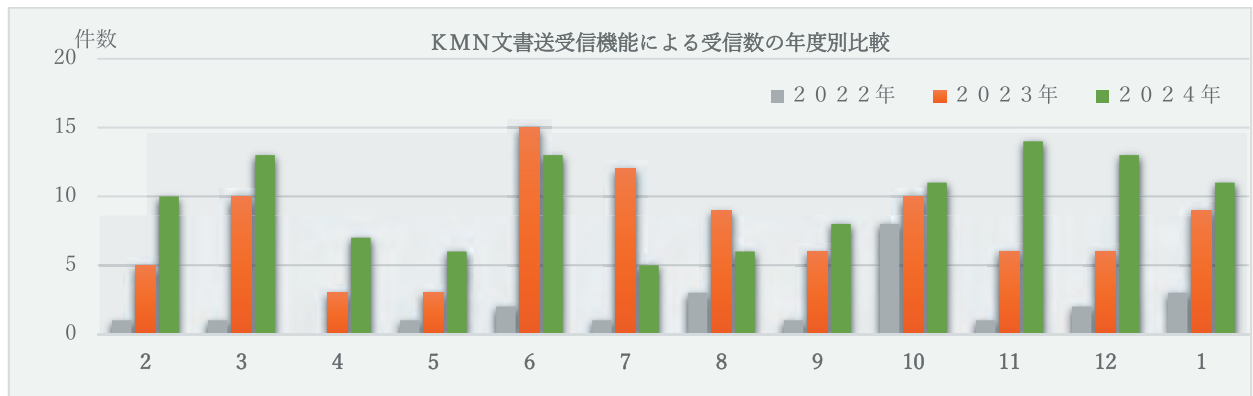
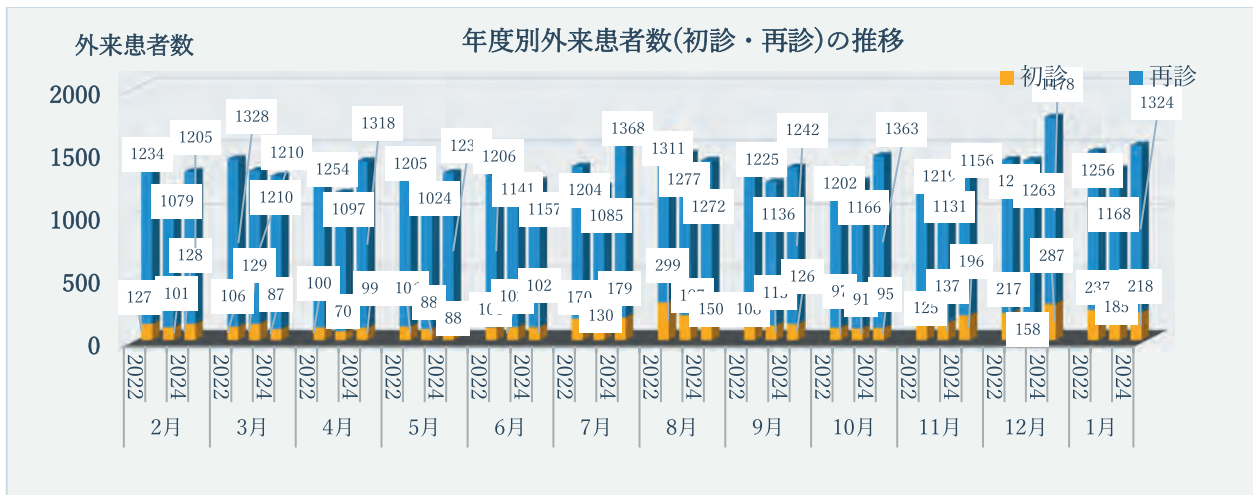
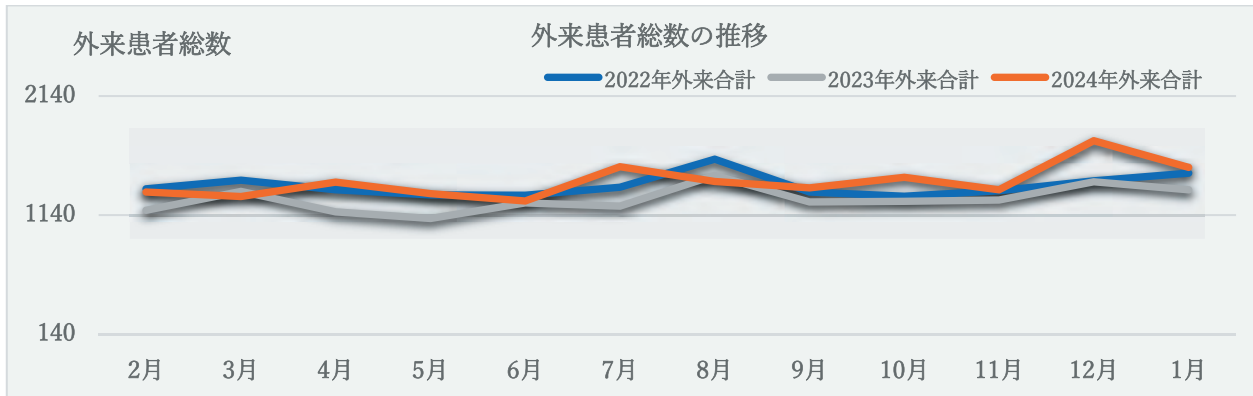
熊本メディカルネットワークは何とか機能しはじめている状況ですが、実質、診療情報を手紙で別途に必要な状況です。

また、来年度より呼吸器内科を主とする内科常勤医の退職に伴い、入院患者の呼吸器疾患の対応相談が増える可能性が示唆されます。

### 【山鹿市民医療センター】

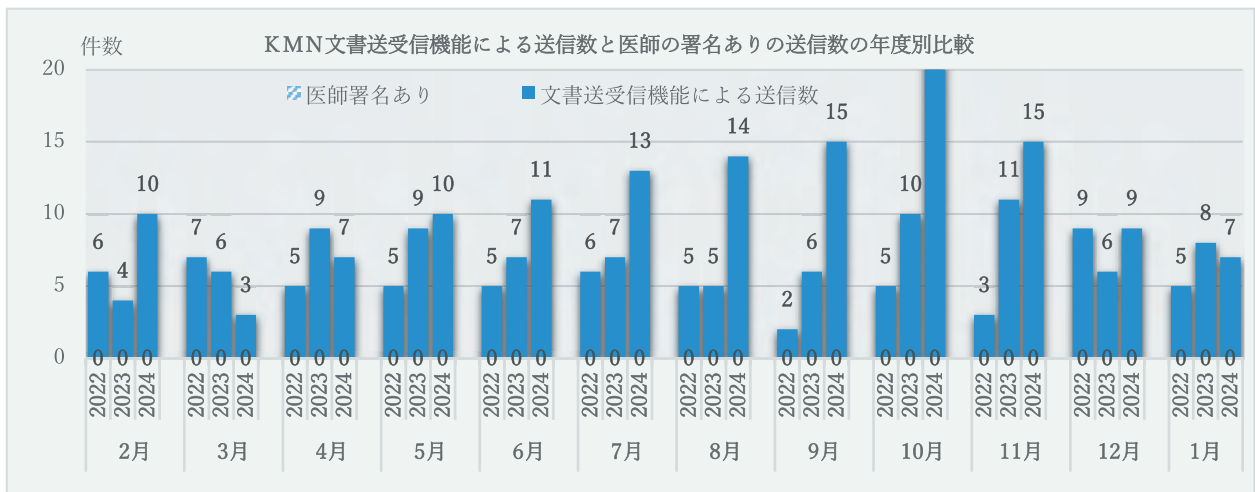
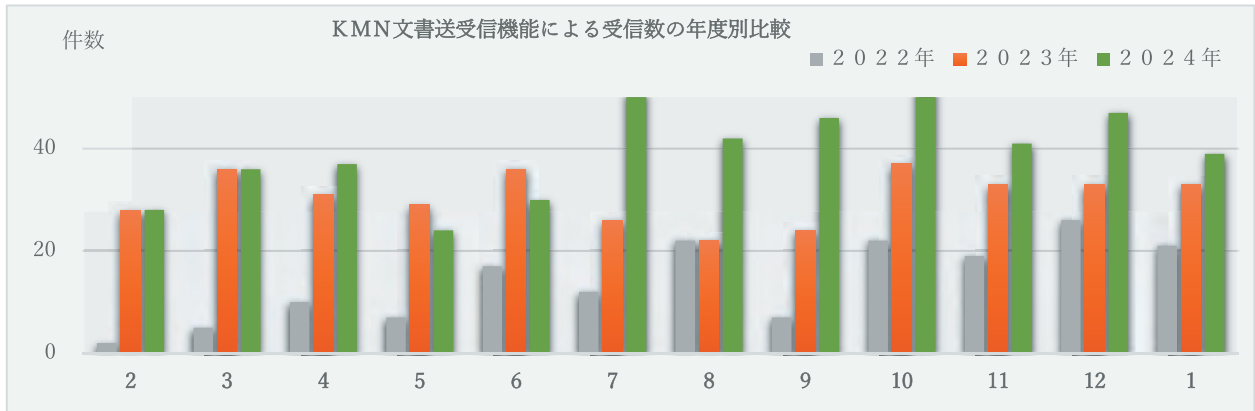
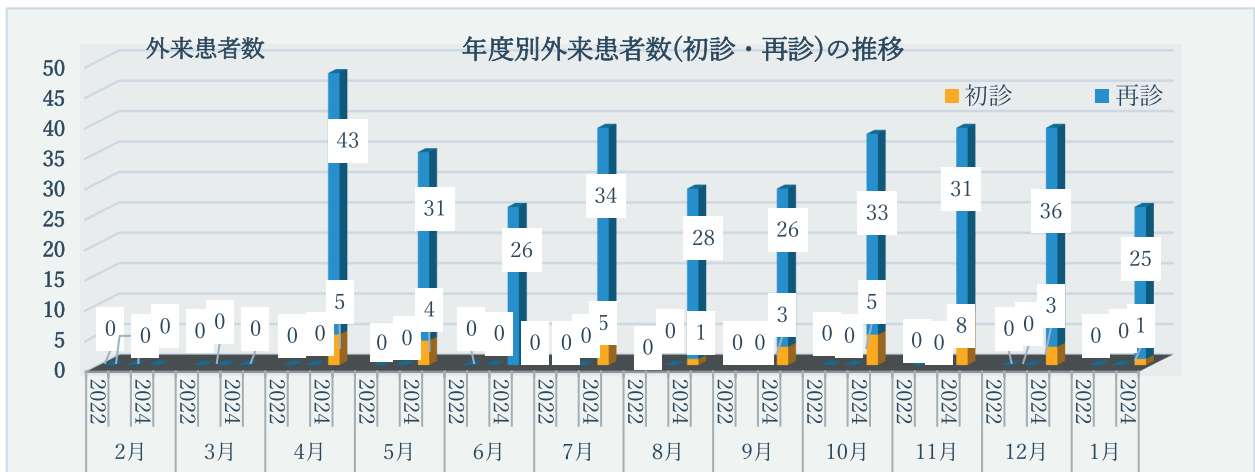
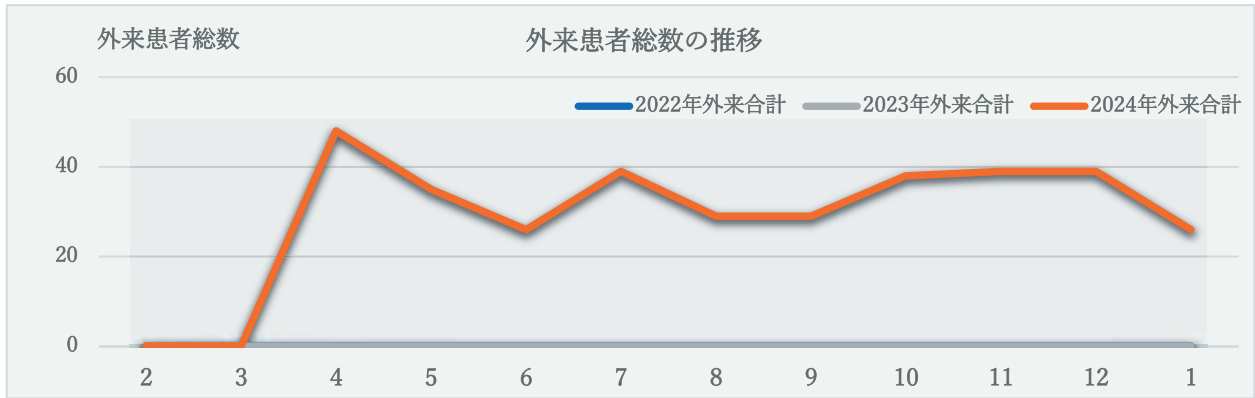
同院には常勤医が不在のため侵襲的精査は困難かと考えます。しかし他院や入院中の患者さんに関して、呼吸器疾患として common disease である COPD や喘息の評価の依頼がある場合に、呼吸機能検査が限られており評価が難しい場合があります。よって、DLco や呼気 NO 側的などができるとより地域医療に貢献ができるかと考えます。

## 小国公立病院 呼吸器内科



地域医療連携ネットワーク実践学 寄附講座

## 山鹿市民医療センター 呼吸器内科



派遣先地域医療拠点病院	熊本再春医療センター、上天草総合病院
氏名	堀尾 雄甲
診療科名	呼吸器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

2024年度より、再春医療センター、上天草総合病院に地域医療連携ネットワーク寄附講座事業として、派遣され、地域近隣の診療所、病院からの紹介患者の診断治療、再紹介、高次医療機関への再紹介を行った。また、くまもとメディカルネットワークの推進のために、近隣医療機関へ参加加入依頼を行ってきた。

呼吸器内科若手常勤医の症例相談、診断、治療方針、学会での発表等のアドバイスをを行い、初期研修医にも呼吸器疾患の指導、アドバイスをを行い、研修医教育にも貢献している。

呼吸器疾患以外にも内科医として地域住民に対して長年苦しんでいた症状の診断治療や教育、生活指導、常用薬の整理を行い、コミュニケーションを重視した良好な医師関係の構築および適切な医療を届けている。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手呼吸器内科医師に対しては、専門医取得に必要な症例登録や要約登録の促し、学術集会参加の勧め、病欠時の外来患者代行、入院患者のアドバイスをを行っている。初期研修医には、呼吸器疾患の診断治療の評価、アドバイス、呼吸器疾患の外来引継ぎを行い、研修医教育にも貢献している。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

2024年度より、再春医療センター、上天草総合病院に地域医療連携ネットワーク寄附講座事業として派遣されており、2024年度以前のデータはない。

### 【再春医療センター】

再春医療センターは、呼吸器内科医師数は6人と比較的多いが、産休・育休の医師も複数いる一方で、呼吸器疾患の地域医療機関からの紹介は多く、院内コンサルトは増加、地域住民の健康管理、予防医療、疾患治療を中心に継続的に診療支援を行っていく必要がある。

### 【上天草総合病院】

上天草総合病院では、主に週末の日直当直の対応を行っている。年々、医師が減少してきているが、患者数は多く、診療支援が必須である。呼吸器内科医師も常勤は一人であり、外来支援が必要と考える。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

くまもとメディカルネットワークの送受信数は再春医療センター、上天草総合病院ともに伸びている。継続して推進していきます。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

### (1) 地域医療の現状と今後の方策の検討

再春医療センターについては、県北地区に同等規模の病院がなく、特に呼吸器内科領域を専門に扱う医療機関はほぼ存在しない。そのため、新規患者の受診が多く、今後も外来支援が必要と考えられる。

上天草総合病院では、毎年医師数が減少し、それに伴い診療科も縮小している。特に外科領域では手術が難しい状況にあり、地域医療の充実が課題となっている。呼吸器内科に関しては、来年度より自治医科大学卒の地域枠の若手医師の派遣が決まっており、外来支援も追加される予定である。さらに、地域枠の若手医師の支援を強化し、天草医療センターとの連携を深めることで、より高度な専門医療の提供が可能となる見込みである。

### (2) 専門医療の実践と診療支援

専門的な診断・治療を提供しながら、総合内科領域においても高い専門性を活かした診療を行った。

### (3) 若手医師への指導

症例の相談対応、検査・治療方針の助言、学会発表や論文作成の指導、専門医取得の支援など、多岐にわたる教育活動を行った。

#### (4) 地域住民・医療従事者への啓蒙活動

予防医療の推進を目的とし、ワクチン接種の重要性を周知するとともに、自宅でできるリハビリテーションに関する情報提供を行った。

#### (5) くまもとメディカルネットワークの普及

送受信数が増加し、新規加入者も増えていることから、地域医療の連携強化が進んでいる。

### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

2024年4月より施行された医療機関の働き方改革により、地域医療の在り方が大きく変わろうとしている。これまで、常勤医の少ない病院でも夜間・休日の医療提供を医師の負担のもとで維持してきた。しかし、医療スタッフの減少と相まって、今後は医療機関の受け入れ体制が厳しくなる可能性がある。特に地方では医師不足が深刻化し、診療科の縮小や救急医療の対応困難といった課題が顕在化している。

このような状況を踏まえ、解決策としては以下の点が重要となる。

#### (1) 地域住民への啓蒙活動の強化

医療資源の適正利用を促進するため、夜間・休日の受診基準やセルフケアの指導を行う。また、軽症患者の一次医療機関での対応を促すことで、医療機関の負担軽減を図る。

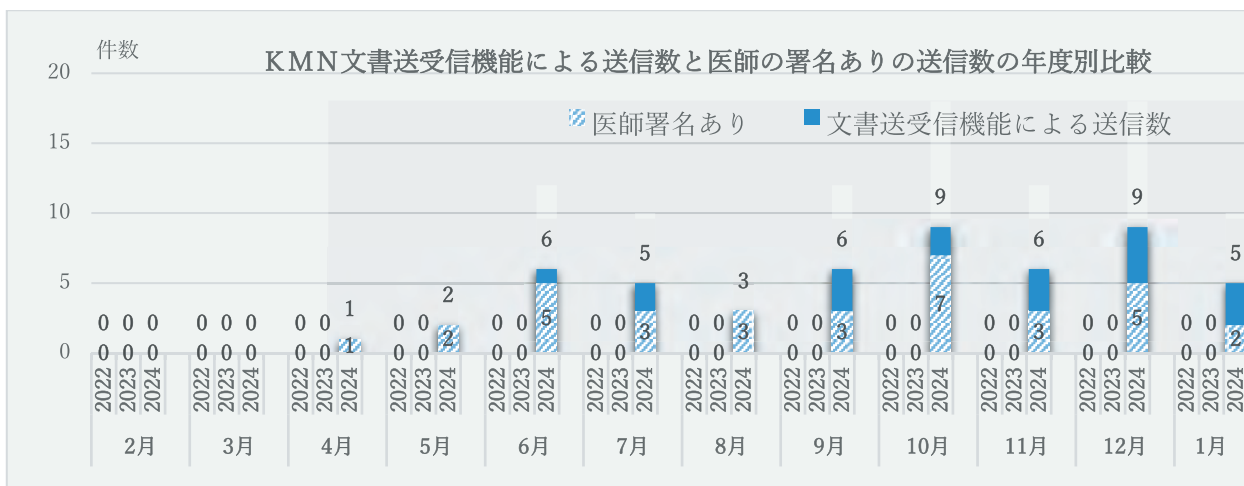
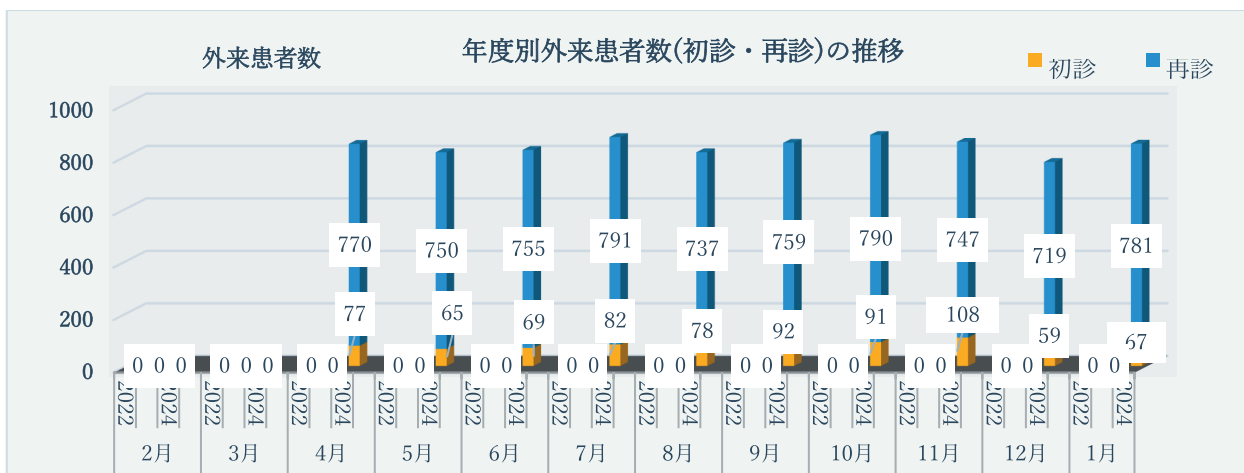
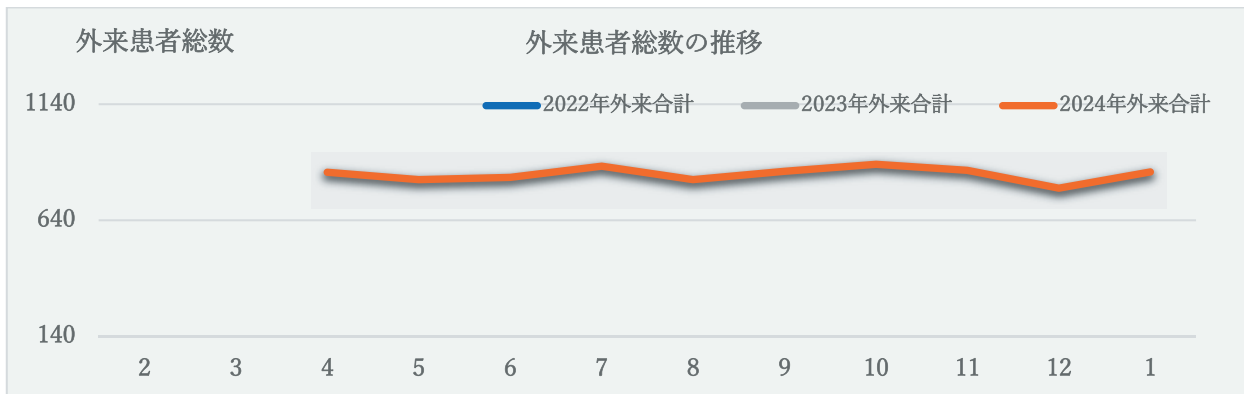
#### (2) 夜間・休日診療体制の見直し

医師の負担を軽減しつつ継続的な医療提供を維持するため、夜間・休日診療後の休息時間の確保を徹底する。また、常勤・非常勤医師の連携を強化し、シフト制を取り入れることで、より持続可能な診療体制を構築する。

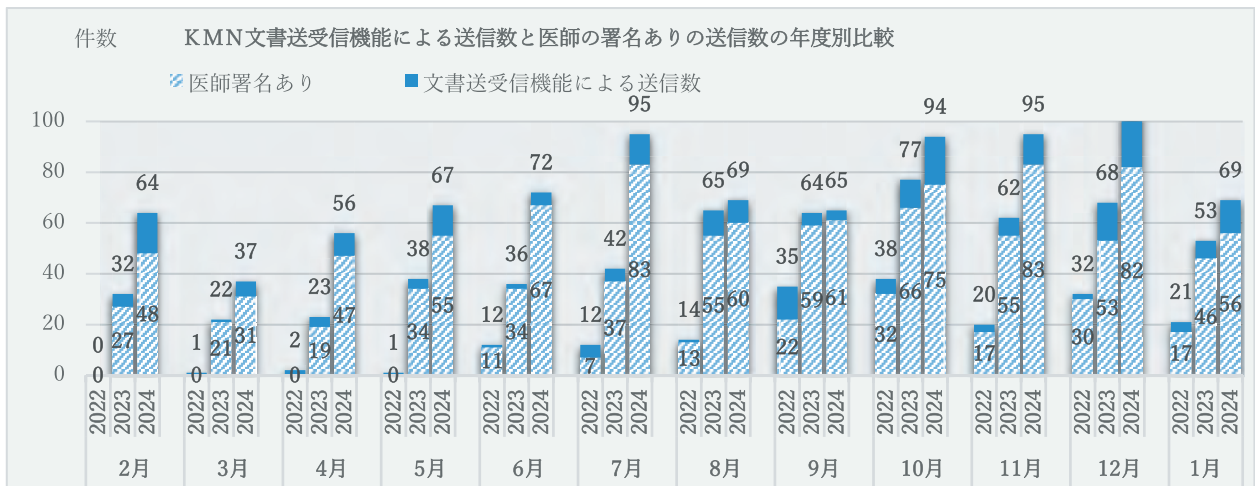
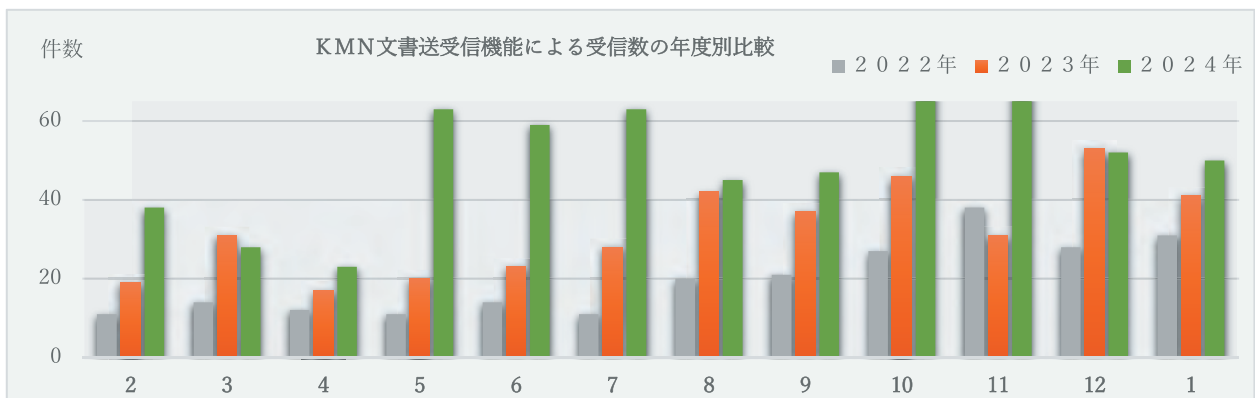
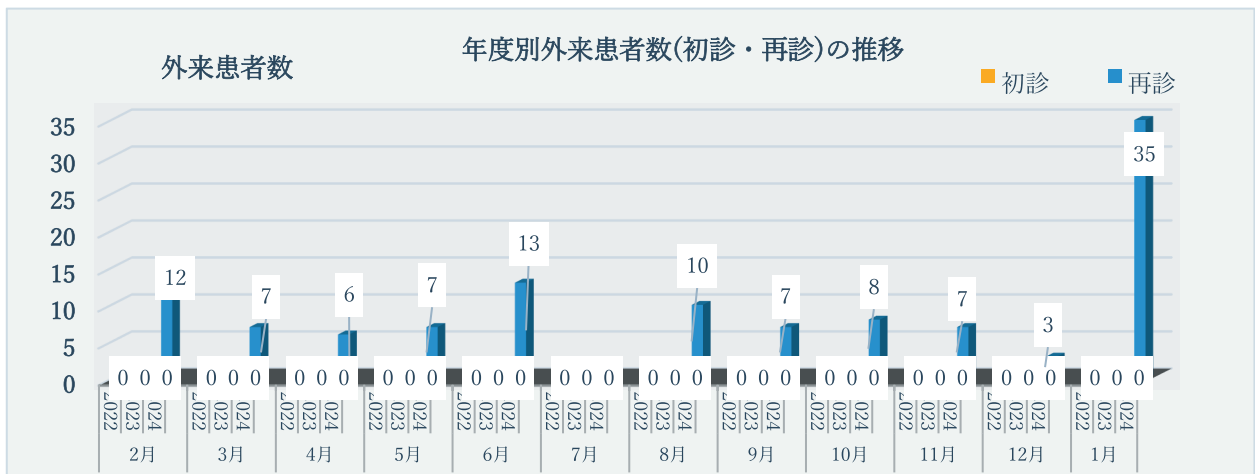
#### (3) 若手医師の育成と地域医療への貢献

若手医師が成長し、一人前の医師として自立できるよう、教育・支援・学びの機会を提供することが不可欠である。熊本大学病院の地域連携ネットワーク寄附講座を活用し、地方医療の現場での研修機会を増やし、地域医療を担う人材の育成に努めたい。

熊本再春医療センター 呼吸器内科



上天草総合病院 呼吸器内科



地域医療連携ネットワーク実践学寄附講座

派遣先地域医療拠点病院	阿蘇医療センター
氏名	徳永 堯之
診療科名	消化器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

### 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

3人の消化器内科医が、月・水・金に診療支援を行っている。消化器症状を有する初診患者、消化管・肝・胆膵疾患患者の定期外来、二次検診、消化管内視鏡検査および治療を行っている。

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

とくに対象となる医師がいない。

### 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

消化管・肝疾患、胆膵疾患患者の診療として、診察、血液尿検査、腹部超音波検査、CT検査、MRI検査、生物学的製剤および化学療法を含む内科的治療を行っている。

また、二次検診、消化管内視鏡検査、内視鏡的粘膜切除術も行っている。当年度は、初診患者数169名、再診患者数1386名であった。

### 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

主に熊本大学に紹介する際、あるいは逆紹介する際に熊本メディカルネットワーク（紹介状、検査結果、画像データおよびレポート）を使用している。当年度の新規参加者は129名で、文書送受信機能による受信を626件、文書送受信機能による送信を480件行った。

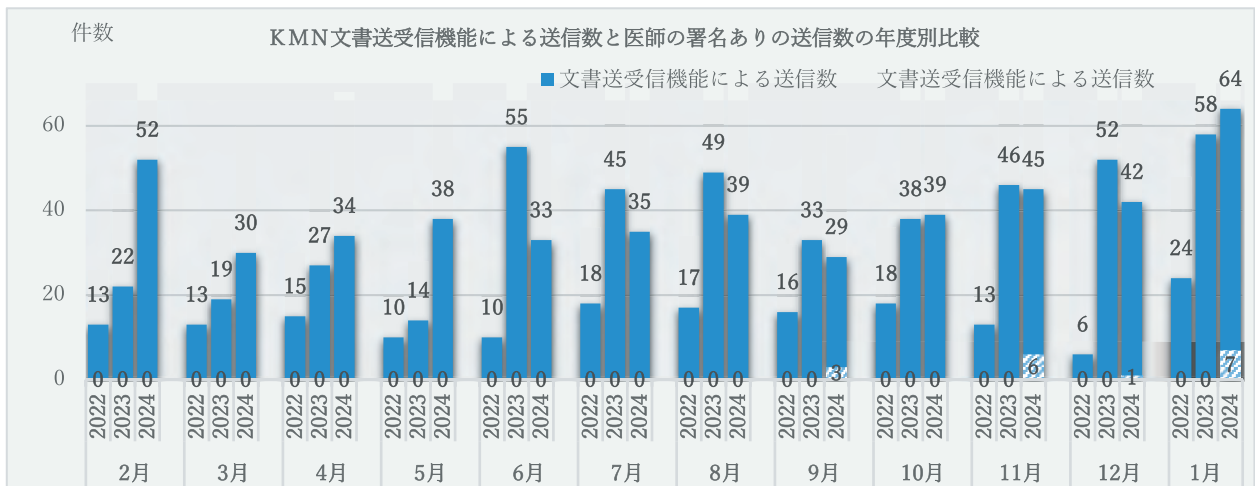
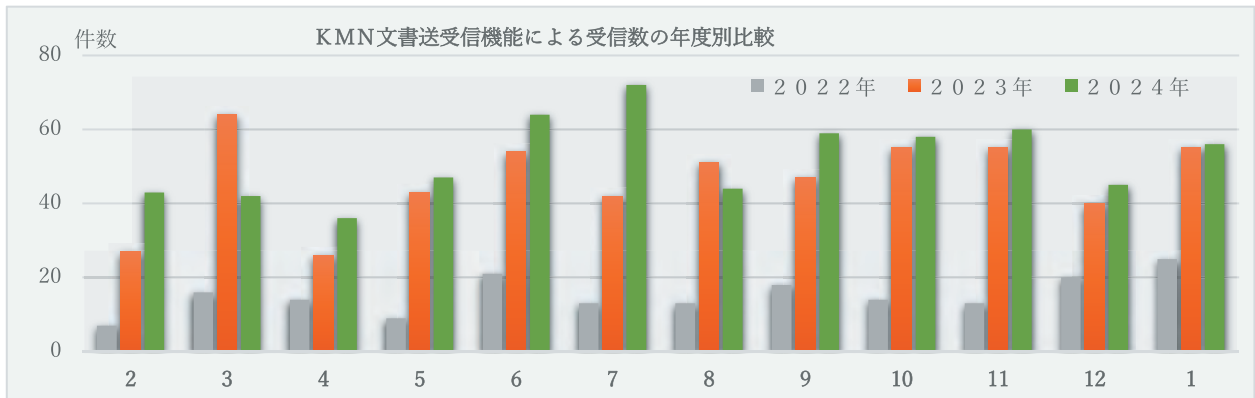
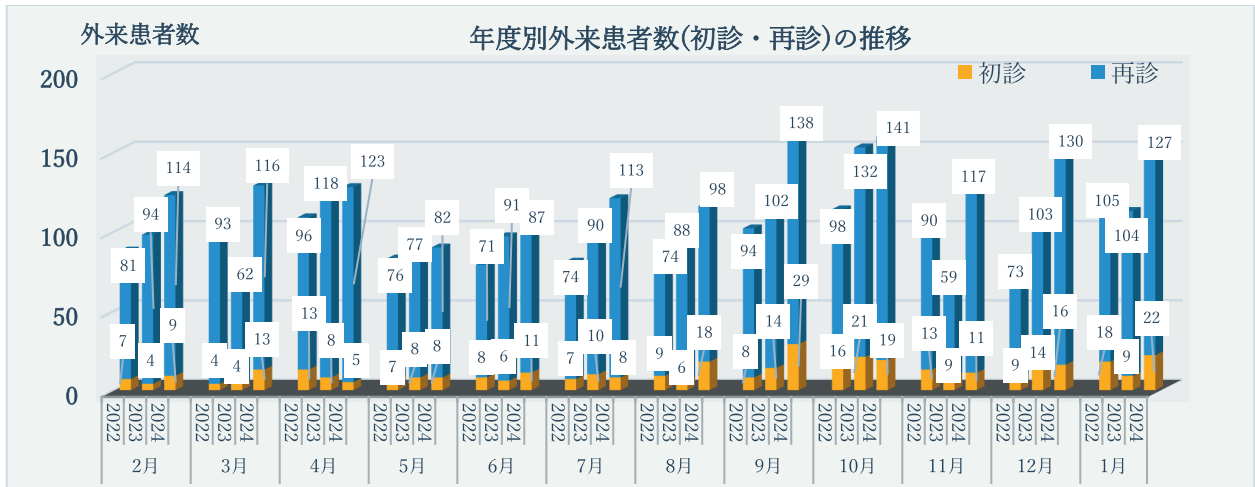
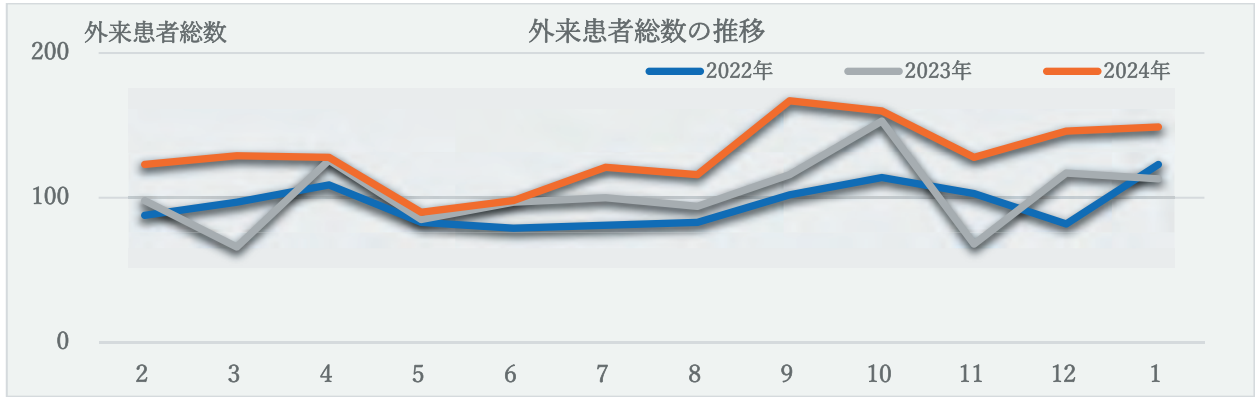
### 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

阿蘇地域の消化器疾患の診療および健診を通じての健康促進に貢献している。阿蘇医療センターで診療を完結できない症例は主に熊本大学病院に紹介している。熊本大学病院の診療後には当施設で引き続き診療に当たっている。

### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

引き続き阿蘇地域の診療支援を行っていく。

## 阿蘇医療センター 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院	熊本労災病院
氏名	松野 健司
診療科名	消化器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 消化器病学会指導医/内視鏡学会指導医の資格を有しており、消化管内視鏡検査および内視鏡治療の実施、若手医師の指導を行っている。特に治療難易度の高い内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）については中心的に実施および若手医師への指導を行っている。
- 内視鏡治療以外でも消化管領域については相談の機会を設け、推奨される方針などを提示している。消化管以外の領域についても相談を受けた場合には、熊本大学の各専門医師へ情報提供して推奨される方針などを確認し、その方針を伝達している。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

- 熊本労災病院消化器内科に所属する熊本県の修学資金貸与医師等若手医師1名を含め、同院の若手消化器内科医師へ指導を行った。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

- 2022年度から2024年度にかけて、外来患者数・入院患者数ともにほぼ横ばいから微増で推移している。熊本市内への症例集中が進む中で、地域医療を維持できているデータを示していると考えられる。手術件数も増加しており、地域医療連携ネットワーク寄附講座医師が応援することで、治療を完結できていることも一因となっていると考えられる。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

- 熊本県内の拠点病院や八代圏域の中核病院、一般診療所とのオンライン連携を実践しており、メディカルネットワーク利用件数は増加傾向である。

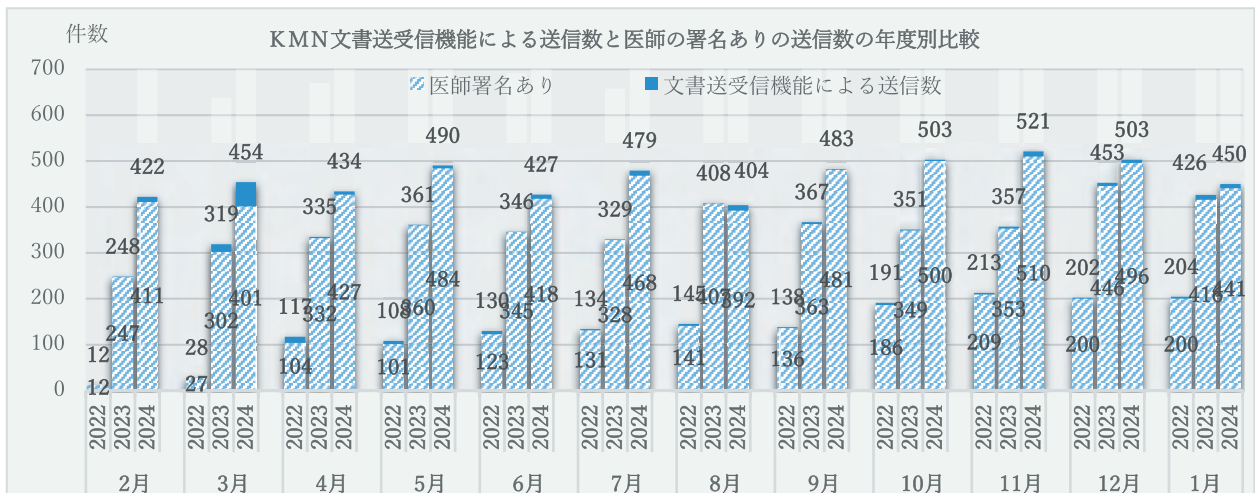
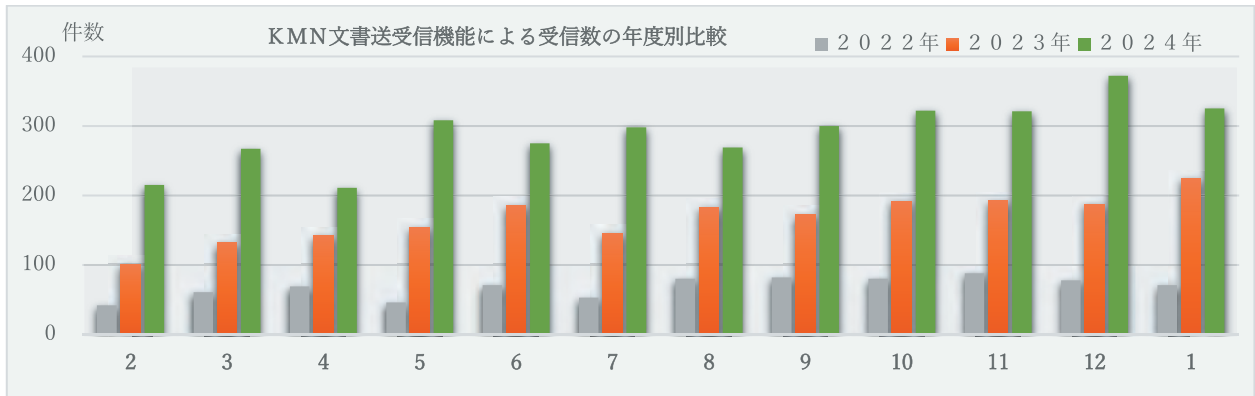
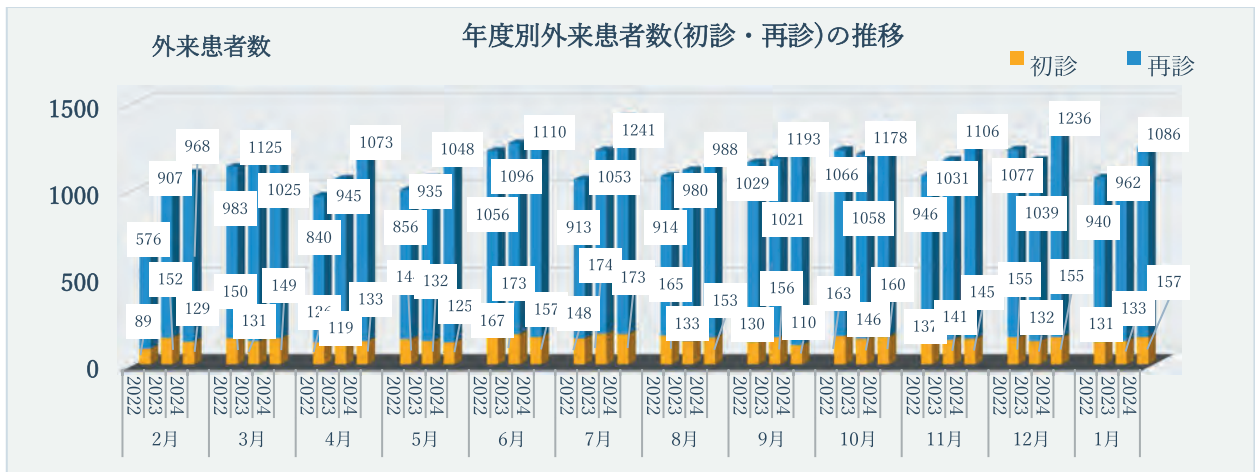
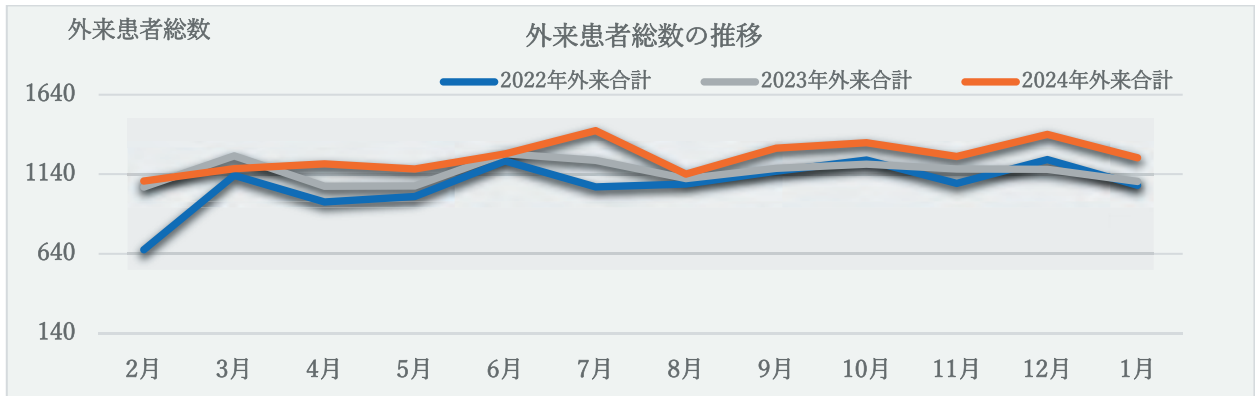
## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

- 熊本労災病院は八代地域のみならず熊本県南地域における中核病院の1つとして救急医療をはじめとする地域の高度専門医療を担っている。
- また熊本大学病院から医師が赴任することで定期的に医療連携の機会を設けることができ、より専門性が高い症例については転院加療などにスムーズに移行することができる。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

- 消化器内科診療は、消化管疾患・胆膵疾患・肝疾患と多岐にわたり、近年それぞれの分野内でも専門性がより高くなってきている。地域医療拠点病院において専門医師が各分野全てで揃うことは現実的には難しい。各病院の苦手分野などを、今後も地域医療連携ネットワーク寄附講座による専門医・指導医の医師派遣などで補っていく必要があると考えられる。

## 熊本労災病院 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院	有明医療センター
氏名	飯尾 悦子
診療科名	消化器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

### 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

近隣の医療機関からの患者様をご紹介いただき、精査加療を行い、かかりつけ医の先生と連携しています。院内のHBV,HCV患者の拾い上げに関して、中央検査部と協力して取り組んでいます。

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

研修医等と接する機会はありませんでしたが、今後は研修医への肝臓疾患の教育・指導なども行っていきたいと思えます。

### 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

近隣の医療機関からの紹介患者さん、また健診2次精査などに対応しています。

### 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMNで大学と有明医療センター間のデータやり取りは増えています。近隣開業医さんではKMN非対応が多く、いまだ紙媒体でのFAXでのやり取りが多いのが現状です。

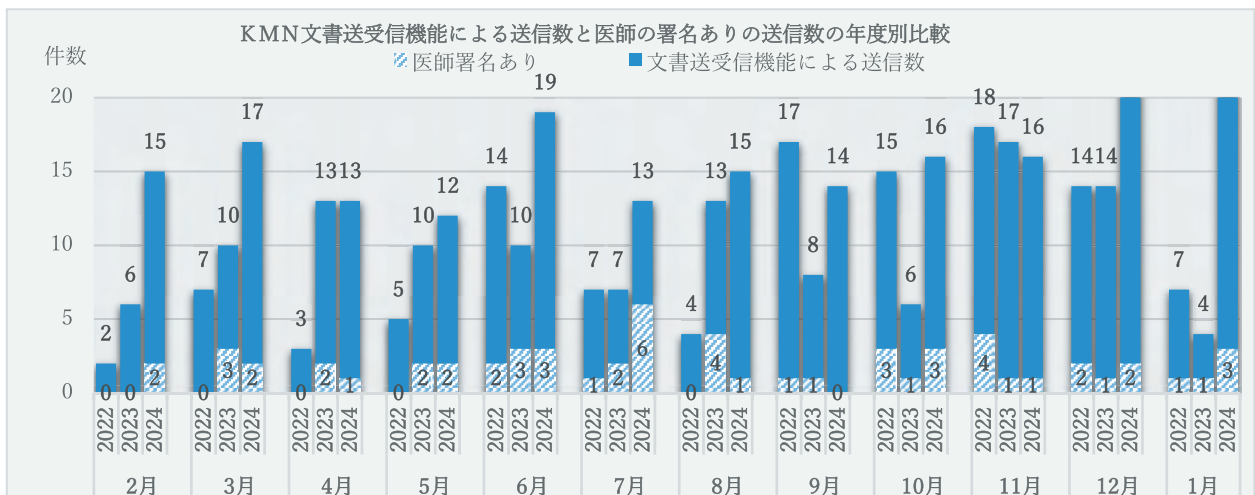
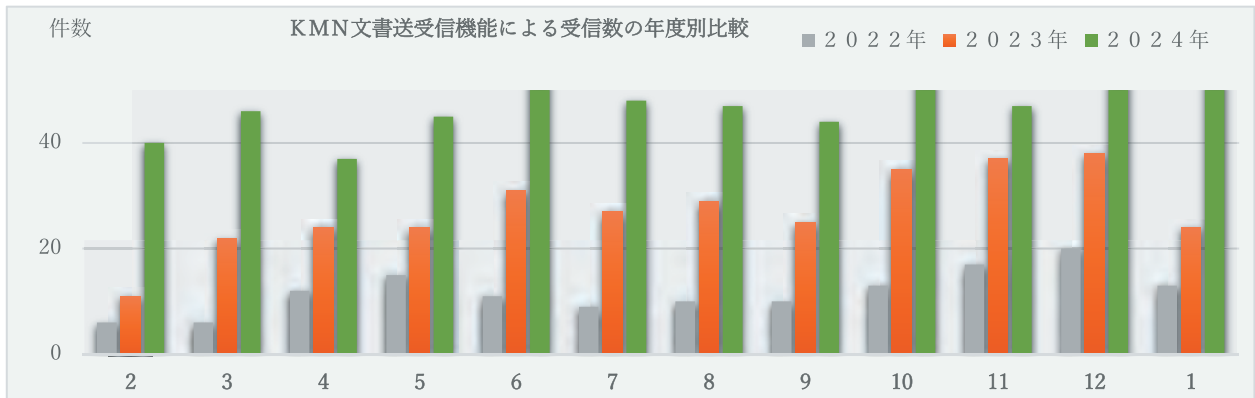
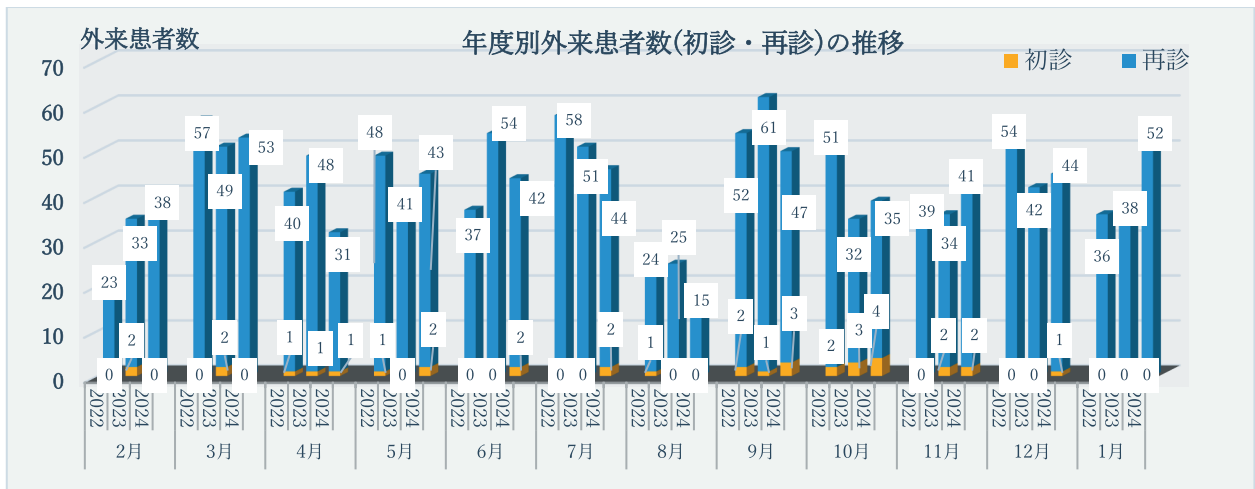
### 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域の開業医さんからの紹介患者さんの精査、また、さらに高次医療機関での精査治療が必要な場合は大学病院へ紹介しています。

### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

熊本県は全国的にも肝臓が多く、またかなり進行した状態で発見されることも多いため、早期発見、早期治療のために地域の医療機関との連携が必要と思われます。

## 荒尾市立有明医療センター 消化器内科



派遣先地域医療拠点病院	熊本総合病院
氏名	坂田 康明
診療科名	血液・膠原病・感染症内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

熊本総合病院を拠点として、県南地域の膠原病領域の診療支援と病診連携の推進、KMN ネットワークの普及を目標に活動した。年々、近隣施設との診療交流は円滑となり、逆紹介の数も増えている。KMN ネットワークの使用実績も昨年を上回る結果であった。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

当科所属の地域枠の若手医師が、同院の常勤として勤務しており、週1回の外来勤務日の度に入院・外来症例について診療方針相談や指導を行っている。熊本総合病院には日本リウマチ学会指導医（非常勤1名＝小生）、専門医（非常勤1名、常勤1名）が勤務しており、日本リウマチ学会認定教育施設の資格を維持しており、若手医師の専門医キャリアのための研修期間としてカウントされる。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

週1回のリウマチ膠原病専門外来にて、初診2名＋外来20人前後の診療を行っている。地域の中核病院の専門医とも連携し、主に精査と寛解導入を熊本総合病院で行い、安定されたら地域の医療機関へ逆紹介を行っており、およそ毎月5例程度は逆紹介を行っている。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMN ネットワークの利用状況については、送信数1436件（前年比1.7倍）、受診数1984件（前年比1.6倍）と、前年と比較して飛躍的に伸びている。KMN 新規参加者数は年間88件と前年より落ち着きつつあるものの、これは既存の定期通院患者の登録がほぼ終了し、新規患者への案内に限られてきたことが要因と思われる。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

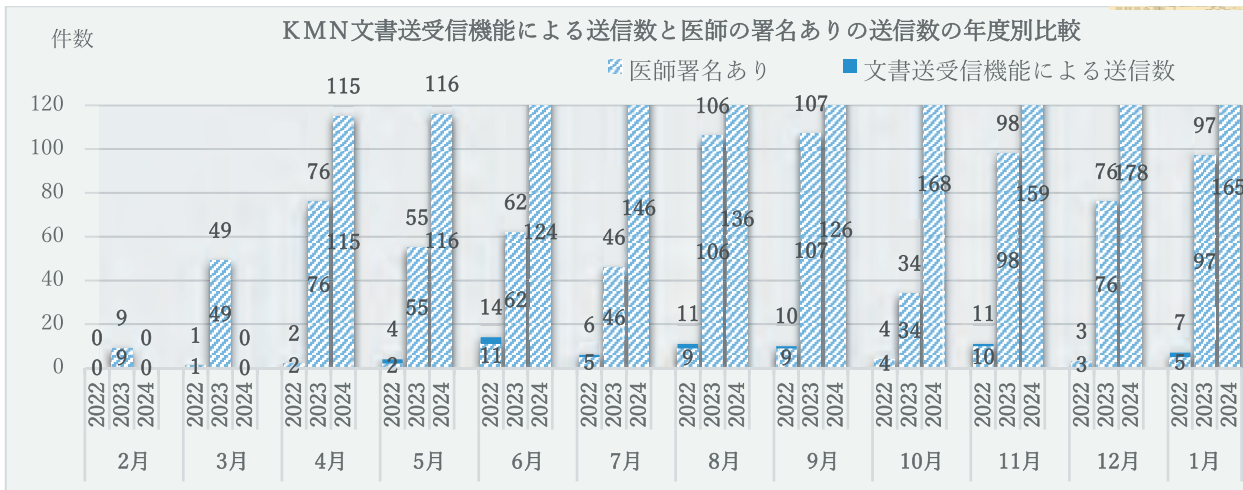
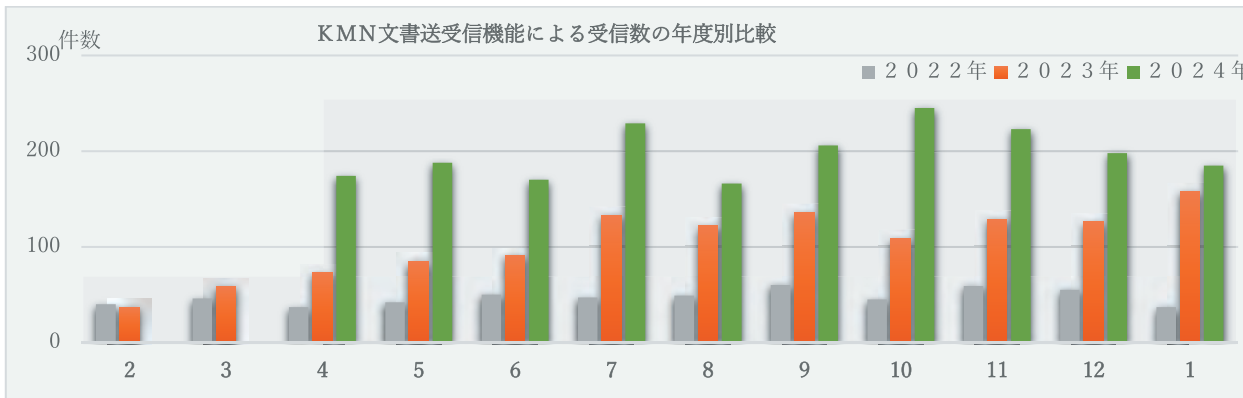
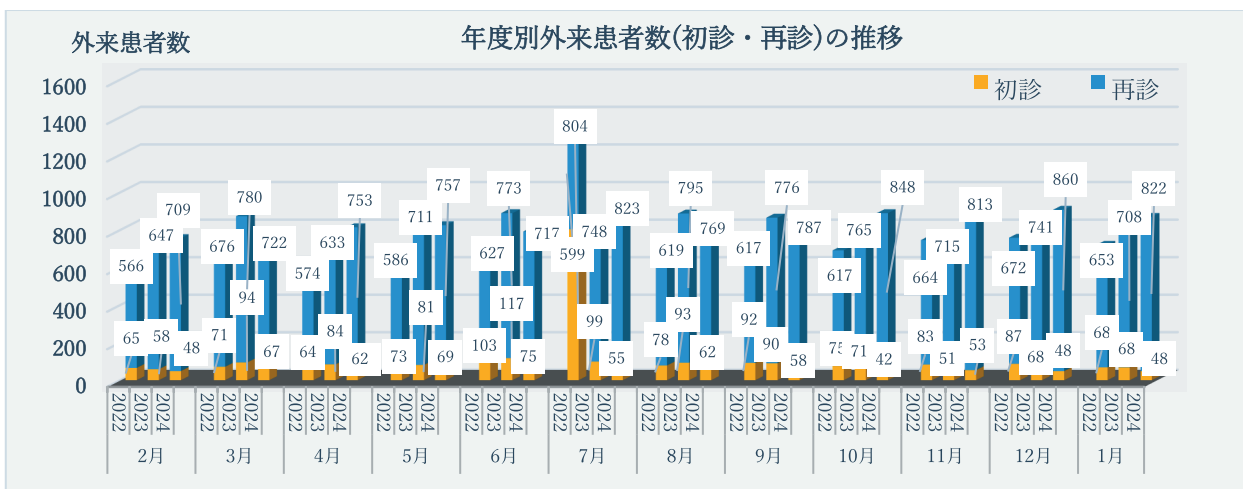
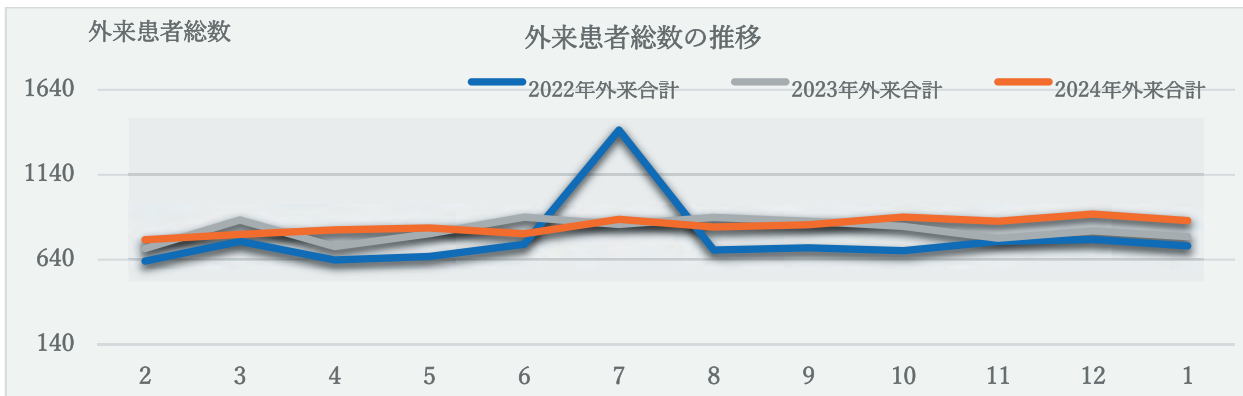
医療圏としては県南地域（人吉、水俣）や鹿児島県出水市までを主にカバーしており、地域の医療施設で可能な状態まで安定した患者については、近隣の病院やクリニックへ逆紹介を行い、病診連携を進めている。

また、年に1-2回は八代地域での講演会に参加し、地域における膠原病診療のアップデートと周辺の医療関係者との交流を行った。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

八代地域からさらに南方の水俣や出水市では十分なフォローを依頼できる医療機関が少なく、県南地域に限っても医師の偏在は見られる。また、地域の高齢化により、多疾患併存症例や通院困難例もあり、地域総合病院の充実と、訪問診療の充実の両面が必要と思われる。

熊本総合病院 血液・膠原病・感染症内科



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、上天草総合病院
氏名	小野 薫
診療科名	糖尿病代謝内分泌内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

### 【小国公立病院】

総合診療科内で、糖尿病内分泌疾患を主に診療している。血糖コントロール不良の症例、インスリン療法の導入、甲状腺・副腎疾患の紹介などが増え専門性が高まっている。患者数は増加傾向にあり、高齢化を理由に、熊本市、大分県日田市の医療機関からの紹介されてくる患者も増えている。

月に1回、小国郷糖尿病対策チームブルーの定例会に参加している。病院スタッフや、小国圏域の保健師で構成された糖尿病対策チームであり、毎月40名ほどの患者について受診状況、生活状況や保健指導の内容などの情報を共有し、糖尿病合併症予防につなげるとともに、糖尿病の一般的な知識に加え、新規薬剤やその副作用、新たなデバイスの紹介などの情報発信に努めている。また2024年10月に研修会を実施し講演を行った。医療従事者、保健師等多くの方に参加いただいた。

### 【上天草総合病院】

代謝内科は週2日間の専門外来を行っている。外来は2型糖尿病の他、1型糖尿病、その他疾患による糖尿病（膵摘出後、肝硬変、遺伝子異常等）などがあり、専門性が高い。経時的な血糖測定が可能なCGM（Continuous Glucose Monitoring、持続血糖測定）の導入も進んでおり、専門医療の向上に貢献していると考えている。内分泌科は甲状腺、副腎の疾患を中心に取り扱い、近隣医療機関からの紹介も多く、必要時は大学病院に紹介している。糖尿病などは病状が安定すれば、積極的に逆紹介を行っており、医療圏内である程度循環されていると考えている。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

インスリン療法、内分泌疾患の診断・治療に際し相談があれば指導を行っている。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

### 【小国公立病院】

年度別外来患者総数は、2022年 16647人、2023年15110人、2024年17082人で外来患者総数も年々増加傾向にある。

### 【上天草総合病院】

外来患者数に関しては減少しています。こちらで把握できる情報に限界がありますので分析はしておりませんが、おそらく外来担当医の移動・減少によると思われる。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

### 【小国公立病院】

新規参加者は多くない。さらなる努力が必要だと思います。しかしながら地域的に住民数が少なく、高齢化、少子化を考えれば今後数を増やすのは難しいのではないかと思います。KMNを使用した文書送信数は伸びており、浸透してきていると考えますが、今後も派遣医師から使用数を伸ばすよう努力します。

### 【上天草総合病院】

KMNの新規参加者数はここ3年は増加傾向にある。送信数、医師署名ありの送信数も増加傾向であり浸透しつつあると考える。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

### 【小国公立病院】

小国公立病院は県境にあり周辺医療機関が少ないことから、中核病院とかけつけ医療機関の両方の役割があります。総合内科的なスキルを求められている印象です。当科に関しては、徐々に糖尿病の紹介患者が増え、自ずとスタッフの専門的な知識も増えたのではないかと思います。良い傾向が見えていると思います。

【上天草総合病院】

糖尿病内分泌科としては、専門医が派遣されており、特殊な手技、機材が必要な疾患は少ないことから過不足なく医療を提供できていると考えます。病院としても糖尿病教室等があり、啓蒙活動等も行われていると思います。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

---

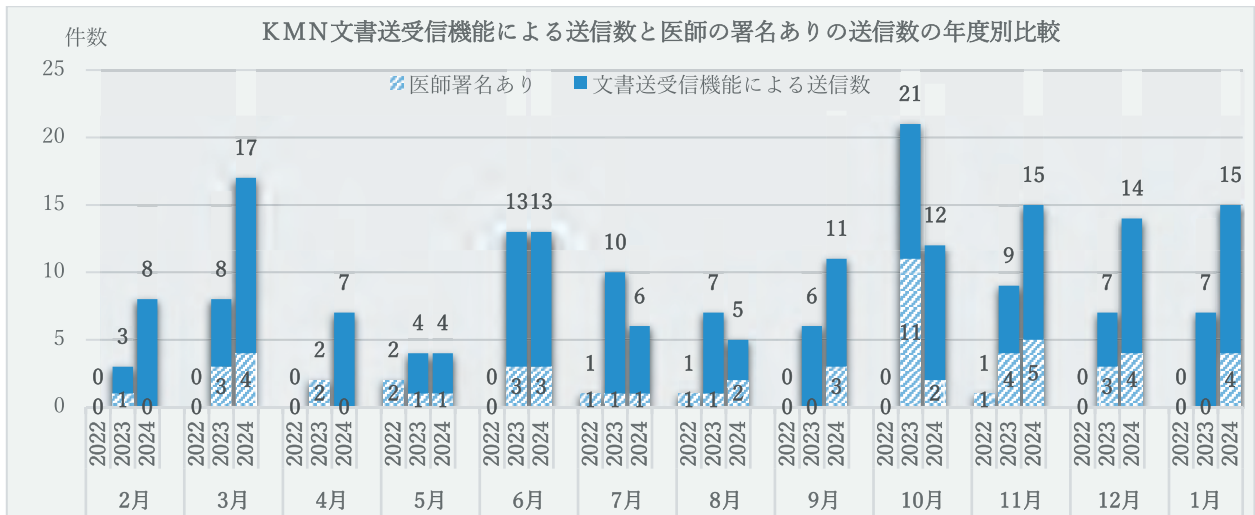
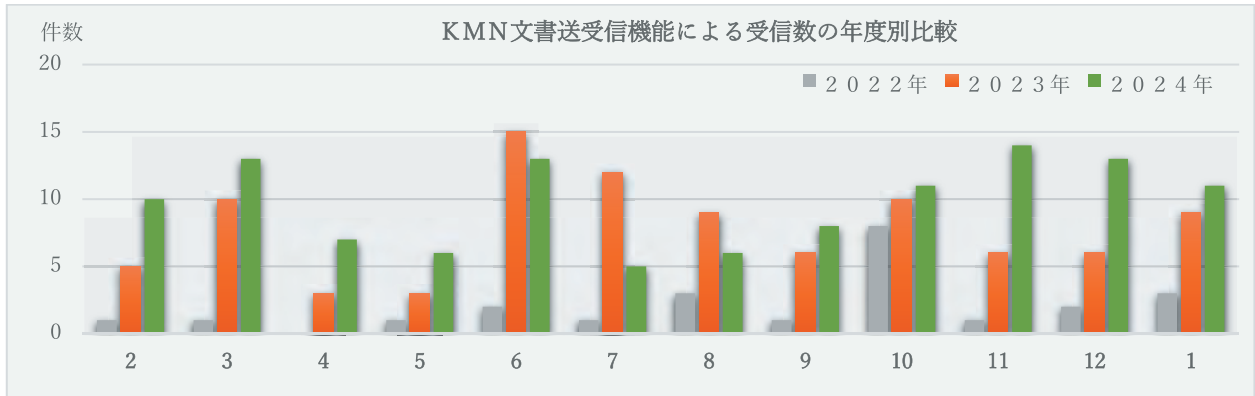
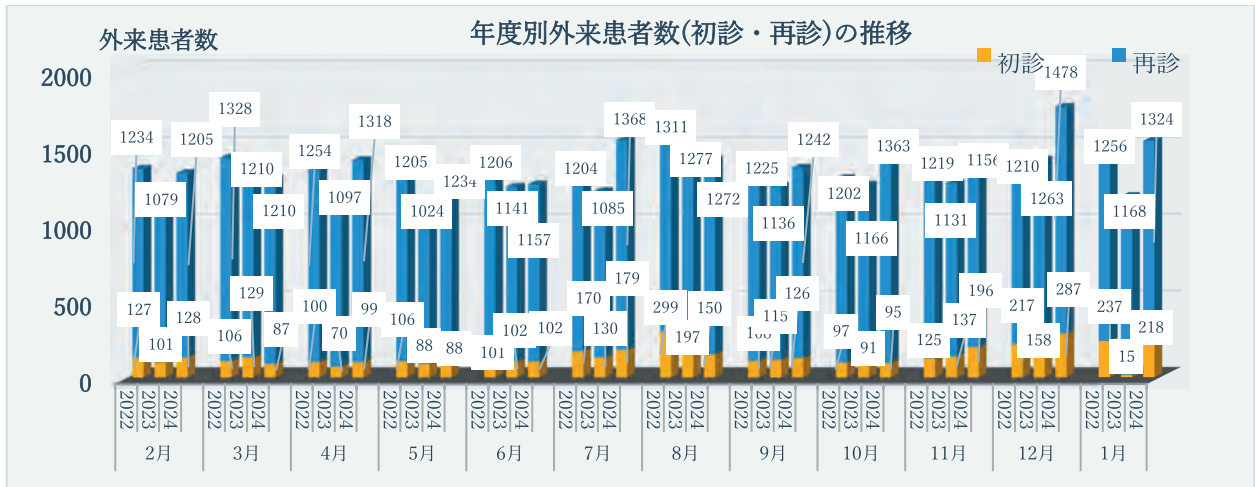
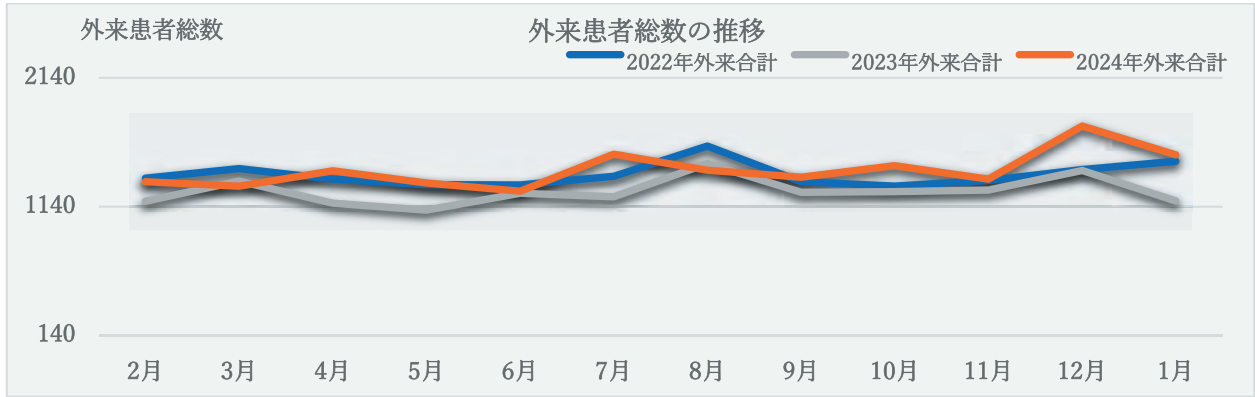
【小国公立病院】

マンパワー不足は否めません。また、次のステップとしては地域住民に対する啓蒙活動が重要と考えています。

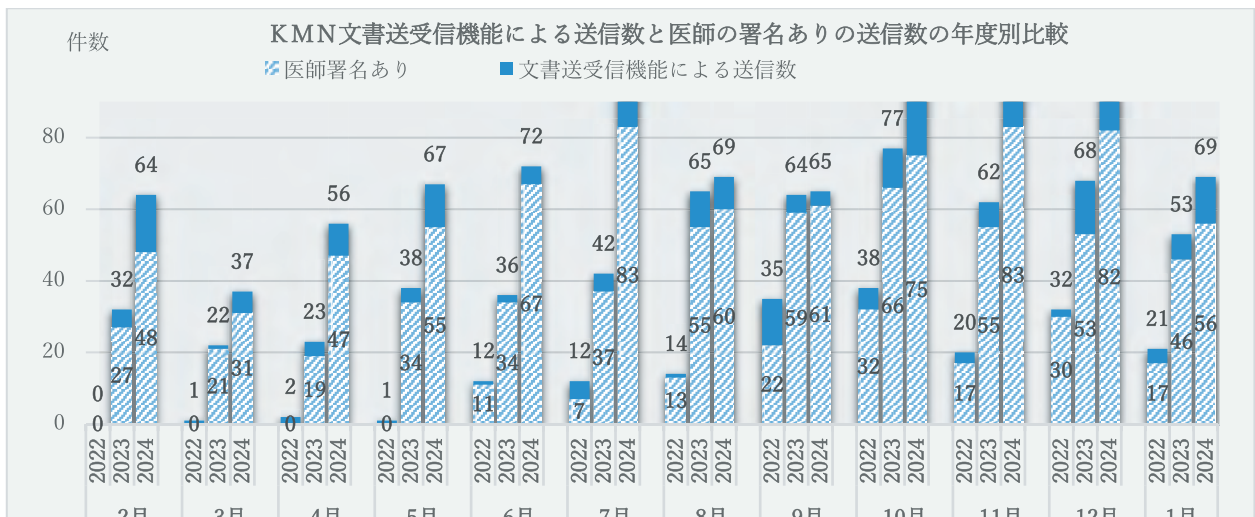
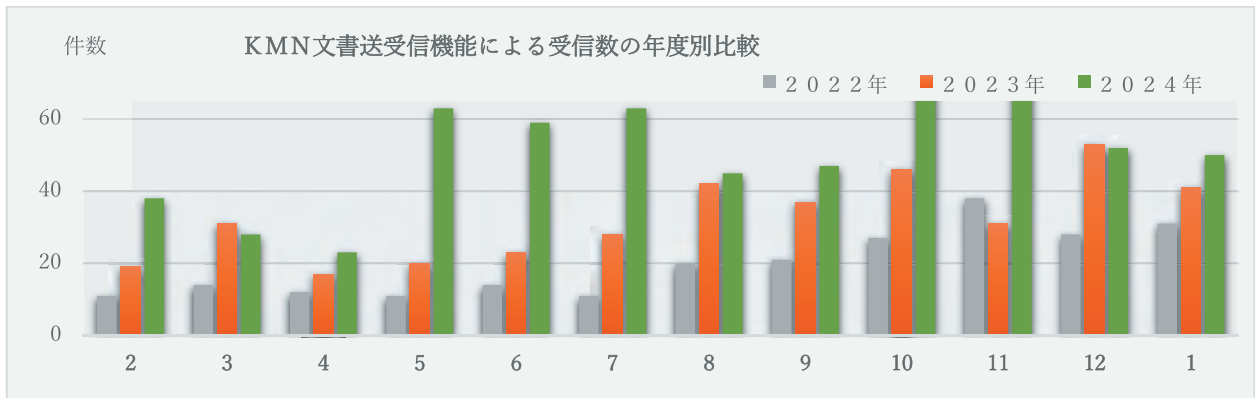
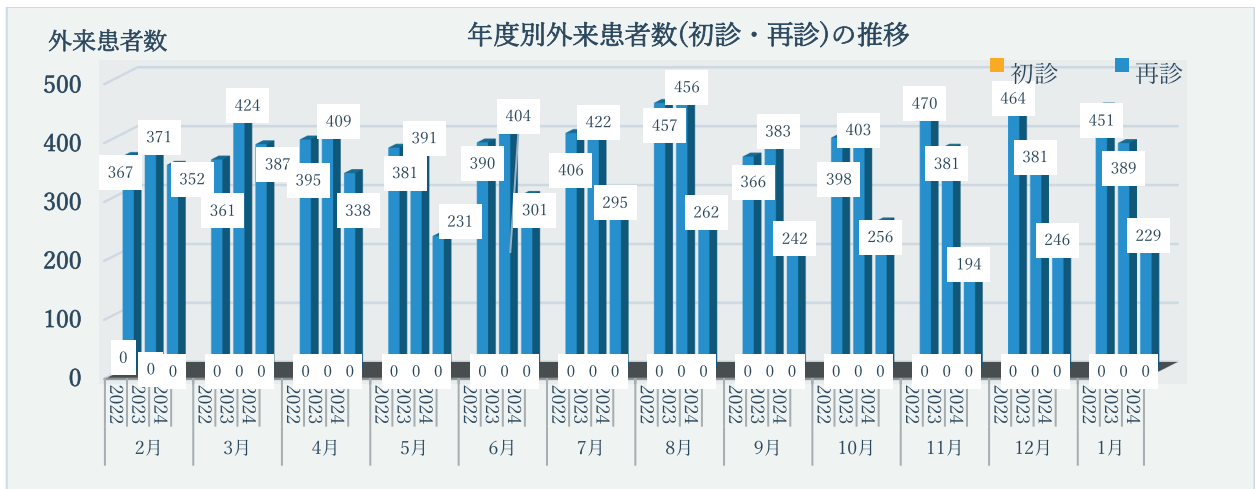
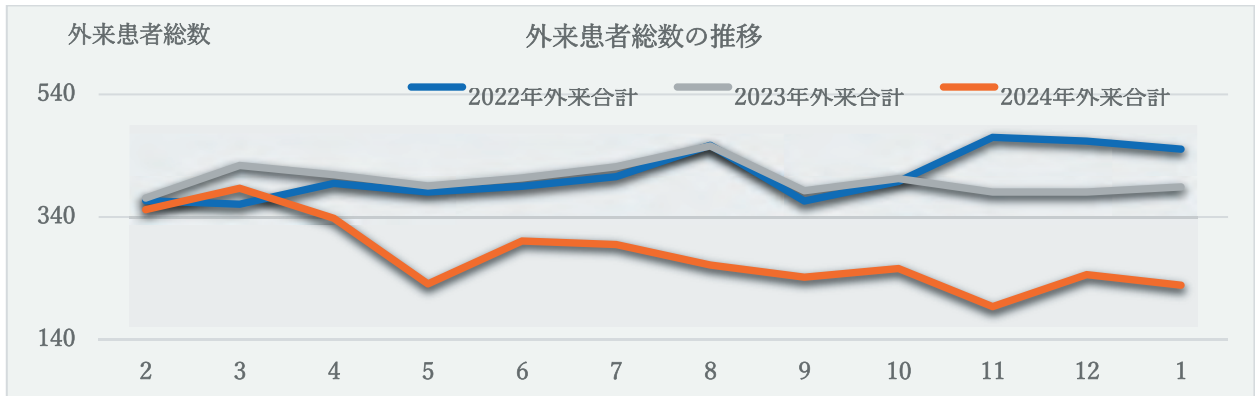
【上天草総合病院】

発症予防も重要な点と考えており、これに関する啓蒙活動はやや不十分と思います。

## 小国公立病院 糖尿病代謝内分泌内科



上天草総合病院 糖尿病代謝内分泌内科



派遣先地域医療拠点病院	上天草総合病院
氏名	山本 正啓
診療科名	循環器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 午前中の循環器内科外来業務の中で、循環器専門疾患のスクリーニングや専門医療機関への紹介、その後の医療の提供やリハビリテーションの案内を行っている。（拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供。）
  - \*重症下肢虚血の早期発見。心臓アミロイドーシスのタファミジスによる外来治療。高度冠動脈三枝病変の評価や治療。慢性心筋炎・心臓サルコイドーシスのステロイド治療。など重症疾患の診療が増えております。
- 派遣業務中、拠点病院 循環器内科医師が、地域の看護学校の講義を実施いただいている。（熊本県医師修学資金貸与医師や自治医科大学卒業医師の地域勤務と、新専門医制度を踏まえたキャリア形成の両立に向けた支援。）
- 大学病院や周辺施設との診療情報の共有に際してはくまもとメディカルネットワークを積極的に使用している。（各拠点病院が取り組んでいる「くまもとメディカルネットワーク」の普及活動の支援。）
  - \*上天草総合病院に関しては、くまもとメディカルネットワークの使用が各部署に浸透しており、医師としては、特に抵抗なく利用ができております。
- 午後はホルター心電図読影や、冠動脈造影 CT 検査、心臓カテーテル検査、心臓カテーテル治療を行い、専門医療の提供を行っている。（拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供。）
  - \*令和6年度の取り組みとして、重症心不全に対し、専門医複数名を要するカテーテル治療を実施し、成功しております。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

心臓カテーテル検査に同席していただき、指導を行っている。この活動に関しては、山本を派遣いただいていることにより、同院にその時間帯だけではあるが、循環器専門医が複数名在住することになる。そのために実施できていると考える。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

午前中 外来 平均 40名/月程度、ホルター心電図 読影件数 平均 25件/月程度

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

上天草総合病院に関しては、くまもとメディカルネットワークの使用が各部署に浸透しており、医師としては、特に抵抗なく利用ができております。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

各業務を通して、地域医療拠点病院としての役割の一部を担っております。

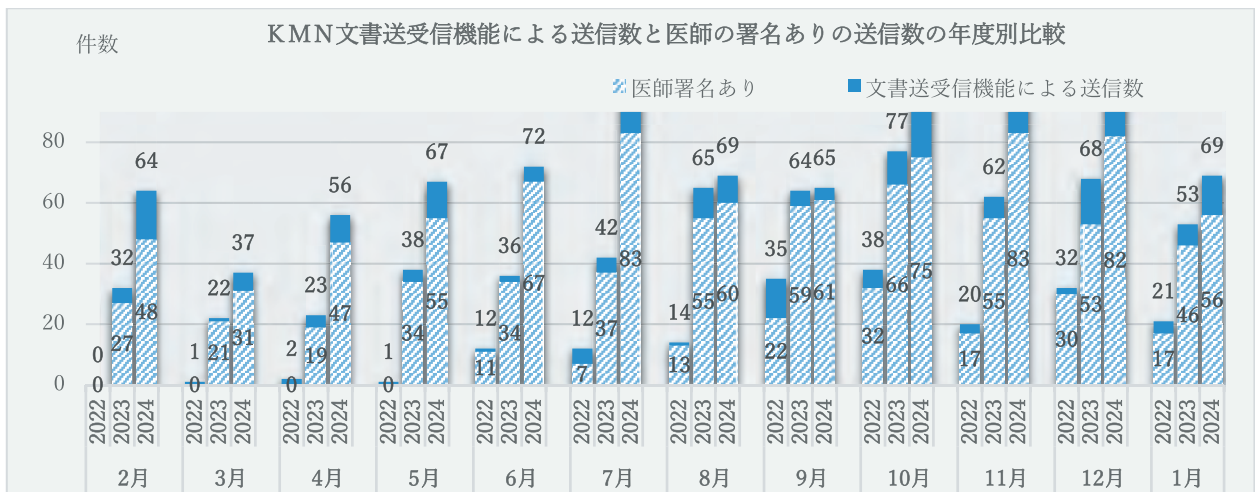
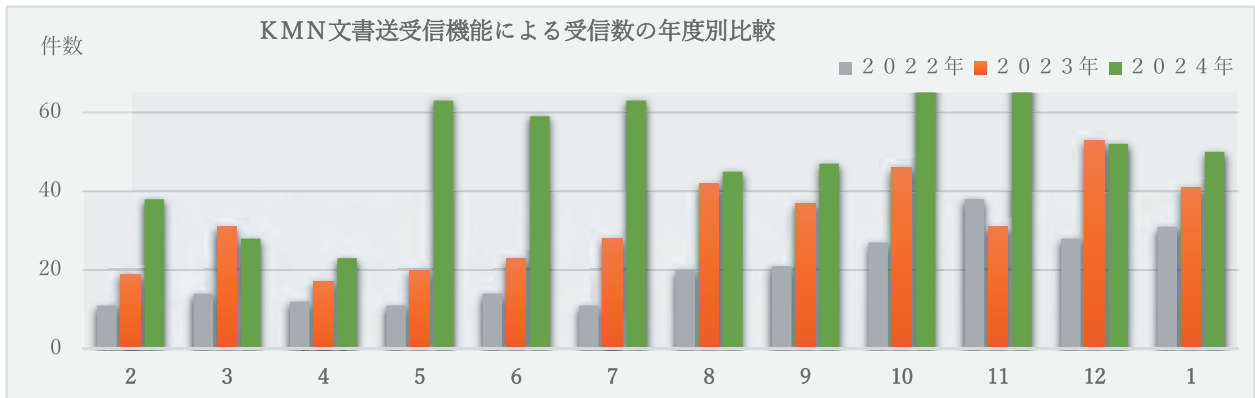
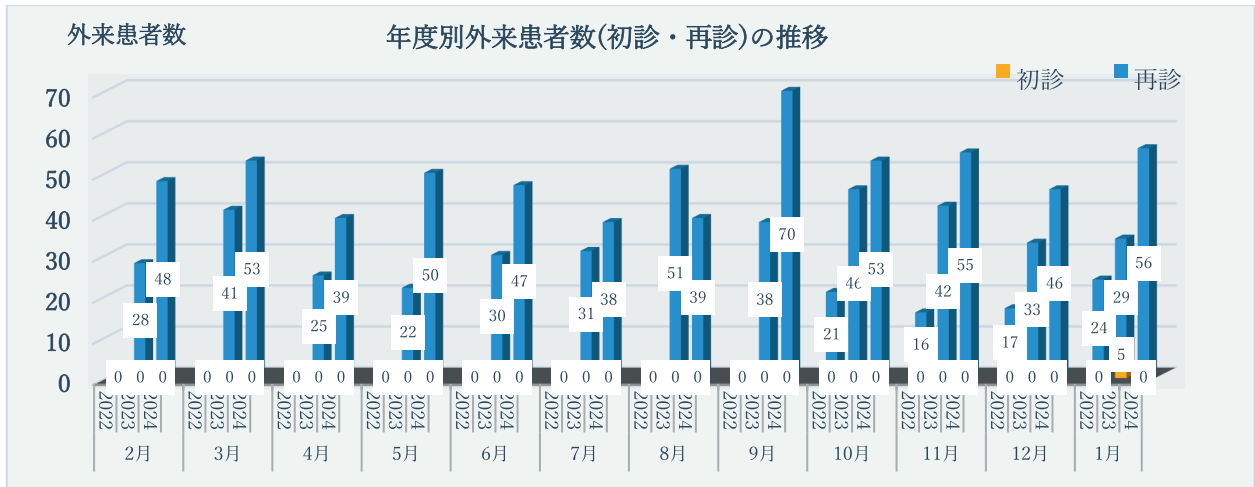
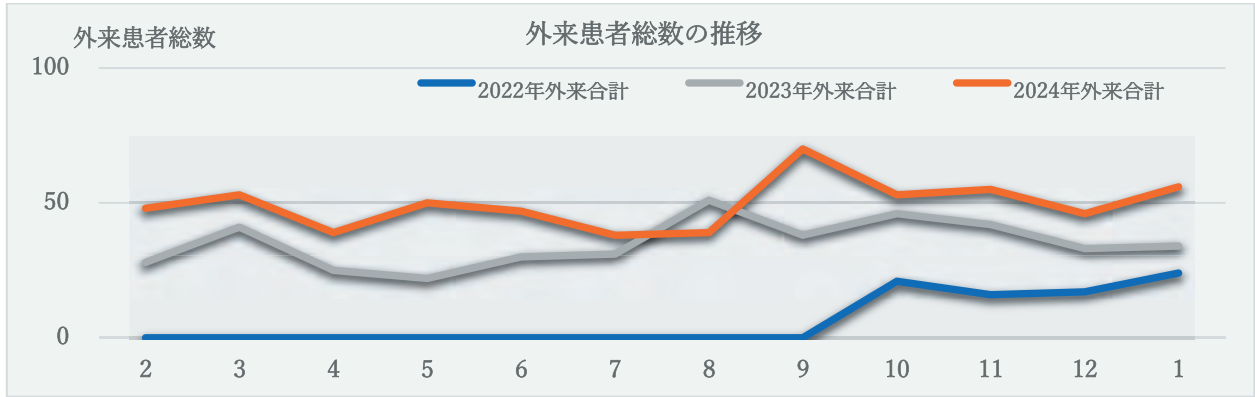
上天草総合病院の地域医療拠点病院の役割は多岐にわたります。同病院は上天草の南部にあり、天草本渡と熊本市内との交通網からは少し異なる地域に位置しております。そのため、同地域の急性期疾患への早期治療や早期対応を多く担っております。

また、周囲には離島である御所浦があり、同離島の県民の医療を担っております。さらに、上天草総合病院は健康管理センターをはじめ、介護老人保健施設、上天草訪問看護ステーション在宅看護支援センター、居宅介護支援センター、看護学校などを併設しており、同地域の健康や保健、看護、介護、リハビリテーション、そして教育に強く貢献している状況であります。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

令和 5 年度の事業報告書に記載させていただきました内容と重複いたしますが、教育という面では、上天草総合病院で勤務いただいている、『県の修学資金貸与医師等若手医師』の情報を事前に頂戴できると大変ありがたいと考えます。

## 上天草総合病院 循環器内科



派遣先地域医療拠点病院	山都町包括医療センターそよう病院
氏名	白濱 裕一郎
診療科名	循環器内科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

### 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

そよう病院で循環器内科医として週に1回の外来診療、月に2回の当直業務にあたっている。外来診療においては1日あたり15～20人程度の定期外来、さらに新患・コンサルト対応、また同院にはエコー技師がいないため、心エコーなどの業務にあたっている。

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師が当科外来で直接的に関わることは少なく、コンサルトや相談にたいしての対応を行なっている。

### 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

患者診察数は以下の通り。前年度と比較し+270人程度と受診人数は増加している。周辺病院からの紹介患者数は24人となっており、地域の拠点病院として専門医療の維持が行えていると考えられる。

### 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMN新規参加数はいなかったが、KMNを利用した紹介状のやり取り（特に受信数）は増加している。外来業務中にKMNを通じて送信を試みてはいるものの、KMNで送信できるPCが限定されていたり、業務中の煩雑さからは難しい状況である。

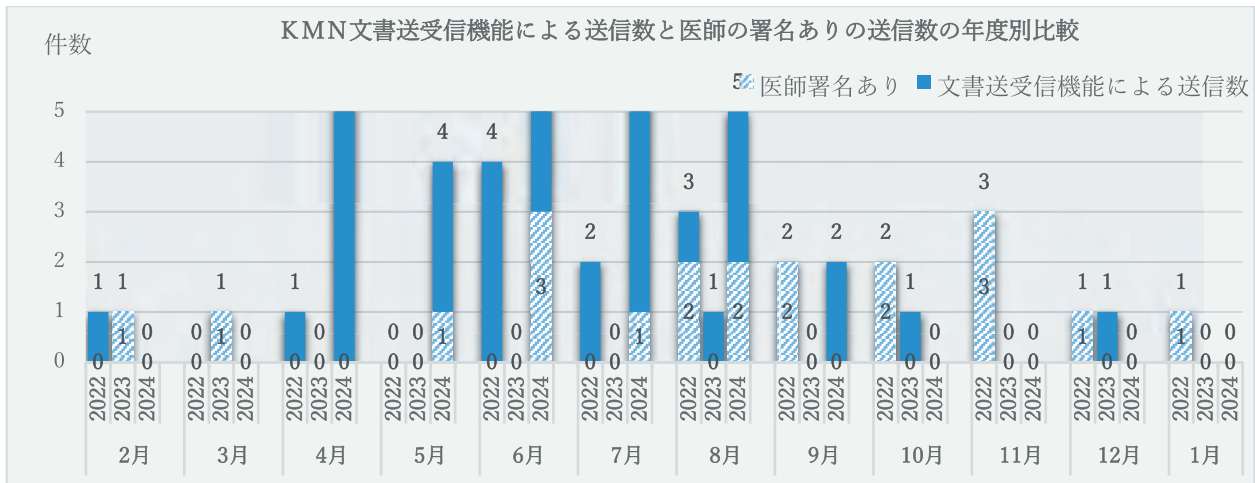
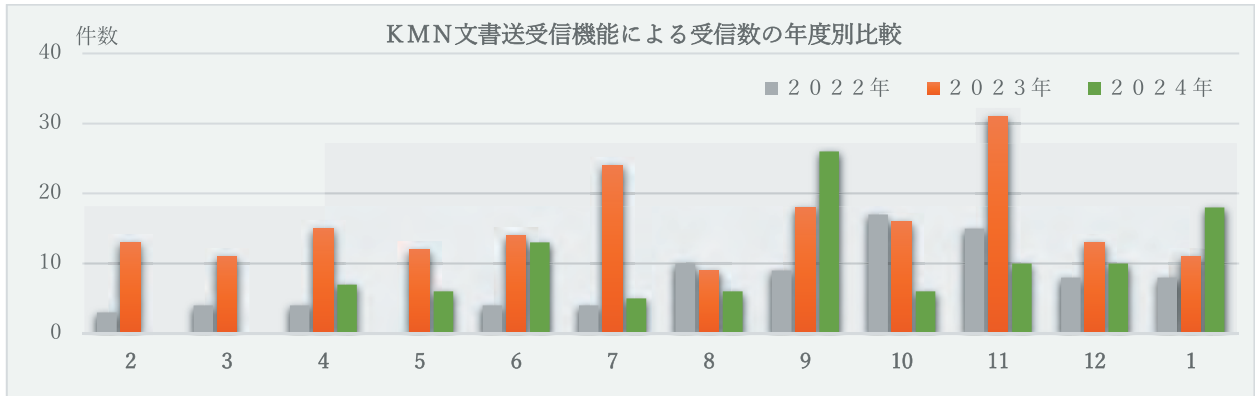
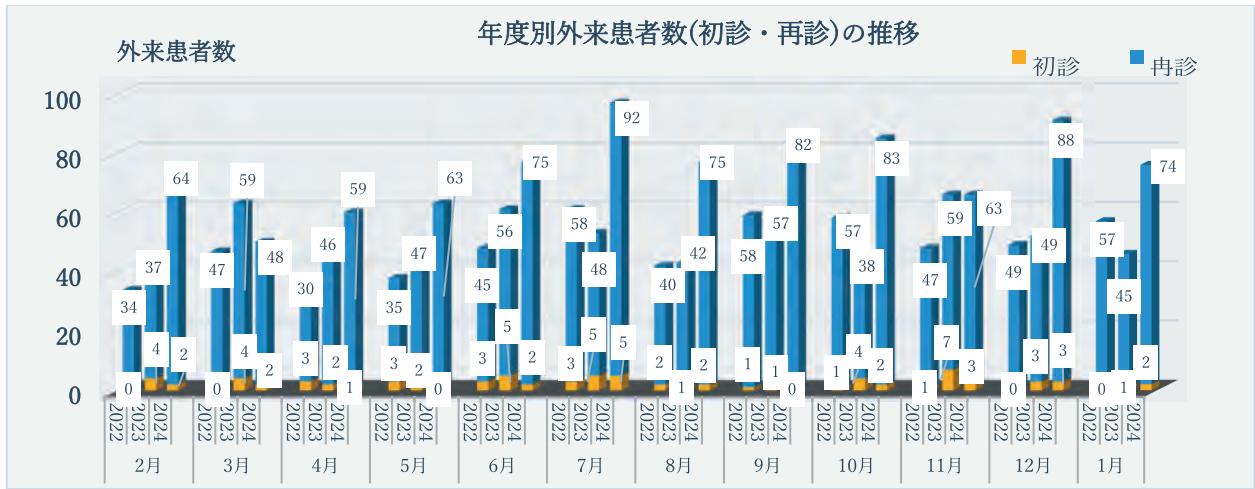
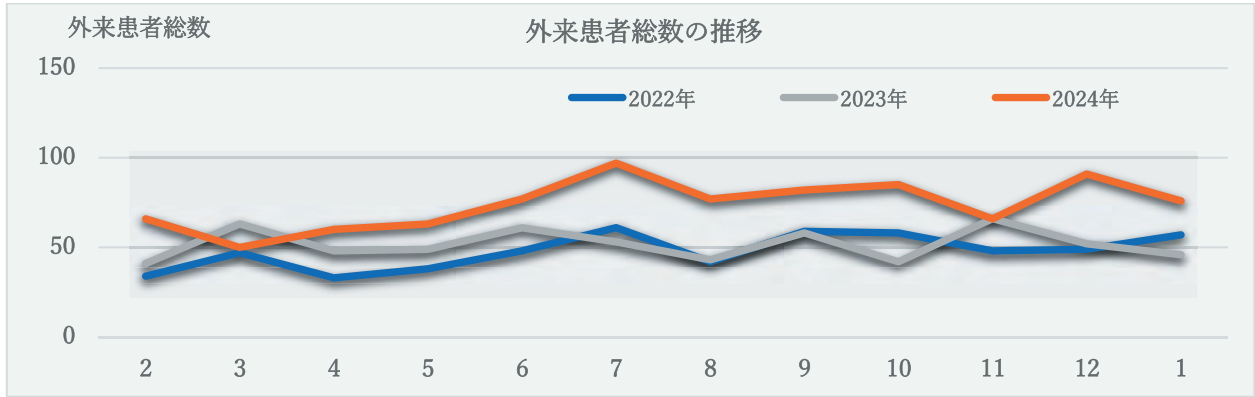
### 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域の拠点病院において、循環器の専門診療の維持が行えている。また、受診患者に対するKMNの情報発信を行い参加者が増加傾向となった。夜間においても、救急患者を積極的に受け入れることにより、重症患者においての三次救急拠点病院への搬送をより安全に施行することが可能であり、また軽症～中症患者においても地域完結型の医療の提供が可能となっている。

### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

KMN参加数は経年的には増加傾向にはあるものの、文書送信総数の増加には至っていない。そよう病院においては文書送信を一括して行う部署がなく、多忙な外来診療中に送受信の手続きまで個々のDrで行うのは限界があり、他職種へのタスクシフトが必要であると考えている。

## 山都町包括医療センターそよう病院 循環器内科



地域医療連携ネットワーク実践学 寄附講座

派遣先地域医療拠点病院	国保水俣市立総合医療センター
氏名	北野 雄希
診療科名	消化器外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

### 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

週1回の手術応援、症例相談を行っている。

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師への手術指導やキャリア支援を行っている。

### 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

手術件数の大きな変化はないが、手術に関しては難易度の高い症例を行えている。また症例に関する相談は頻繁に行っており、診療支援における成果は挙げられている。

### 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KNM の送受信件数は、症例相談や紹介、経過フォローの際に頻繁に使用しており、年々増加傾向にある。

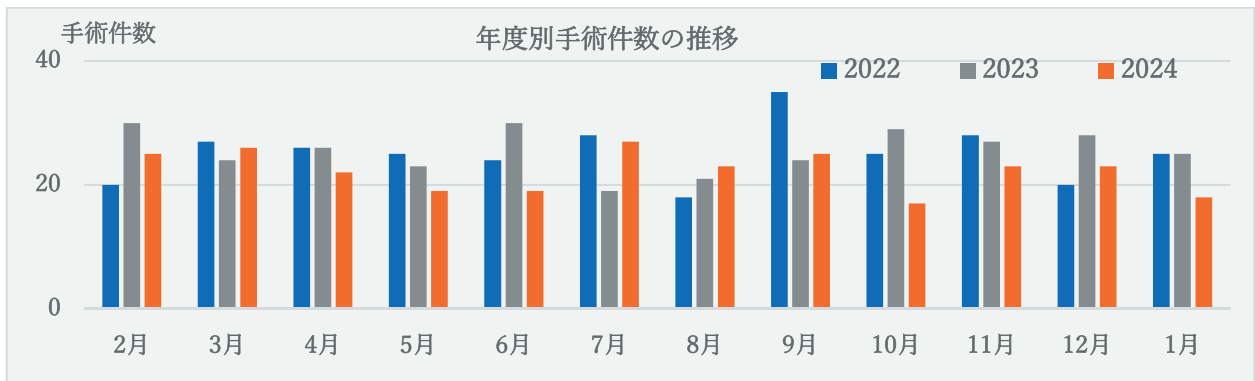
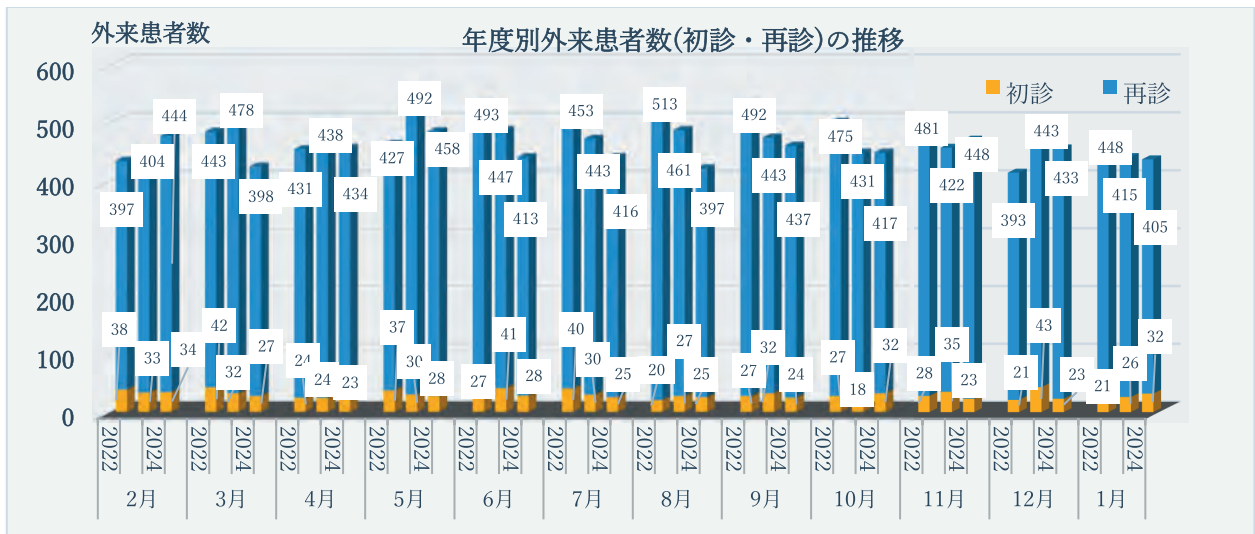
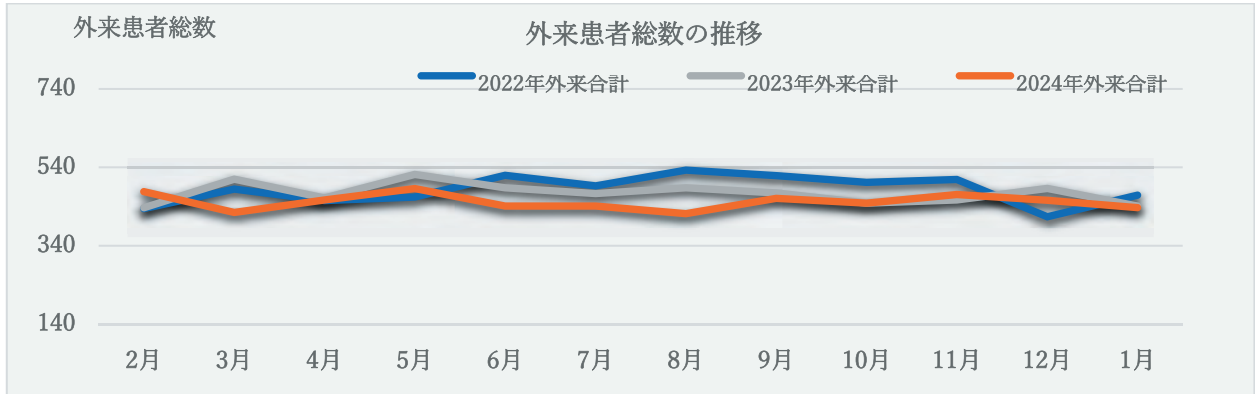
### 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

外科に関しては地域で行える治療は地域で行い、難しい症例は大学病院で治療を行っており、地域医療拠点病院としての役割は十分果たせていると考える。

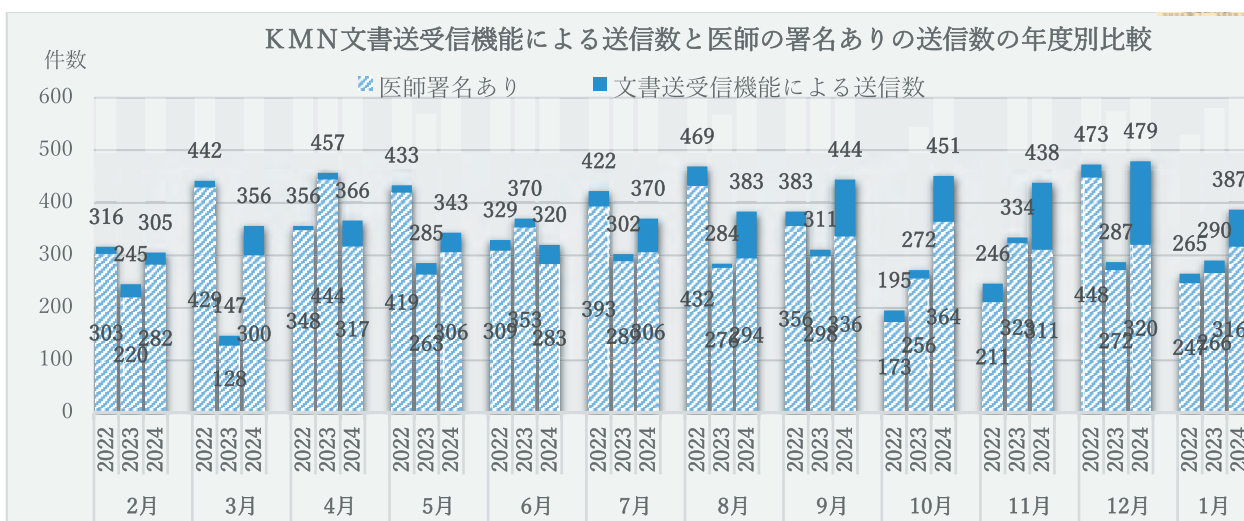
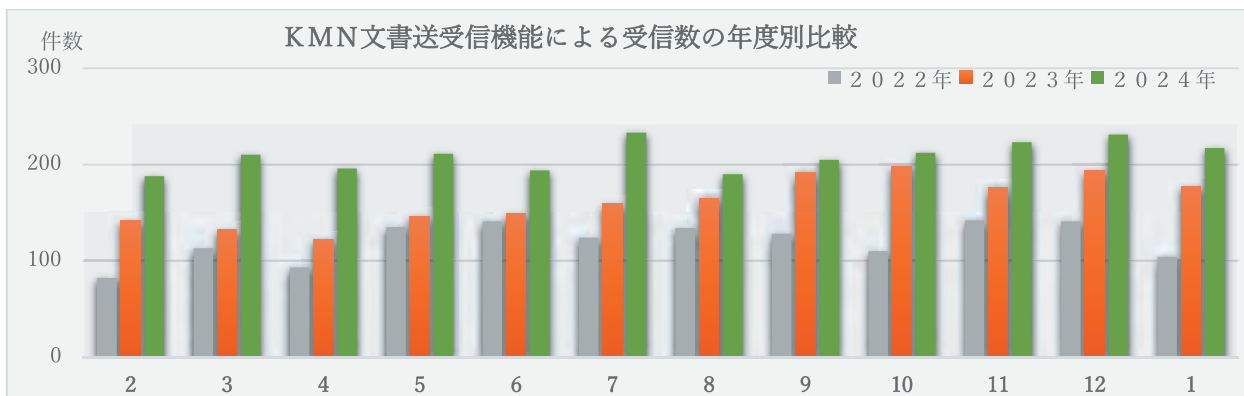
### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

水俣医療センターは十分質の高い地域医療を提供できていると考えます。

## 国保水俣市立総合医療センター 消化器外科



国保水俣市立総合医療センター 消化器外科



派遣先地域医療拠点病院	国保水俣市立総合医療センター
氏名	原田 和人
診療科名	消化器外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

### 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

週1回の手術応援、症例相談を行っている。

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師への手術指導やキャリア支援を行っている。

### 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

手術件数の大きな変化はないが、手術に関しては難易度の高い症例を行えている。また症例に関する相談は頻繁に行っており、診療支援における成果は挙げられている。

### 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KNM の送受信件数は、症例相談や紹介、経過フォローの際に頻繁に使用しており、年々増加傾向にある。

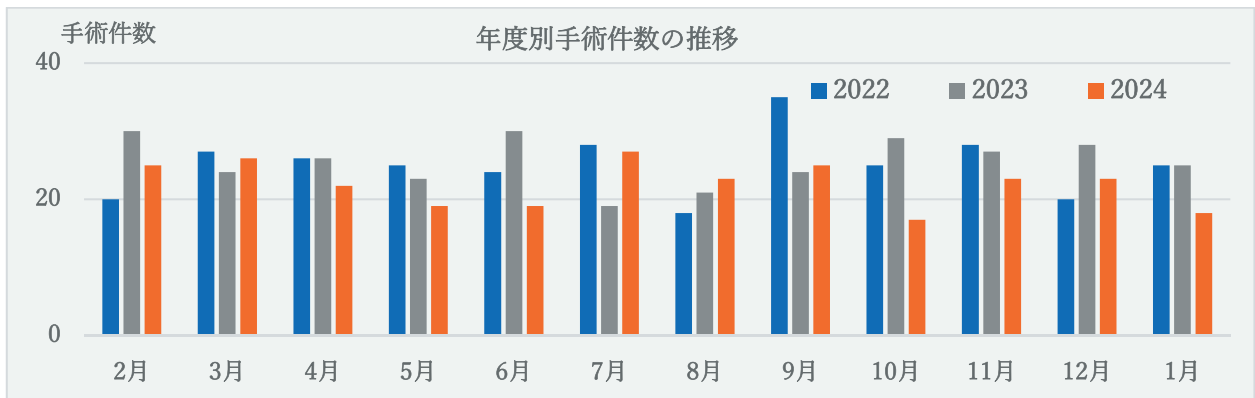
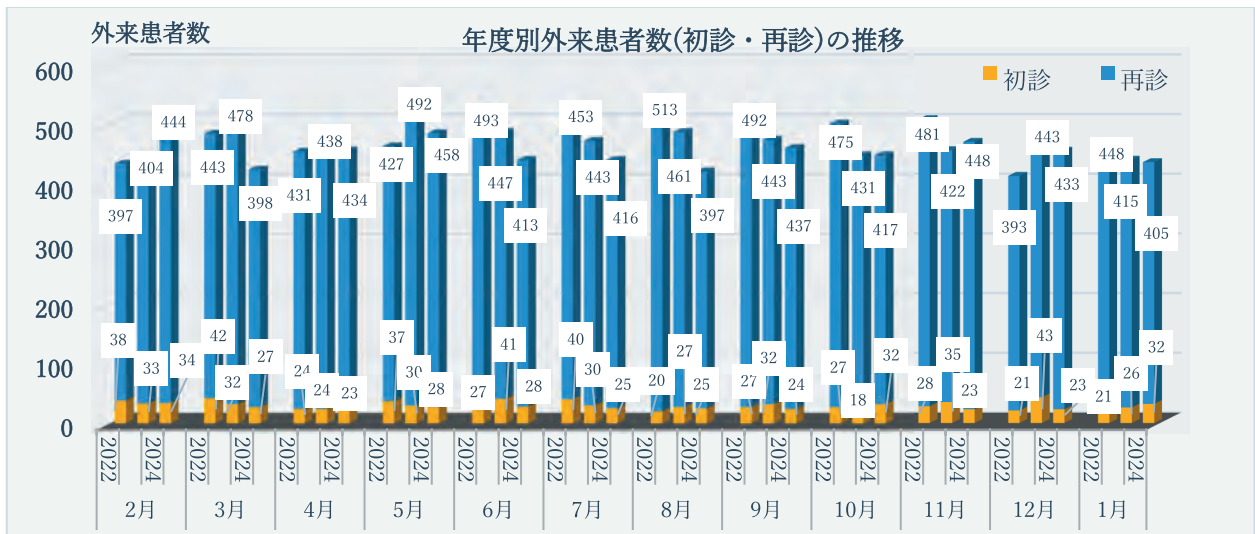
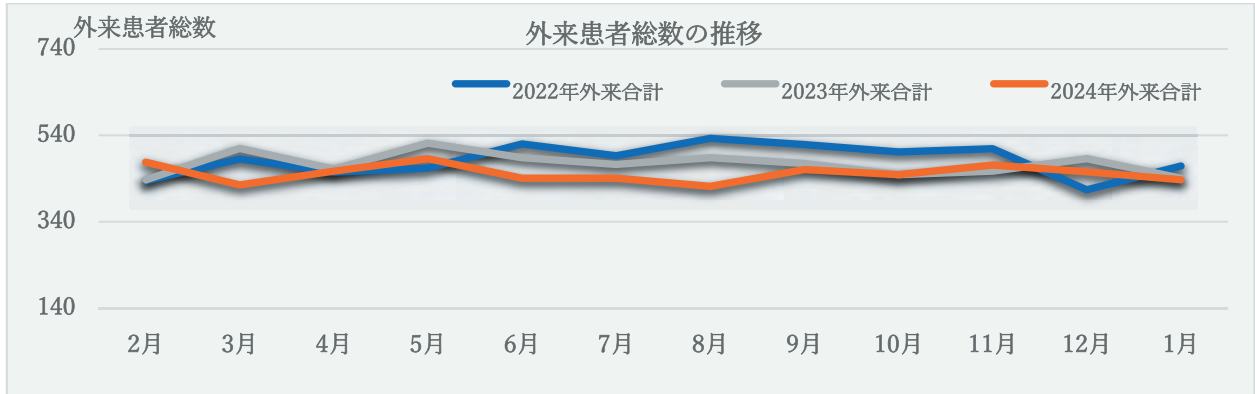
### 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

外科に関しては地域で行える治療は地域で行い、難しい症例は大学病院で治療を行っており、地域医療拠点病院としての役割は十分果たせていると考える。

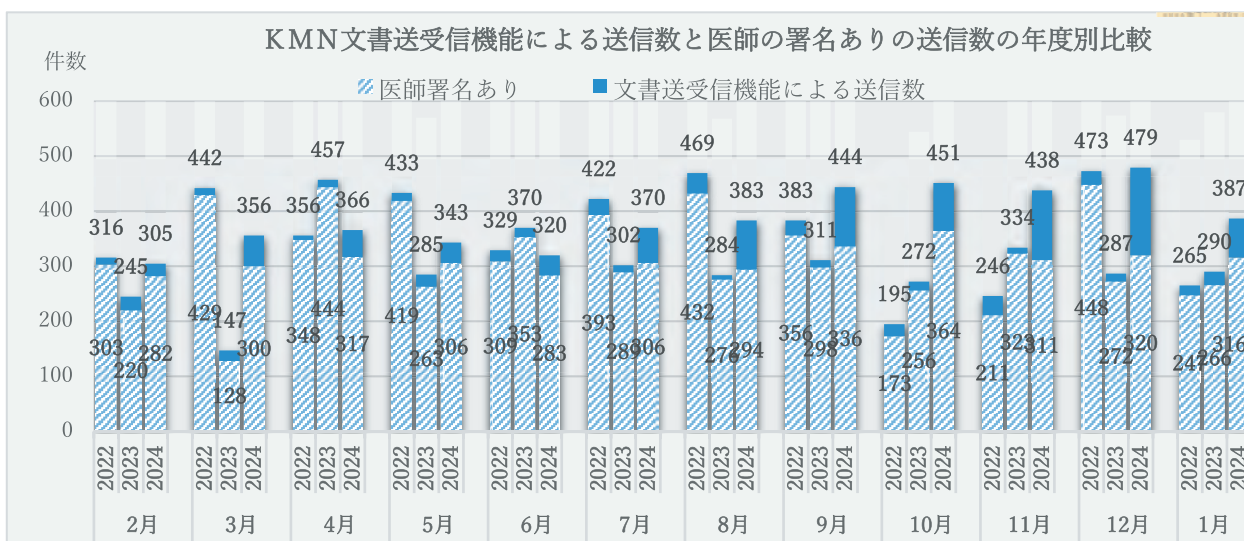
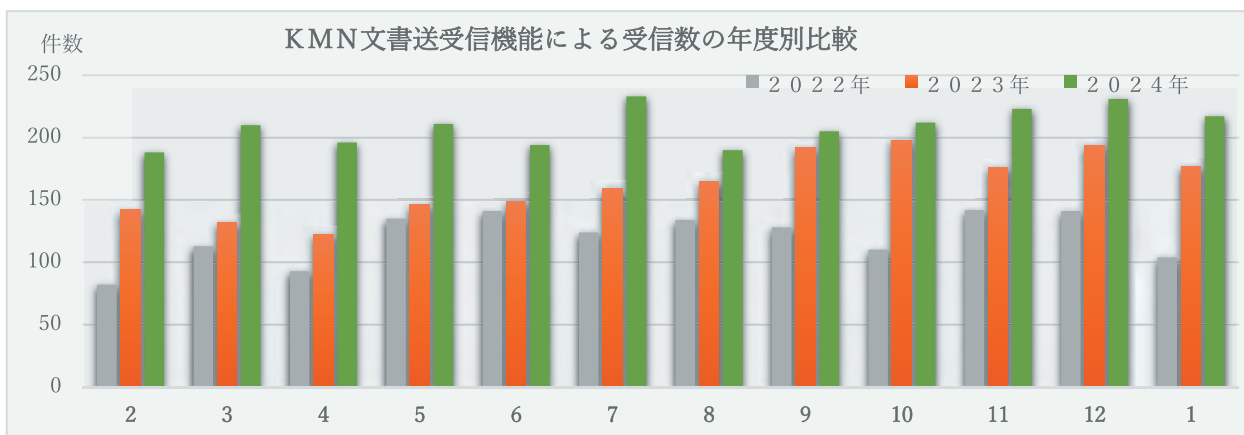
### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

水俣医療センターは十分質の高い地域医療を提供できていると考えます。

国保水俣市立総合医療センター 消化器外科



国保水俣市立総合医療センター 消化器外科



派遣先地域医療拠点病院	くまもと県北病院
氏名	後藤 理沙
診療科名	乳腺・内分泌外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

外来業務を主に担当しており、週に1回、画像診断(マンモグラフィ、乳腺超音波検査、MRI、CT等)や生検による病理学的診断、薬物療法(内分泌療法、化学療法、分子標的治療薬)を行っています。手術や遺伝カウンセリング、治験を含む特殊性が高い薬物療法等の、専門的な対応が必要な症例については、熊本大学病院と連携して対応を行っています。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師が長時間当科の外来につくことはあまりありませんが、指導が必要となったケースにおいてはガイドラインに基づき一般的な検査や治療方針に関する指導を行い、それぞれの症例をしっかりと吟味して検討し、今後のキャリア支援になるようにサポートを行っています。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果(データに基づく)

外来患者数の推移は次頁の通りです。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況(データに基づく)

KMNの利用状況は下記の通りです。熊本大学病院側からの送信が主体となっています。

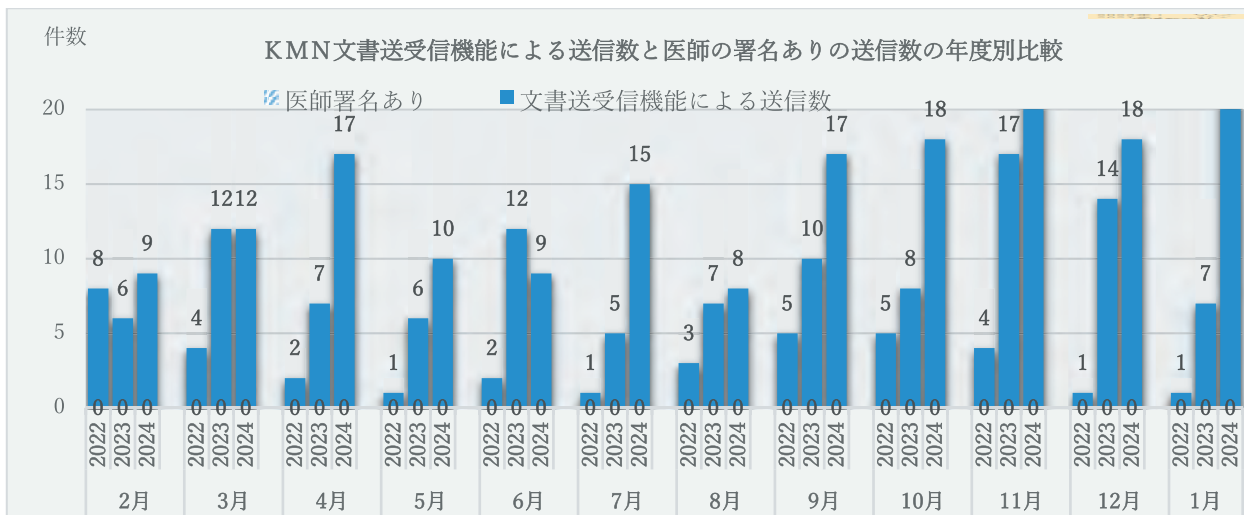
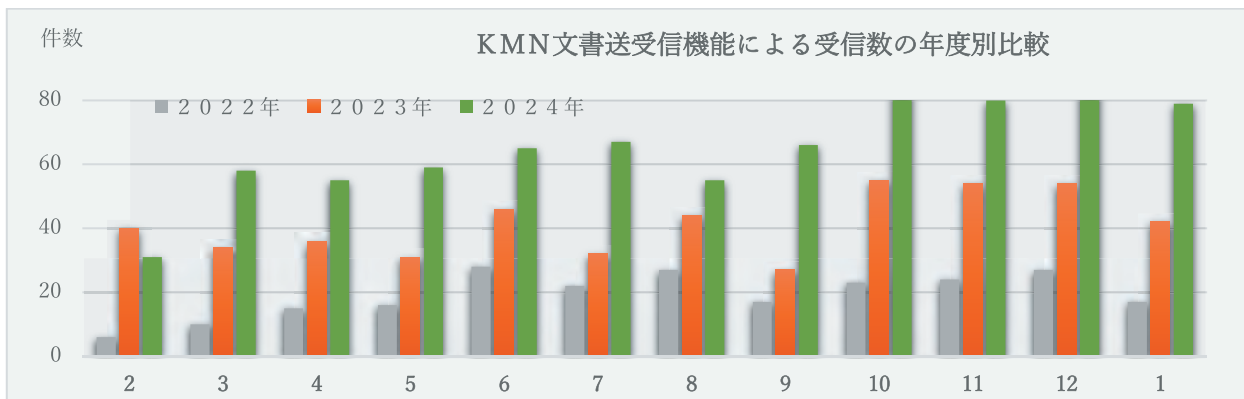
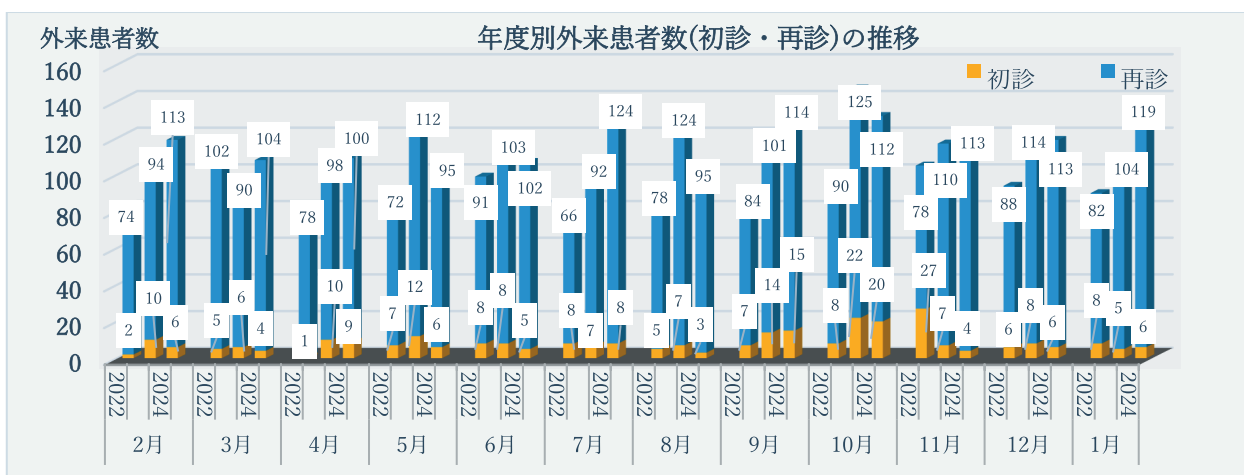
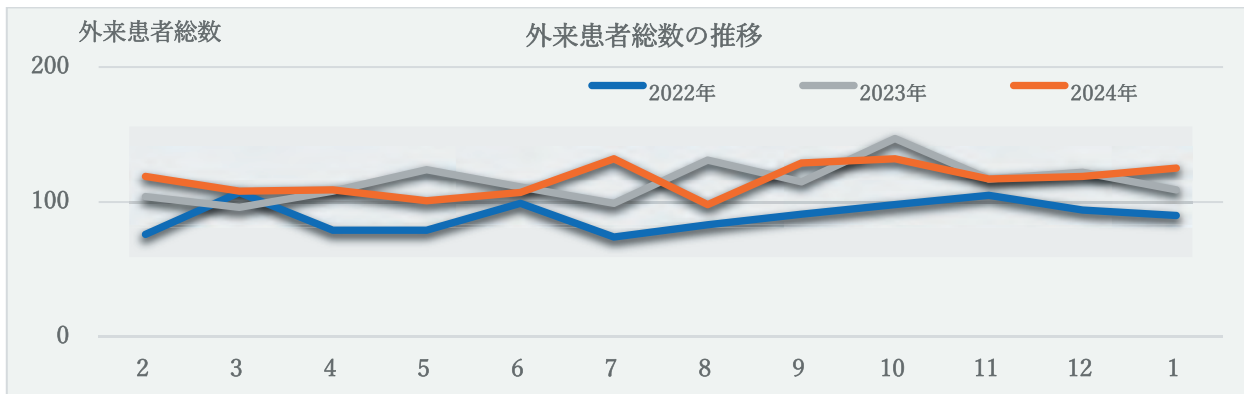
## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

熊本大学病院とくまもと県北病院の連携については、これまで同様KMNを活用したスムーズな連携が可能となっています。また、くまもと県北病院と周辺のクリニックとの連携についても密に行っており、診断からターミナル期まで患者の希望に合わせた対応を行うようにしています。一部の周辺診療所ではKMNも導入していただき、非常に利便性も高いと感じています。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

乳癌診療においては分子標的治療薬などの特殊性の高い治療が一般化してきており、熊本大学病院のみで対応していくことはかなり困難になってきています。すべての患者が自宅の近くの病院で通院の苦痛を少なく、最善の治療を受けられるようにするためには、それぞれの治療の有害事象や必要な対応について、看護師や他科の医師、近辺の薬局に勤務する薬剤師に教育・周知を行ったり、情報共有が簡便になるような工夫をすすめていく必要があると感じています。

くまもと県北病院 乳腺・内分泌外科



地域医療連携ネットワーク実践学 寄附講座

派遣先地域医療拠点病院	人吉医療センター
氏名	穴見 俊樹
診療科名	乳腺・内分泌外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

本事業により、人吉地域の医療連携体制は大学病院との綿密な連携が可能となっていることで、高度な医療を要する患者を迅速かつ適切に紹介できる仕組みが整備されている。これにより、地域全体の医療水準が維持・向上されるだけでなく、患者さんが安心して治療を受けられる環境が整っていると思われる。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

外来診療の合間の限られた時間ではあるが、後輩医師からの治療方針に関する相談に応じたり、尿管ステント留置をはじめとする処置の具体的な指導を継続的に行っている。これらの取り組みを通じて、後輩医師の臨床スキル向上を支援している。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

- 人吉地域では、ロボット支援手術や難易度の高い手術、稀少癌に対する化学療法など、地域で対応が難しい症例を大学病院へ迅速に紹介できる仕組みが整備されており、医療連携体制が維持・強化されている。
- 外来診療の支援を継続することで新患の受け入れ体制が整い、外来患者数は着実に増加傾向である。また、外来患者数の増加に伴い、入院患者数および手術件数も増加するという好循環につながっていると考えられる。外来を支援することで、手術に常勤医師全員参加可能となり、全身麻酔を要するような比較的大きな手術も可能となっている。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

- 人吉地域で対応が難しい症例については、KMNを通じて熊本大学病院との相談や合同カンファレンスを継続的に実施しており、迅速で適切な治療が提供できている。また、大学病院から人吉地域への逆紹介の際にもKMNを活用することで円滑な転医が実現されている。
- 大学病院への紹介時に追加の画像検査が必要となった場合も、人吉医療センターで検査を実施し、その結果をKMN経由で大学病院へ提供することで、患者さんの通院負担軽減に貢献している。
- メディカルネットワークの積極的な活用を継続した結果、新規参加患者数および情報の送受信数は着実に増加傾向を示しており、地域医療連携の強化と患者さんの利便性向上に大きく貢献している。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

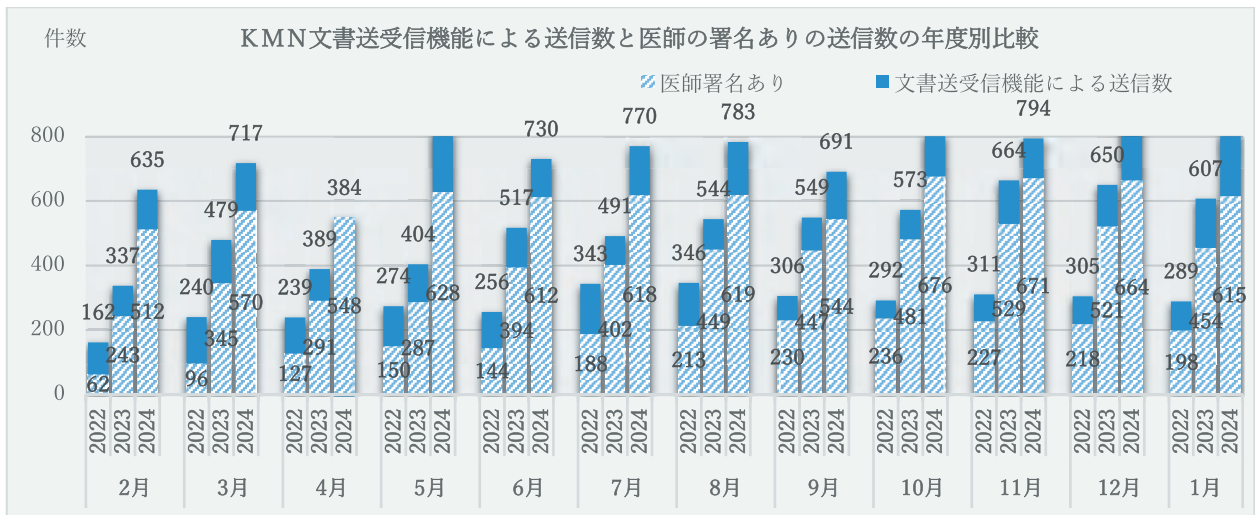
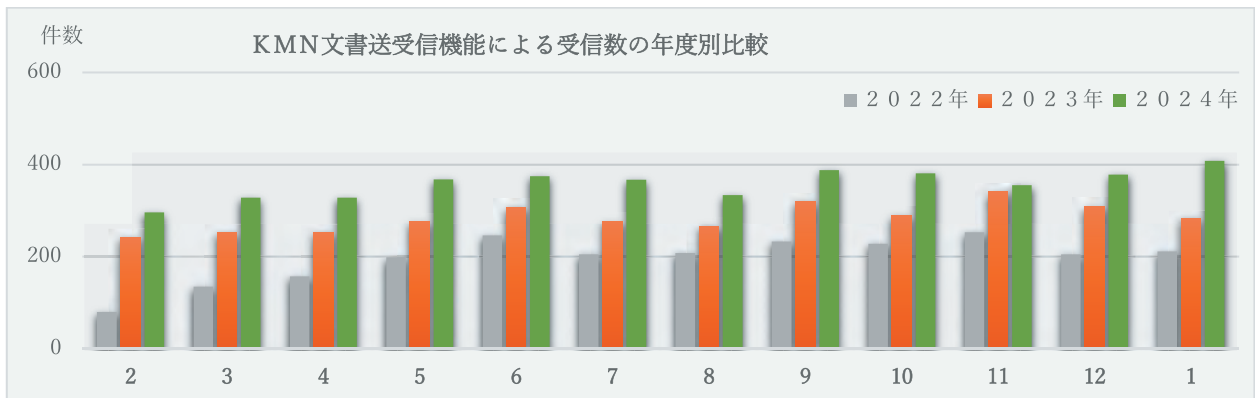
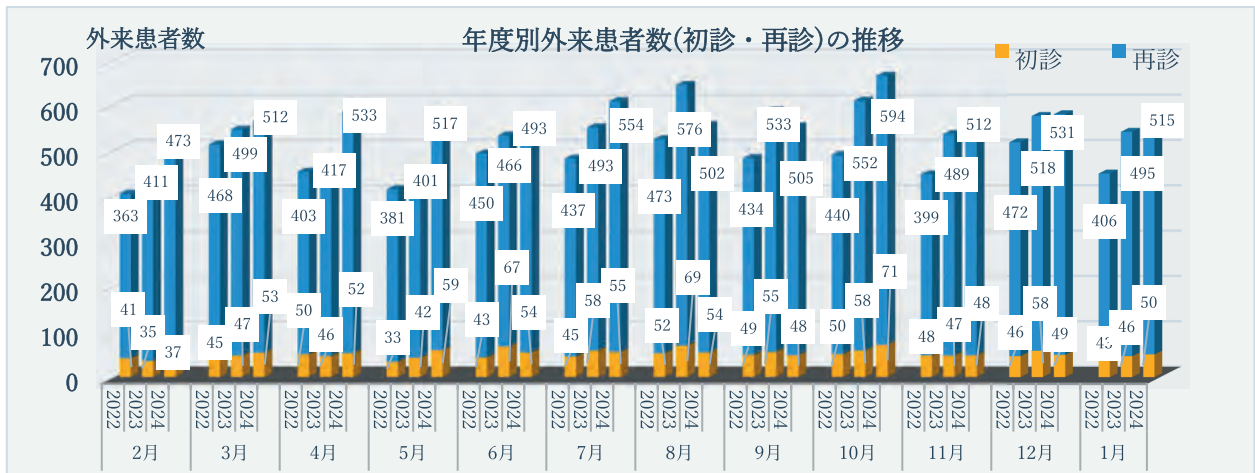
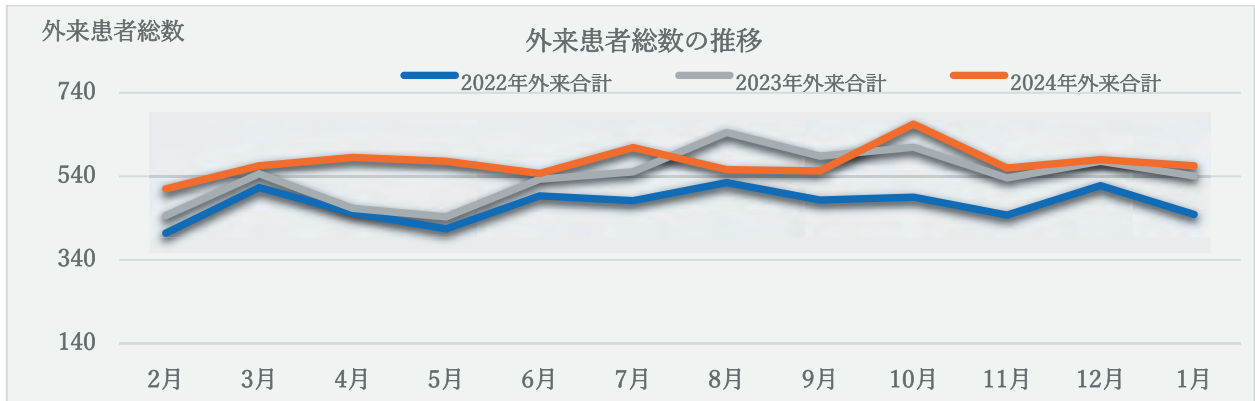
地域医療では依然として診療科の偏在や常勤医師数の不足などが課題となっており、高度医療の提供が困難な状況が続いている。しかし、本講座による地域医療拠点病院と県拠点病院間の連携強化を継続することで、人吉地域での診療が困難な疾患症例に対しても適切な治療が可能となっており、地域全体の医療サービス向上に寄与している。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

本講座を通じて地域医療拠点病院への医師派遣を継続的かつ適切に実施することで、大学病院をはじめとした県内拠点病院との連携がより密接となり、地域の医療機能の維持・強化に繋がっている。また、医師不足による地域医療現場での負担軽減にも寄与している。

今後さらに、熊本市内の拠点病院への医師派遣体制も整えば、各病院の特色を活かした役割分担により、地域間の医療格差のさらなる是正が期待できると考える。

## 人吉医療センター 泌尿器科



派遣先地域医療拠点病院	山鹿市民医療センター
氏名	原田 成美（特任教員 西澤秀和）
診療科名	泌尿器科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

山鹿市民医療センター近隣の病院から紹介のあった患者を診療し、状況によっては再紹介をするなど、山鹿地域の医療連携を推進した。

また、若手医師の相談・アドバイスや診療支援などを行うとともに、院内のセミナーやカンファレンスなどで、山鹿市民医療センターの教育面の支援も行っている。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師へ診断治療のアドバイスを行い、泌尿器科診療の重要性の普及をおこなった。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

泌尿器科では、排尿障害や悪性腫瘍のフォローアップの患者が多い傾向であり、初診、再診の患者はトータル毎月初診が2-3名、再診が50名程度ある。このように一定の患者数があり、泌尿器科の診療ニーズは高く、地域医療に貢献している。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

メディカルネットワークの送受信数は今年度受信数が486件、送信数が135件あり、年々件数は伸びている。また、今年度のKMNへの新規参加者数は450件であった。

今後も継続して普及を推進していく。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

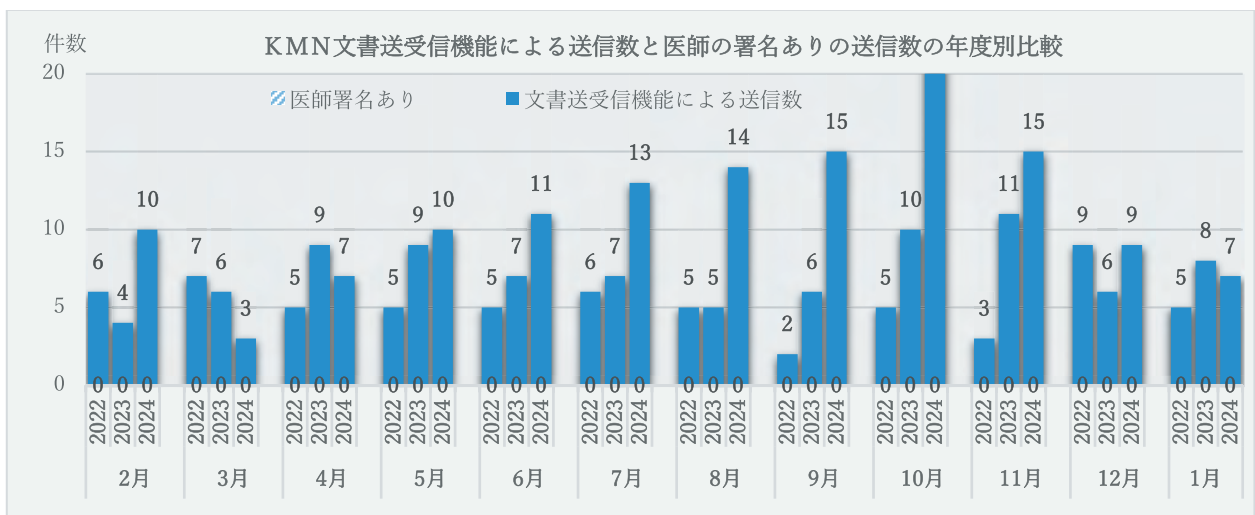
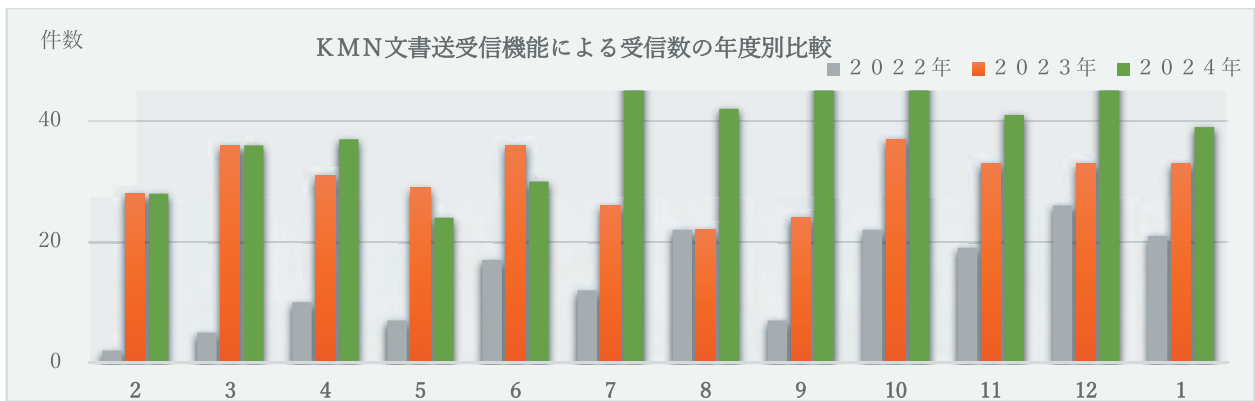
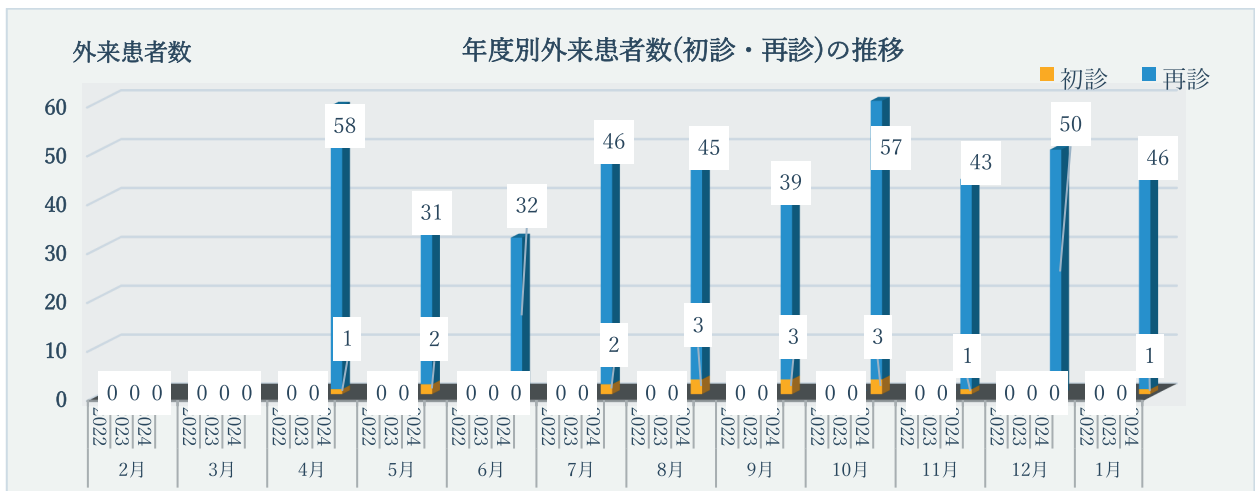
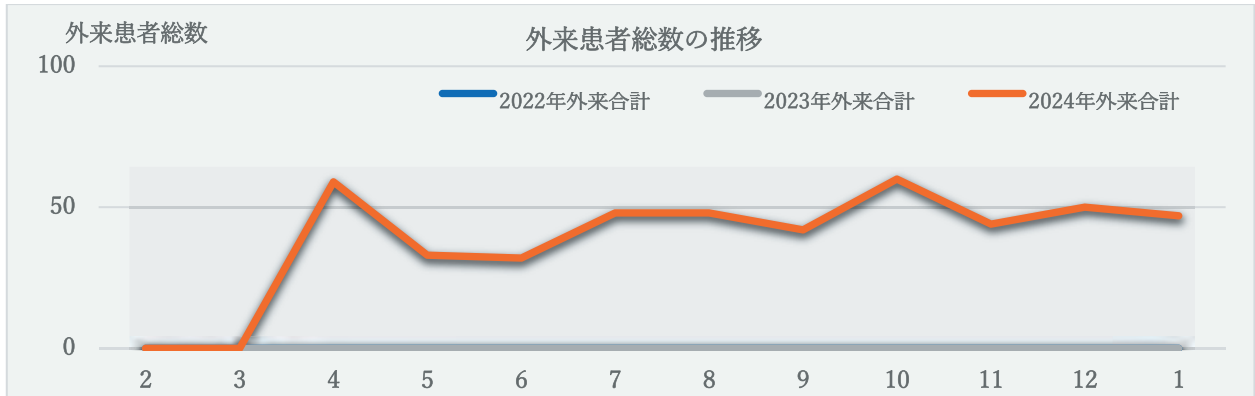
山鹿市民医療センターには、泌尿器科常勤医師がいないため、ネットワーク寄附講座による診療支援により、地域医療拠点病院としての役割を果たすことが不可欠である。

そのような中、地域医療拠点病院として、泌尿器科の専門医療を実践しながら、若手医師への教育やメディカルネットワークの普及を図り、より専門性の高い医療の提供を推進しているところである。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域のニーズに沿った医療を展開するためには、ハード面の整備はもとより、医師の働き方改革にも配慮した診療体制の構築が課題と考える。

## 山鹿市民医療センター 泌尿器科



地域医療連携ネットワーク実践学 寄附講座

派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、国保水俣市立総合医療センター
氏名	永田 裕子
診療科名	小児科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

診療の主な内容は予防接種と一般小児科診療である。これらに加えて自分のサブスペシャリティをを活かし、入園時検尿や学校検尿の陽性の児の対応もしくは、腎臓疾患を持つ児のフォローアップ、また昨年度から流行している溶連菌感染後の急性糸球体腎炎のフォローを行っている。そのため、小児腎臓専門医のいる熊本市内の病院を受診することなく、小国や水俣において腎臓疾患のある児(軽症例)は診療・治療をその医療圏で完結することができるのが本寄附講座事業における成果の一つであると考えている。

また、寄附講座特任教員として小国公立病院で診療する日には、常勤医であられる小児科の大崎先生は地域の健診に行かれており、私が寄附講座特任教員として小国公立病院に行くことにより地域の小児の健康保持及び増進を図ることにつながっていると考えている。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

現時点では、小国公立病院、水俣総合医療センターに熊本県の修学資金貸与医師等若手医師が不在である。ただし、水俣医療センターで働かれている小児科専攻医に対しては症例のフィードバックを行い支援している。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

患者数は次頁のとおりである。小児のウイルスもしくは細菌感染症がここ2～3年増加しており、少子化が進行しているが、患者数は減少していない。本事業により小児科の常勤医師先生方のご負担を少しでも減らせることができたと考えている。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

メディカルネットワークは少しずつ普及している。今後も普及を進めていきたい。

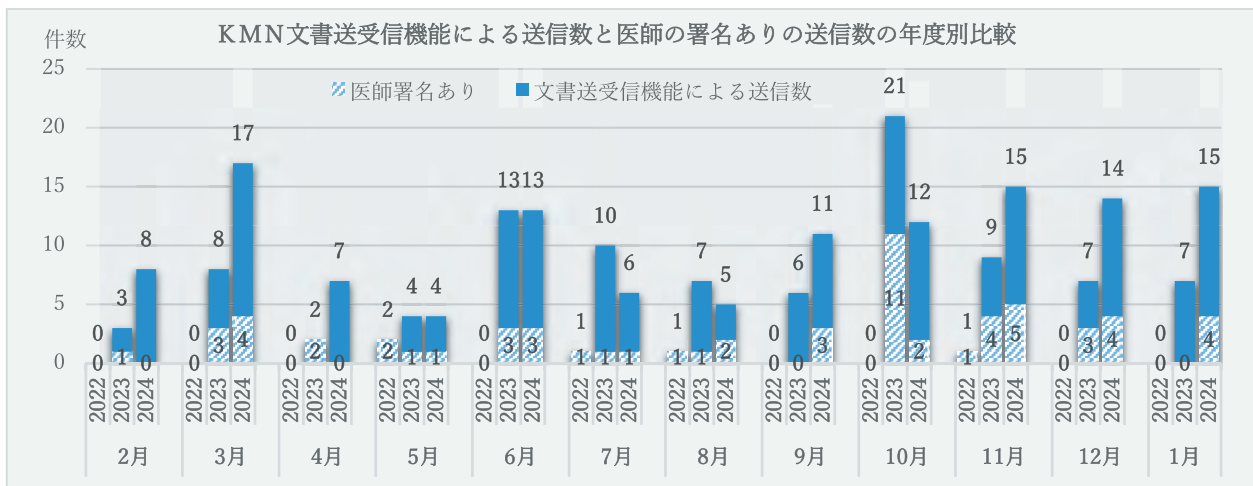
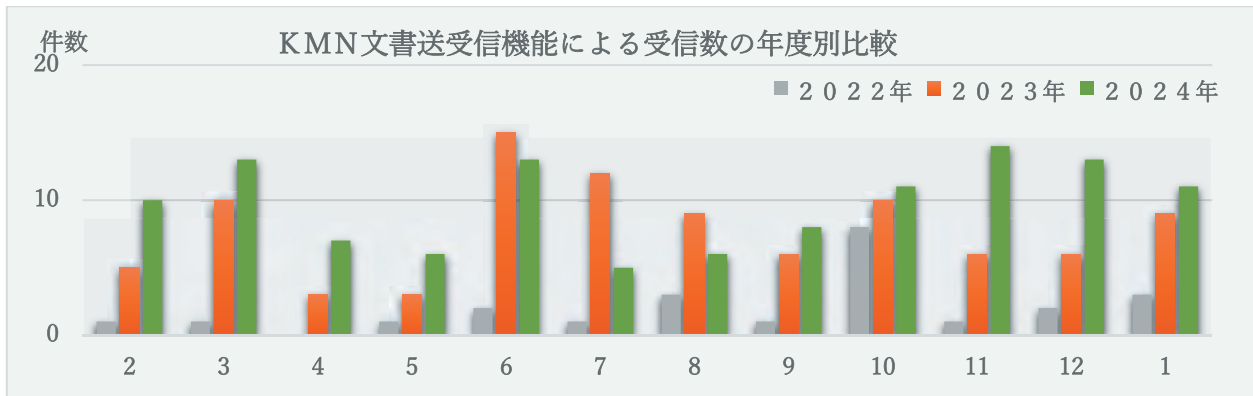
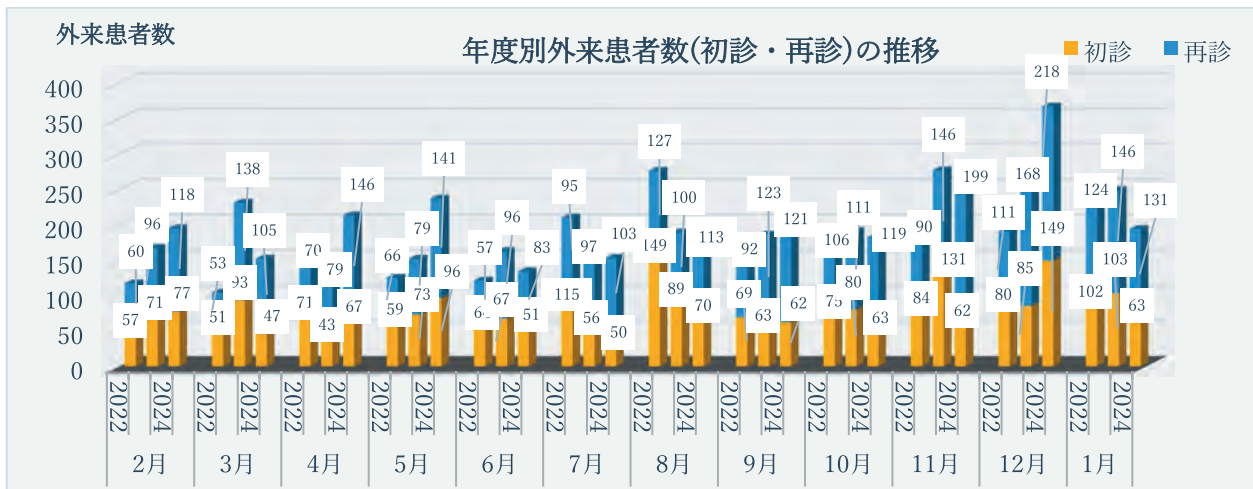
## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

予防接種を推進することや日中受診された際に夜間緊急受診する必要がある目安をしっかりと説明するようにしており(日中の受診で良い旨)、少しでも地域医療拠点病院ご勤務の先生の負担を減らし、地域医療拠点病院としての継続した役割を推進できるように努めている。

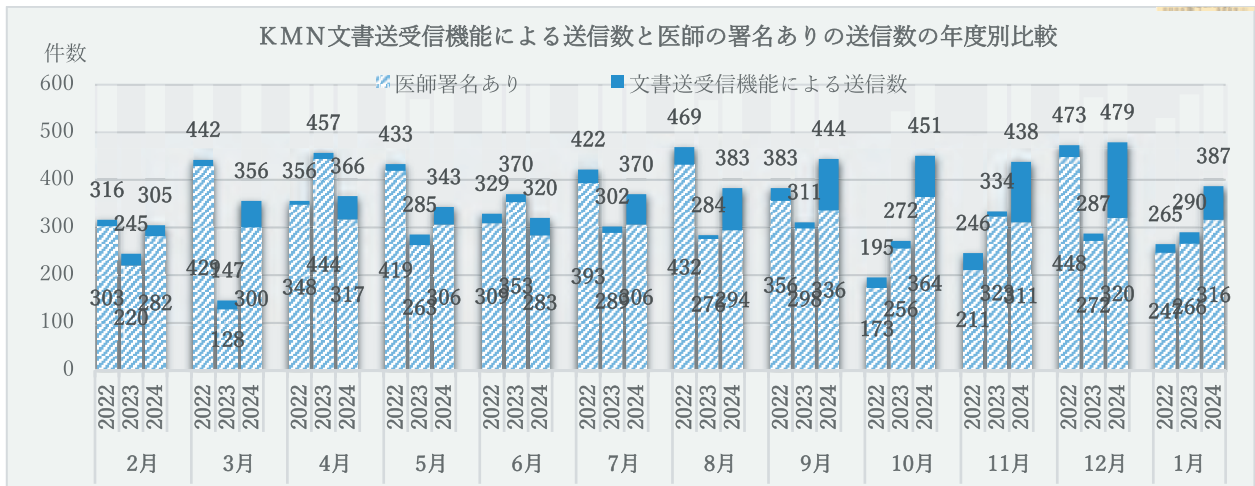
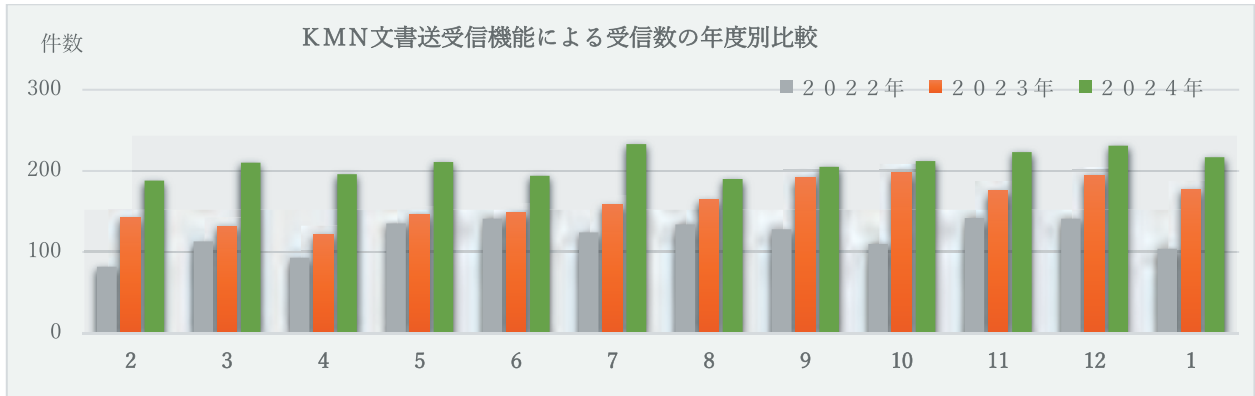
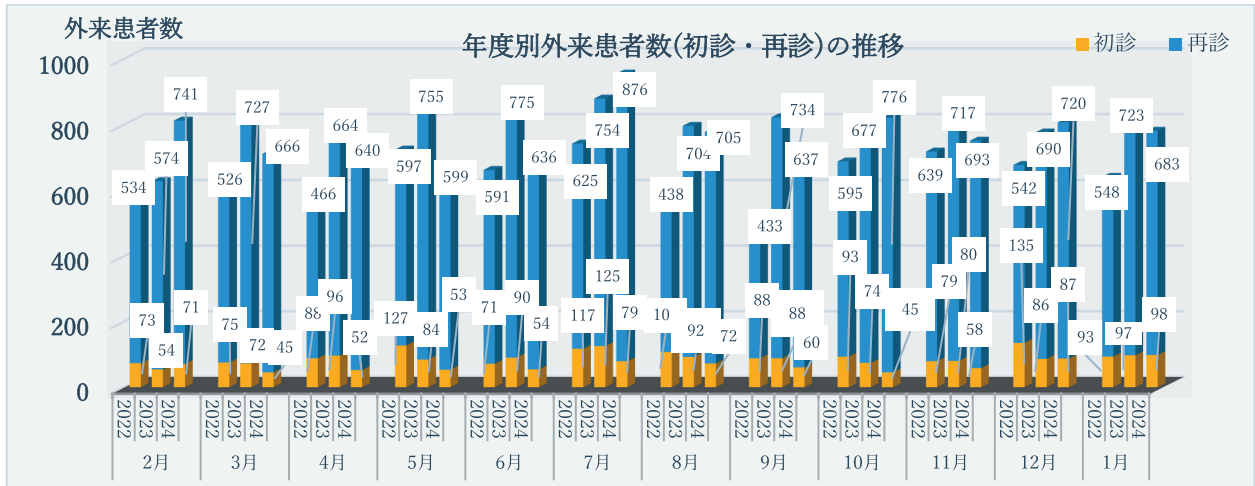
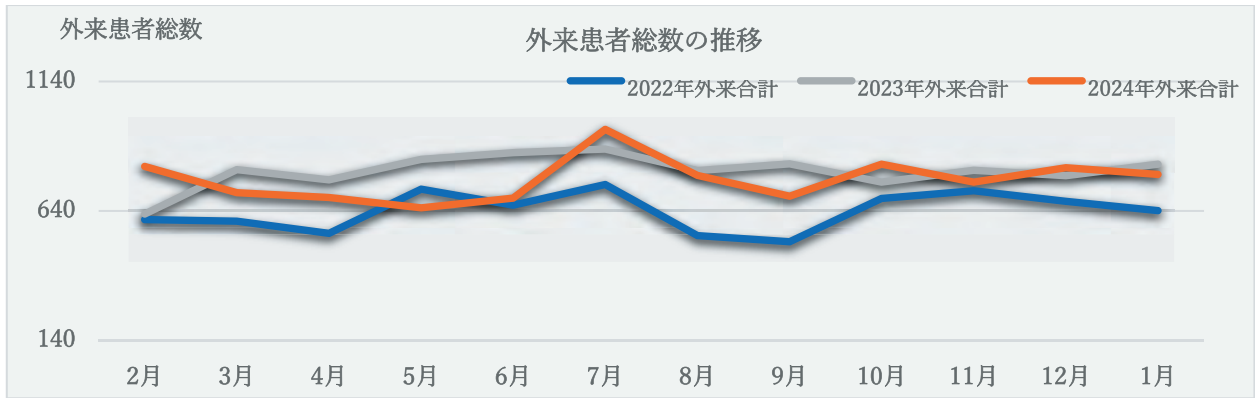
## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

地域医療の課題としては、今後も医師不足は続き深刻さは増すと思われる。解決策としては今後も、継続して診療支援を行うことである。

## 小国公立病院 小児科



国保水俣市立総合医療センター 小児科



派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院、国保水俣市立総合医療センター
氏名	宮村 文弥
診療科名	小児科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

### 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

小国公立病院：一般診療、心臓検診、予防注射  
水俣市立総合医療センター：一般診療

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

小児科内に該当する医師がいない

### 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

#### 【小国公立病院】

各月平均 40～70 名程度の初診、100～140 名程度の再診

#### 【水俣市立総合医療センター】

各月平均 70～130 名程度の初診、500～600 名程度の再診

※水俣に関しては、近隣小児科廃業の為、市内唯一の小児科診療拠点となり、患者数はかなり増加傾向である

### 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

KMN については、各病院とも各月 5～30 名程度の利用

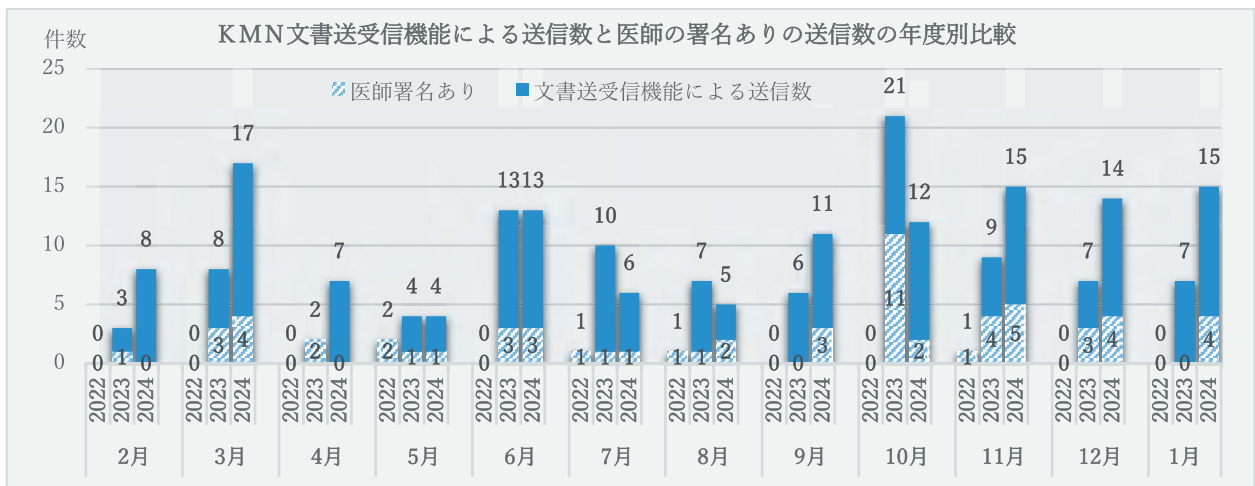
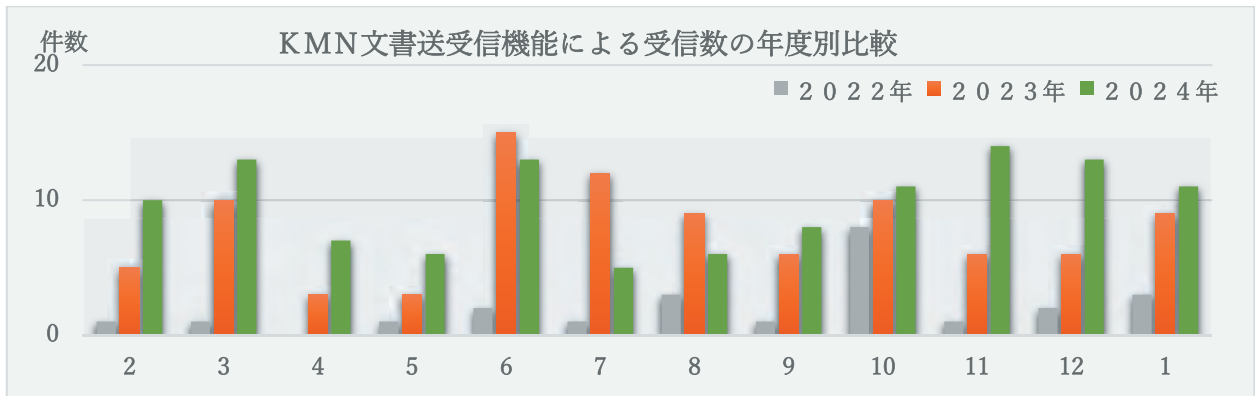
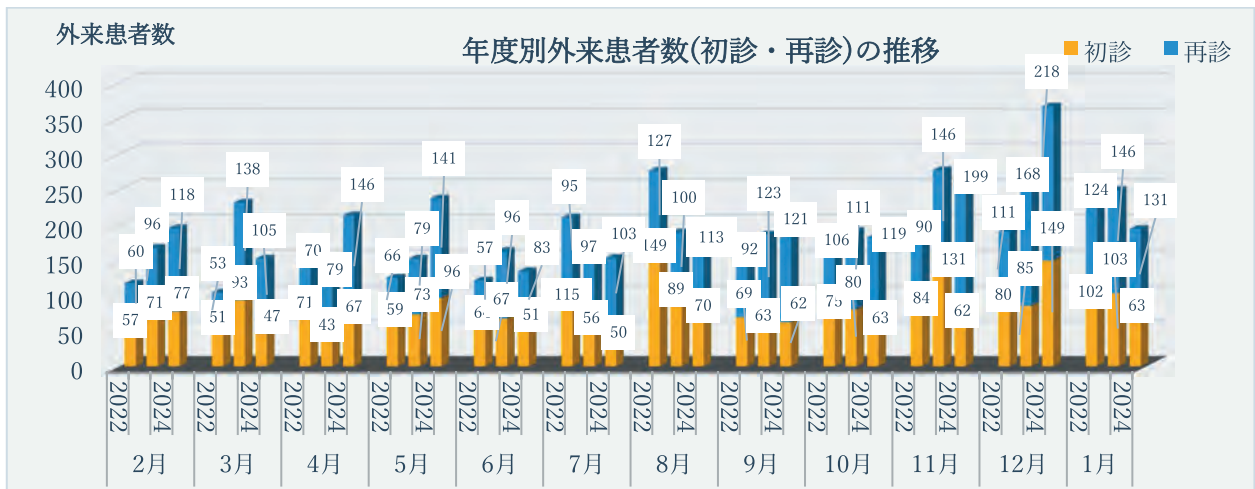
### 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

小国、水俣ともに地域唯一の小児科診療拠点となり、その重要性、ニーズは非常に高い。特に大学病院から派遣される医師は、サブスペシャリティを持っており（各々、循環器、腎、血液など）、本来熊本市内まで行かないとフォローアップできないようなお子さんを、地域で治療管理が完結できるという点でも、非常に意義が高いと思われる。

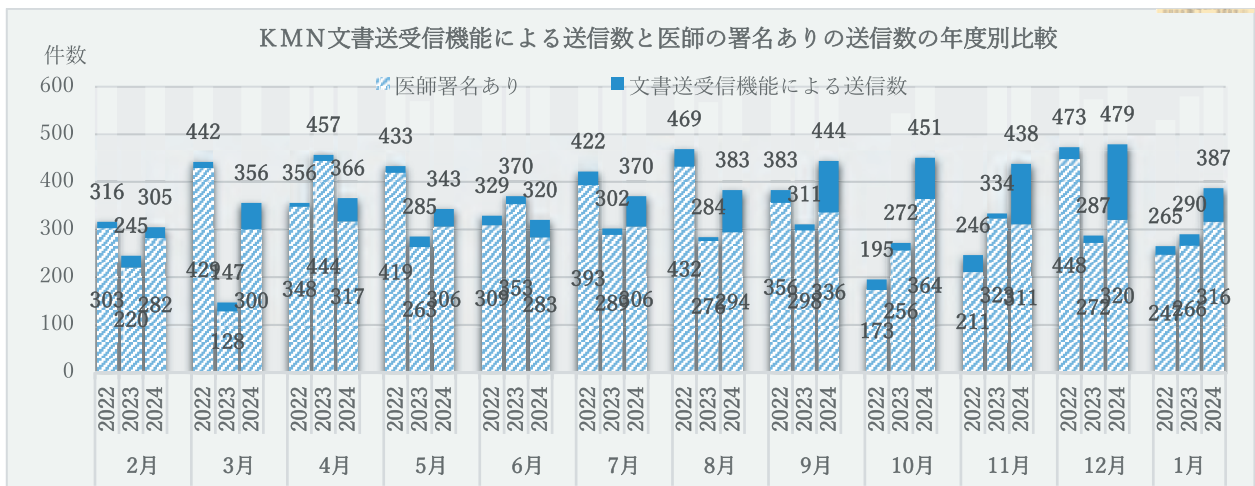
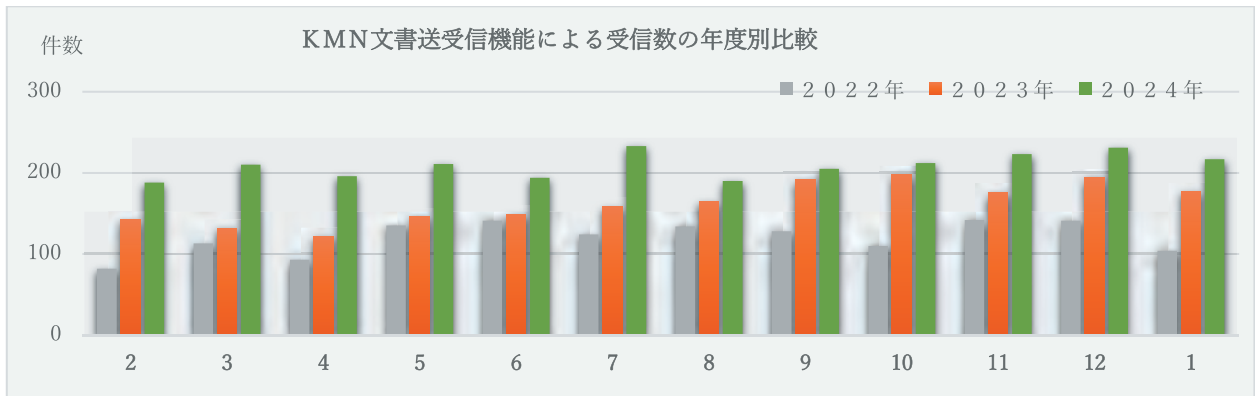
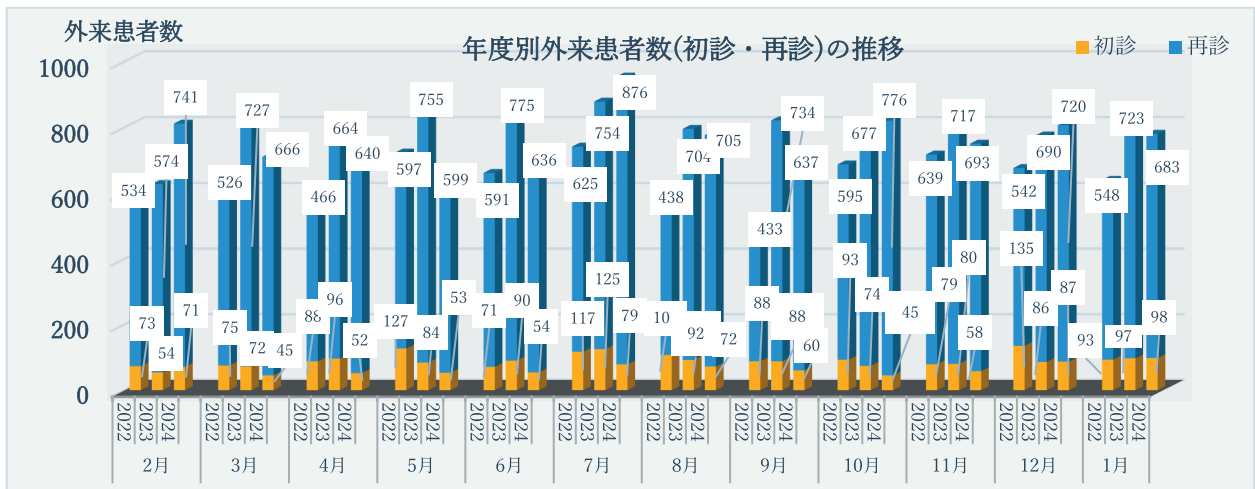
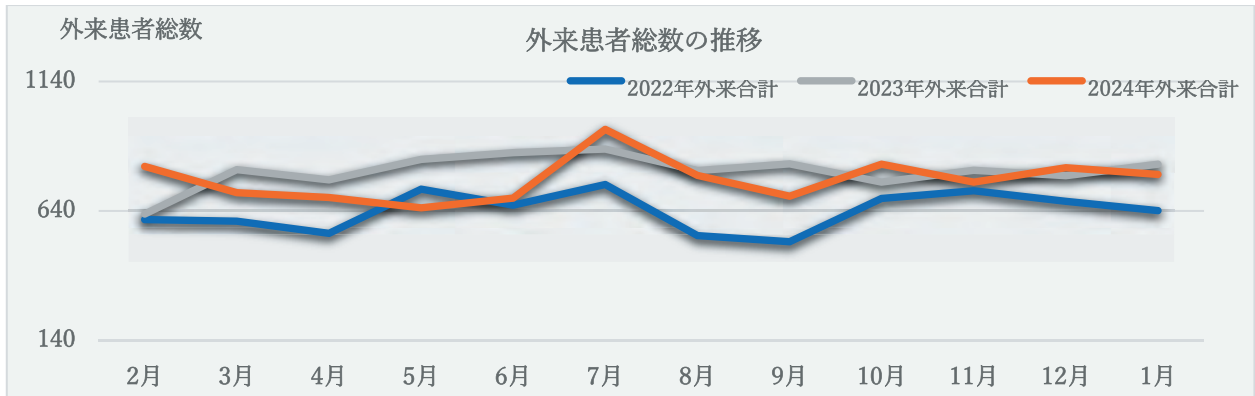
### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

特に小国公立病院は、医療機器や薬剤の数が少なく、その点では熊本市内とのギャップがみられる。そのため、どうしても、日赤や大学病院など高次医療機関との連携は不可欠となる。そのギャップを埋めるためには、医療経営上も財政上もかなり困難であり、医療機関の集約化や、患者搬送（受診の仕方）の工夫など、乗り越えなければならないハードルは多い印象である。

## 小国公立病院 小児科



# 国保水俣市立総合医療センター 小児科



地域医療連携ネットワーク実践学 寄附講座

派遣先地域医療拠点病院	熊本総合病院
氏名	楠木 槇
診療科名	産婦人科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

- 外来診療 新来1日2名程度、再診10名程度
- 手術応援 助手 月1回程度

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

- 若手医師への悪性腫瘍の方針相談などに対応している。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

- 2024年4月～2025年1月まで、産婦人科全体で新来686人、再診5544人、週5日×2枠の診療枠の1つを受け持ったため、上記のうちの1/10弱担当しました。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

熊本総合病院でのKMN新規導入者数は、2022年325人、2023年105人、2024年88人で、普及が終了しつつあるが、文書送信数は2022年71件、2023年815件、2024年1436件、文書受信数は2022年567件、2023年1257件、2024年1984件、といずれも増加傾向である。産婦人科においても同様に増加傾向である。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療拠点病院が行うべき取組みとして、① 紹介患者に対する医療提供、② へき地診療所への医師派遣等による地域のかかりつけ医の支援、③ 地域の研修医・専攻医への教育、④ 勤務環境改善に向けた取組みがあげられている。

熊本総合病院において、地域医療拠点病院が行うべき取組みの①～④の達成状況は以下の通りである。

- ① については、婦人科疾患については、紹介患者への適切な医療提供が行われている。周産期診療については、2023年まで熊本労災病院が受け入れていた妊産婦数・患者数と同じ程度の受け入れには至っておらず、八代地域在住の妊産婦が、これまでであれば八代地域で受けていた医療を、熊本市内や隣市町村などの遠方の医療機関で受けていることが想定される。
- ②、④については、熊本総合病院ではこれまで産婦人科常勤医師が2人と少ない中で多くの婦人科手術（腹腔鏡下手術含む）を予定しており、他科医師の応援も受けている状況であった。  
また人吉地域への診療応援も行っていた。1月からの新規の産婦人科医師2名の就職および、2月からの地域医療連携ネットワーク寄付講座所属医師の派遣により、外来と手術を同時並行で行えるようになり、人吉地域への診療応援時にも自院で待機する医師を十分に確保することができるようになっている。このことは、へき地医療への貢献や勤務環境改善に寄与していると考えられる。
- ③ については、熊本総合病院は初期臨床研修医が少ないため初期研修医の指導の貢献にはなっていない。専攻医への教育という面においては、婦人科疾患については、症例数は多く腹腔鏡下手術にも携わることができるが、産科管理については経験症例数が不十分な状況である。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

熊本県内における産婦人科診療の問題点として、①地域拠点病院の部長や指導的立場であった医師が高齢となり定年を迎えつつある一方で、それを今後引き継ぐべき30代後半～40代の医師が極端に少ない。②熊本市内の病院（熊本赤十字病院や福田病院など）では独自に若手医師の採用・教育を行えるが、地方（八代、人吉、天草など）の病院では、専攻医の研修プログラムの一環としての熊本大学の医局所属医師の派遣がなければ、人員の確保が困難である。以上2点があげられ、さらに、③周産期診療は急な多量の出血や胎児機能不全などで緊急を要すること

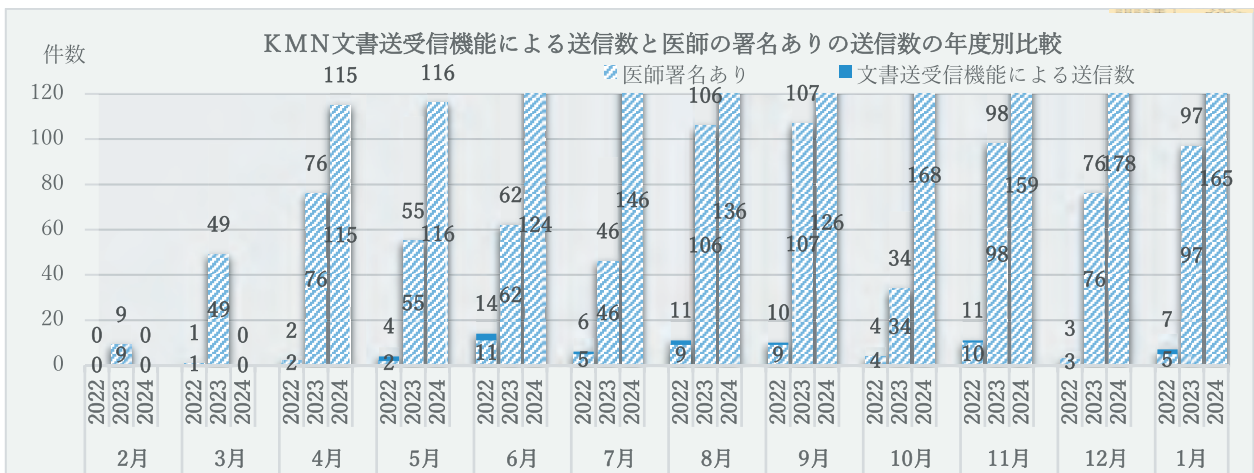
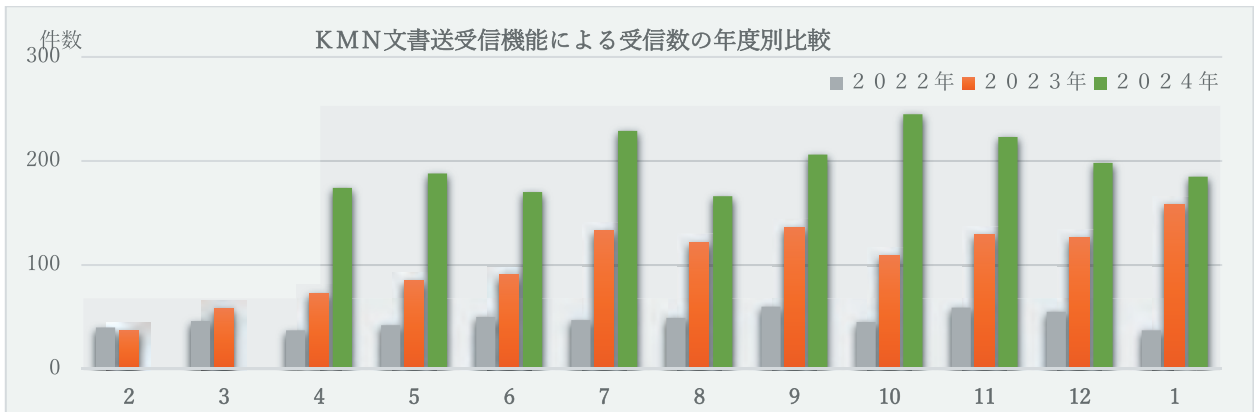
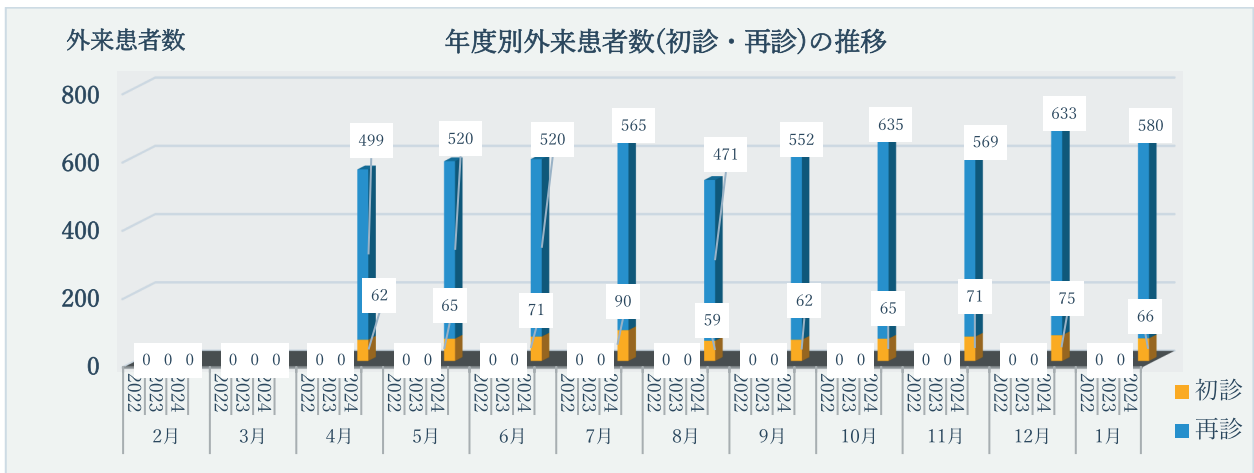
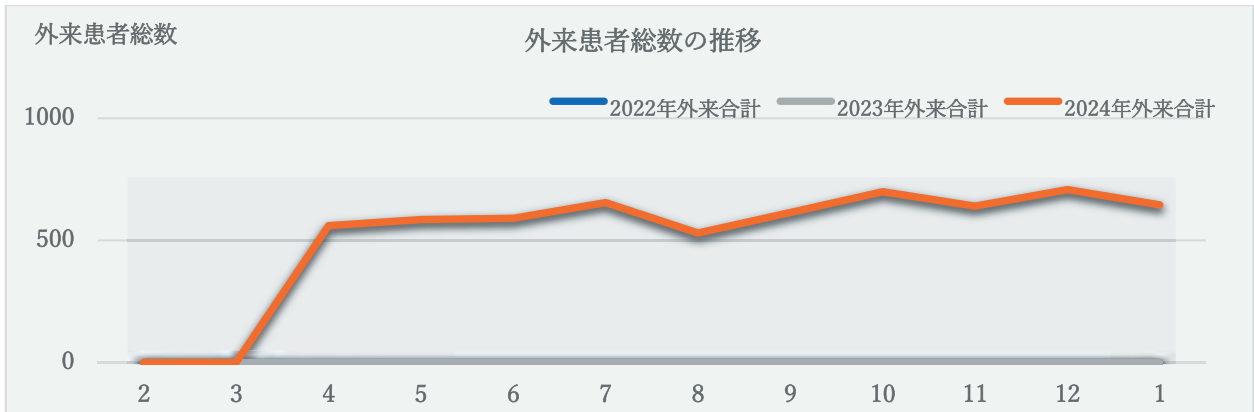
も多いため、他の診療とは異なり熊本市内への診療の集約化が必ずしも適さず、居住地域から短時間でアクセスできる位置に緊急時の対応ができる産科拠点病院が必要であるという点も重要である。

2024年2月から、産婦人科に関して地域医療拠点病院が熊本労災病院から熊本総合病院に急遽変更となり、熊本大学産科婦人科学講座から派遣されていた医師（地域医療連携ネットワーク寄付講座常勤医師および非常勤医師）の派遣先が熊本労災病院から熊本総合病院に変更になった。

このため、熊本労災病院では、2024年1月まで行っていた、手術、入院患者の受け入れ、周産期診療（妊婦の外来診療および分娩を含む入院診療）を2月より停止せざるを得なくなった。一方で、新規に産科診療を開始した熊本総合病院については、2023年まで熊本労災病院が受け入れていた妊産婦数・患者数と同じ程度の受け入れには至っておらず、八代地域在住の妊産婦が、これまでであれば八代地域で受けていた医療を、熊本市内や近隣市町村などの遠方の医療機関で受けていることが想定される。この状況は2024年1年間で大きく変わっていない。

地域医療拠点病院の変更の背景として、上記①、②がある。産婦人科医師不足の中、若手医師の経験と地域での安全な周産期医療の提供を両立させなければならないことから、熊本総合病院に周産期医療を集約させたいという熊本大学産科婦人科教授の考えのもとで、このような変更に至ったと思われる。しかし、熊本労災病院で周産期診療が一切停止したにも関わらず熊本総合病院では十分数の周産期診療を行っていない現状にあり、その理由は明確ではないが、地域住民や、紹介をする立場の地域の産婦人科医院が、熊本総合病院への受診や紹介を控えている可能性がある。ハイリスクの周産期医療を行うために必要な小児科や血管内治療担当医師の不在も懸念材料と思われる。さらに、熊本総合病院の中堅～ベテラン医師が2025年4月、7月より2名欠員になり、高齢の医師2人と若手のみの体制となり、さらに十分な教育が難しくなることが予想される。

熊本総合病院 産婦人科



派遣先地域医療拠点病院	阿蘇医療センター
氏名	湯上 正樹
診療科名	整形外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

外来診療と手術を中心に診療支援を行うことにより、阿蘇地域の医療提供体制への貢献を図った。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

外来及び手術を通して、若手医師等への指導を行った。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来患者数は例年と大きな変化はなかった。

阿蘇医療センターでは、手術機材等の整備を図り、足部・足関節領域の外傷・障害に対する手術が可能となり、患者の生活圏内での手術を受けることができるようになった。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

メディカルネットワークの使用状況は例年と大きな変化はなかった。今後も普及に努める。

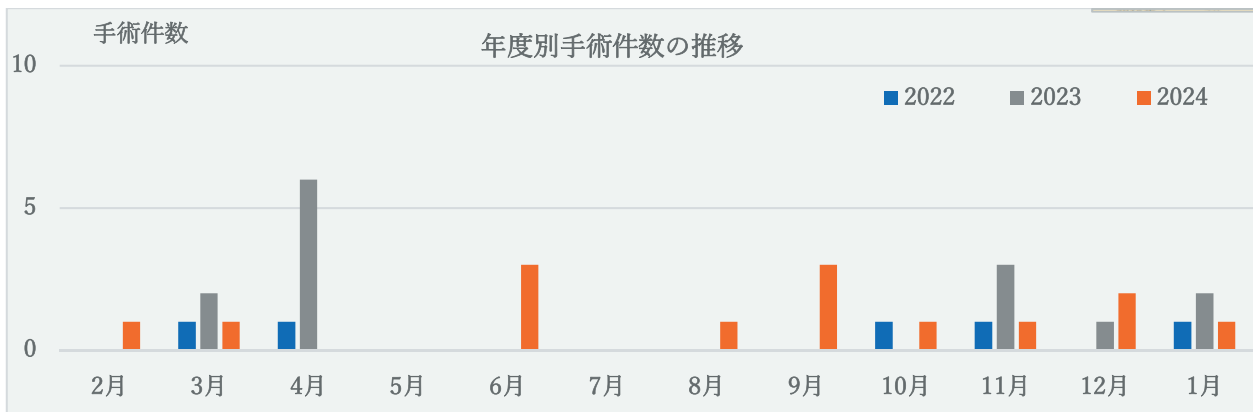
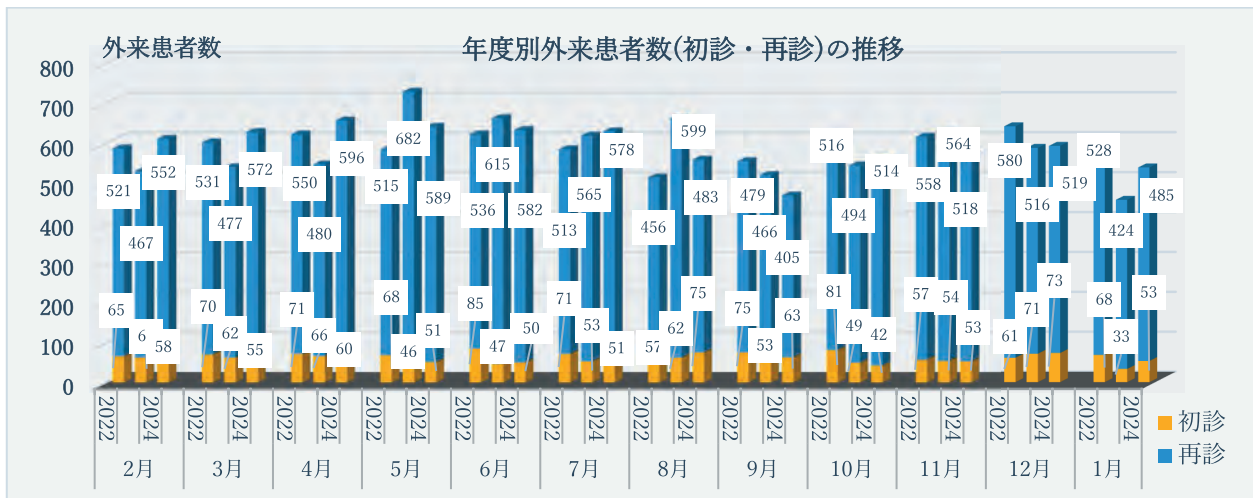
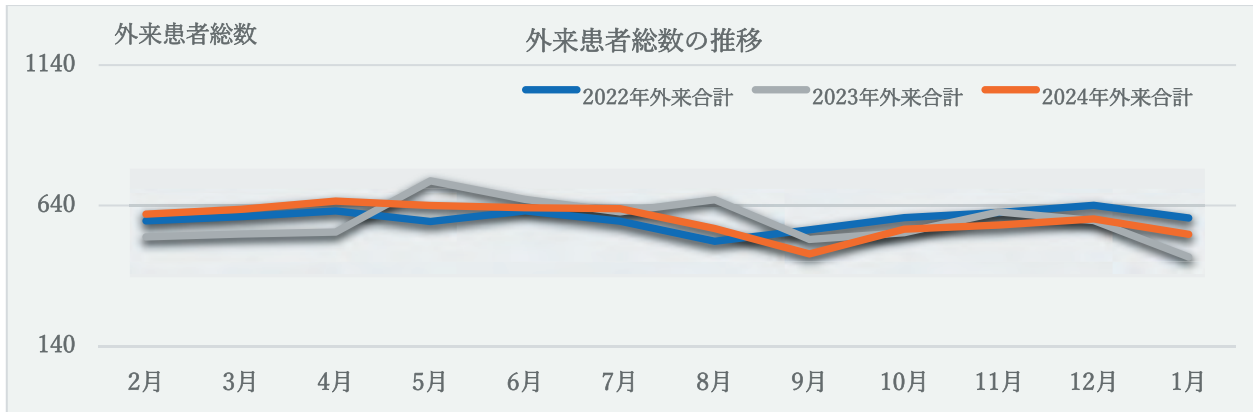
## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

月に1例のペースで、足部・足関節の手術を行っており、患者自身が居住する圏域内で、専門性の高い治療が受けられることは、患者本人や家族の負担軽減と安心感につながっており、本事業による地域医療拠点病院としての役割の推進に寄与する活動の一つと考える。

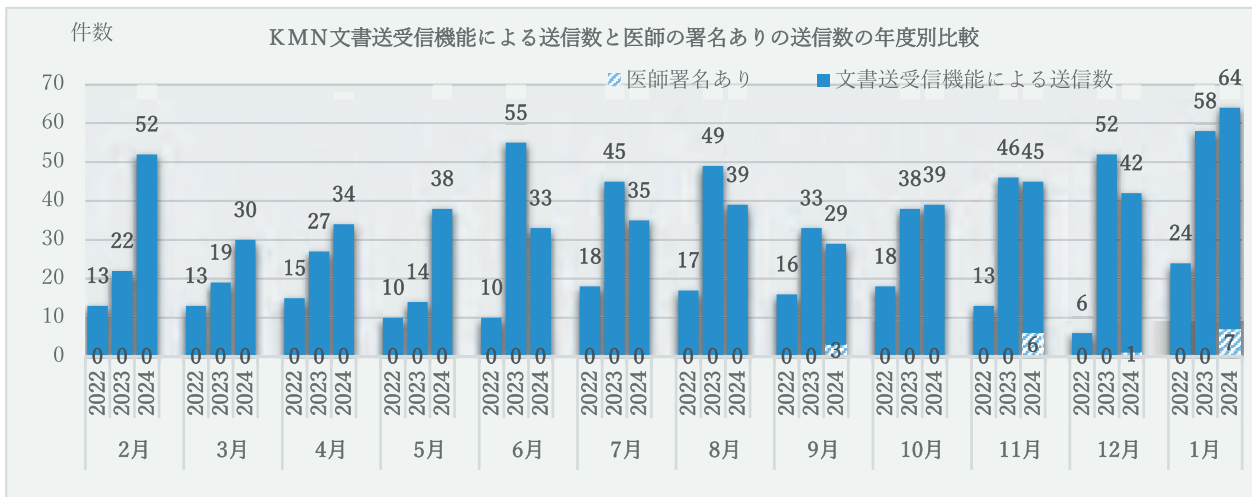
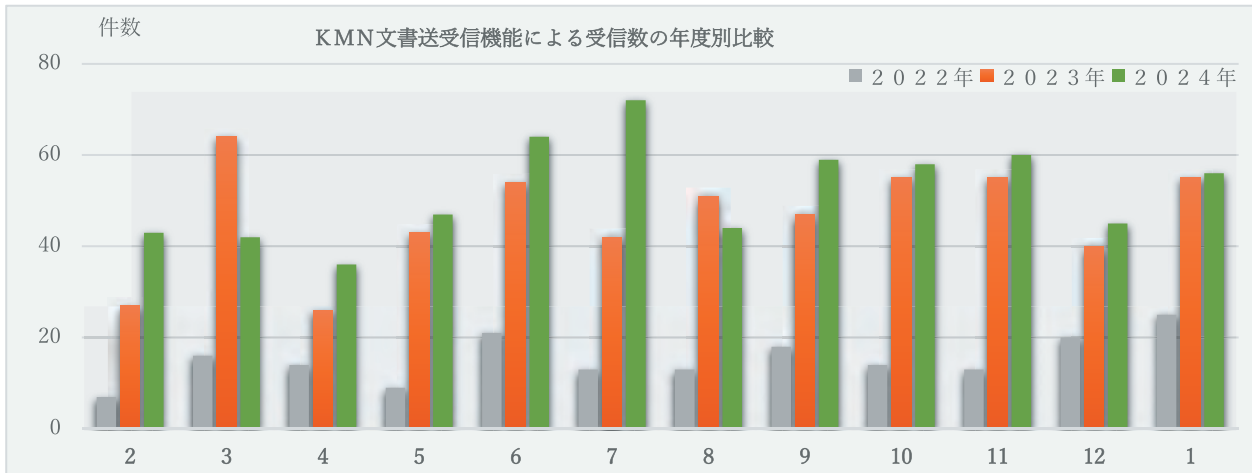
## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

阿蘇圏域内の他の病院との連携体制構築が課題と思われる。

## 阿蘇医療センター 整形外科



## 阿蘇医療センター 整形外科



派遣先地域医療拠点病院	山都町包括医療センターそよう病院
氏名	米満 龍史
診療科名	整形外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

### 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

当科より整形外科として外来診療および入院診療にあたっている。入院患者については、常勤医師が主治医として担当いただき、外来日に整形外科として併診している。

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

当科診療の範囲内で若手医師へOJTの形で指導している。

### 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

2024年2月～2025年1月の12か月間において、平均約163名/月（初診13名、再診150名）の外来診療にあたっている。

### 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

2024年2月～2025年1月の12か月間において、KMN新規参加17件、KMNの文書送受信機能による受信数平均8.9件/月、送信数0.8件/月で利用されている。

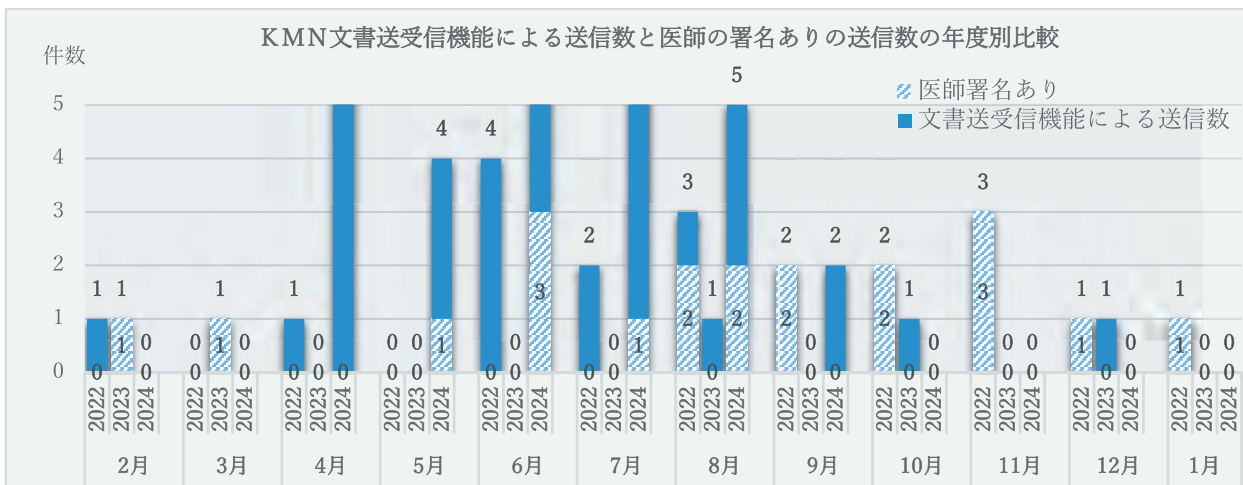
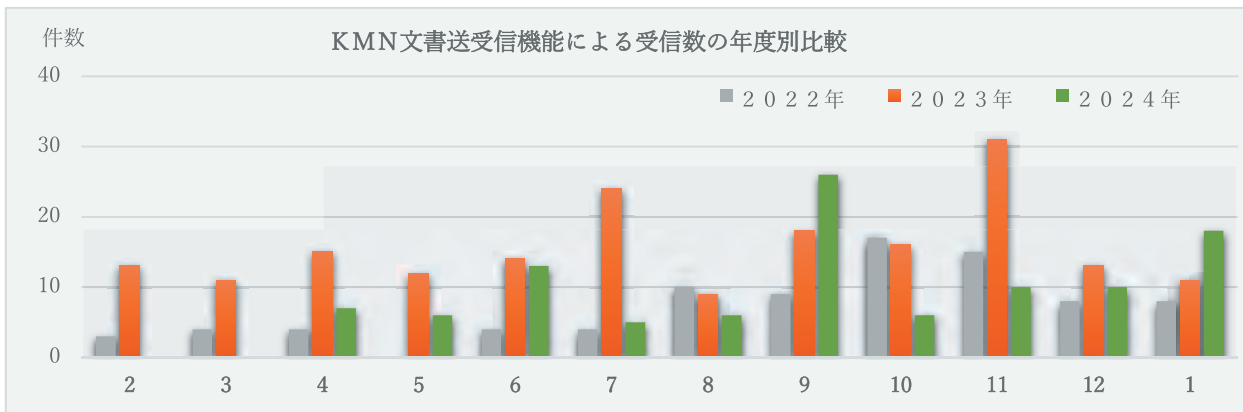
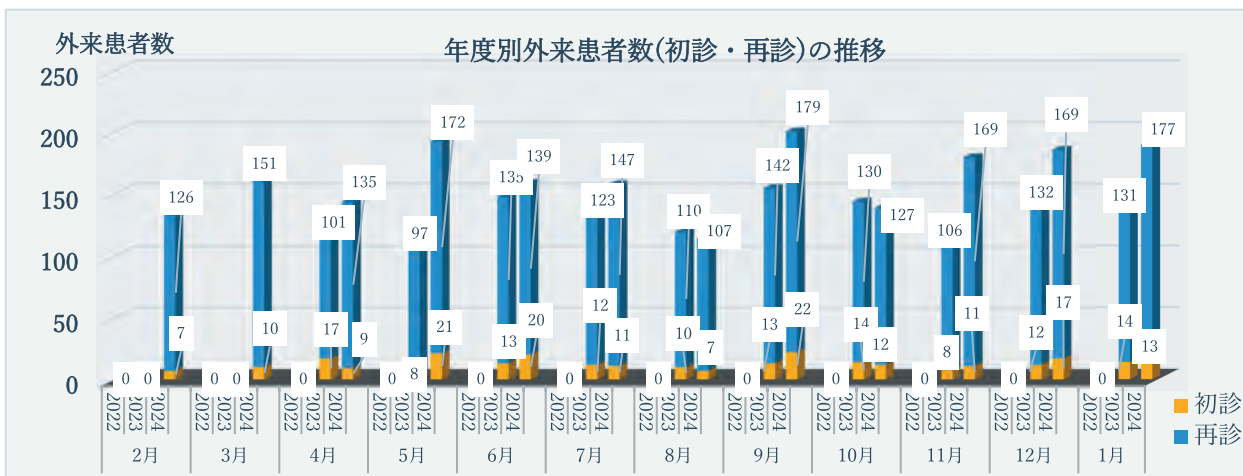
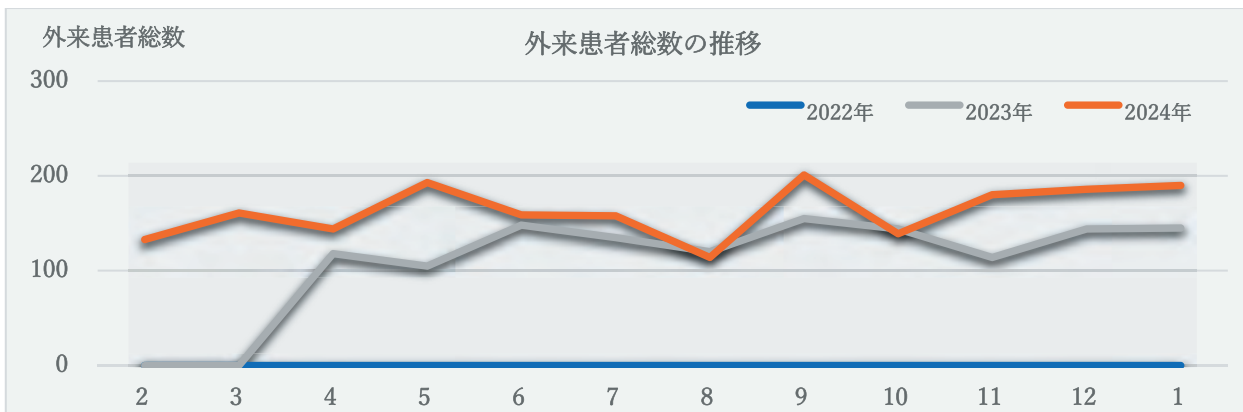
### 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

地域医療拠点病院として、地域住民の診療に従事しており、整形外科領域では手術が必要な整形外科疾患（骨折等の外傷、人工関節等の変性疾患、脊椎疾患）の手術可能施設への紹介と術後のリハビリテーション（入院、外来）を担っている。

### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

問題点としてはKMNの送信がほとんど利用できないことが挙げられる。具体的には、KMN立ち上げまでに30分以上を要するため、スムーズなKMN利用が難しい状況と思われます。

山都町包括医療センターそよう病院 整形外科



地域医療連携ネットワーク実践学 寄附講座

派遣先地域医療拠点病院	小国公立病院
氏名	杉本 一樹
診療科名	整形外科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

## 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

### ● 拠点病院の医療機能の向上、地域で不足する専門医療の提供

派遣先の地域医療拠点病院には整形外科常勤医は不在であり、令和6年度は大学病院から3名の整形外科専門医が週3回（火、木、金）派遣された。

整形外科疾患に対する保存療法や、専門的な加療（手術）が必要な患者の紹介、入院患者の整形外科コンサルトへの対応、専門医療機関での急性期加療後の転院やリハビリテーションの指示、地域の開業医からの整形外科患者の紹介への対応を行った。急性期の外傷などの疾患や専門的な精査・加療が必要な場合は、近隣の日田市、菊陽町の医療機関や大学病院を含む熊本市内の医療機関に紹介し急性期治療後の逆紹介に対応した。

### ● 地域におけるネットワーク構築に向けた地域医療の現状分析及び新たな方策の検討・提案・実践等

地域医療の現状分析として、農作業や旅館など観光業に従事する患者が多く、患者の大部分が高齢者であり、疾患としては変形性関節症や変形性腰椎症といった慢性疾患および骨粗鬆症を背景とした脊椎の圧迫骨折や橈骨遠位端骨折などの脆弱性骨折、ロコモティブシンドロームの患者の割合が高い。

また、独居の患者や日中に家族のサポートが得られない高齢の患者も多く、腰痛の悪化の際などに日常生活動作のサポート目的での入院もまれではない。

なお、脊椎外科として手術適応患者に対しては、積極的に大学病院での専門加療をすすめ紹介した。

## 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

地域医療で派遣された研修医からの患者の診察依頼について対応した。地域での講演活動は施行できなかった。

## 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

2024年の整形外科の外来患者総数は3624人（初診185人）で1ヶ月あたり300名前後推移した。初診患者、再診患者ともに前年度と比較し減少した。

## 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

小国公立病院におけるKMNの新規参加者数は2024年31名であった。

## 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

整形外科常勤医が不在の派遣先病院において、整形外科疾患に対する拠点病院の医療機能の向上および不足する専門医療を提供する役割については、一定の成果をあげている。

今後も地域医療の支えとして貢献していく所存である。

## 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

### 課題① 高齢化と移動手段

運転ができない高齢者の受診に際して、公共交通機関が不十分のため移動手段が限られ受診時間や回数に制約がある場合が多い。解決策としては乗り合いタクシーの利用などの他、診療科間での受診日調整などが考えられる。

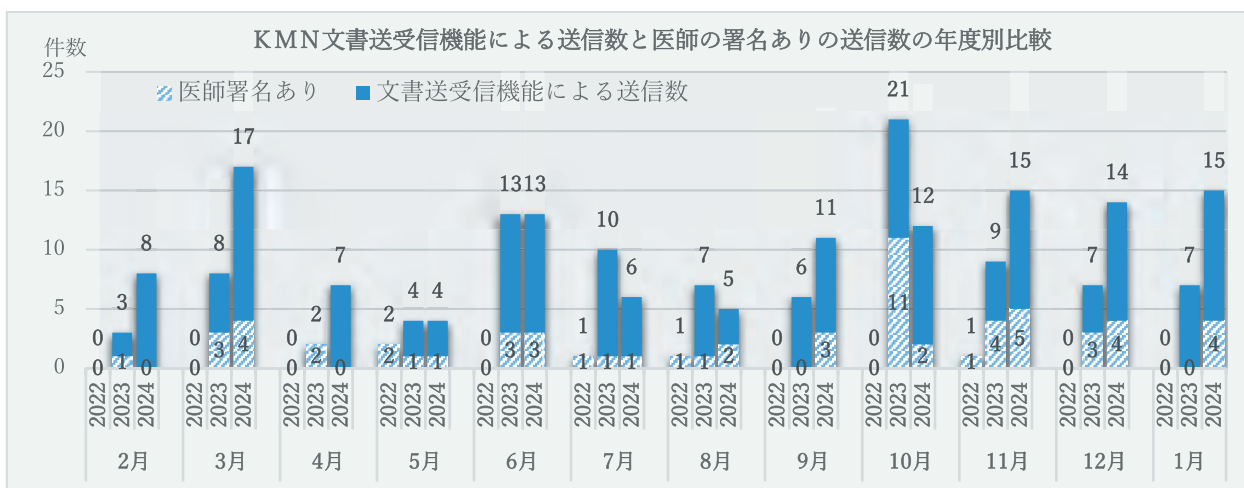
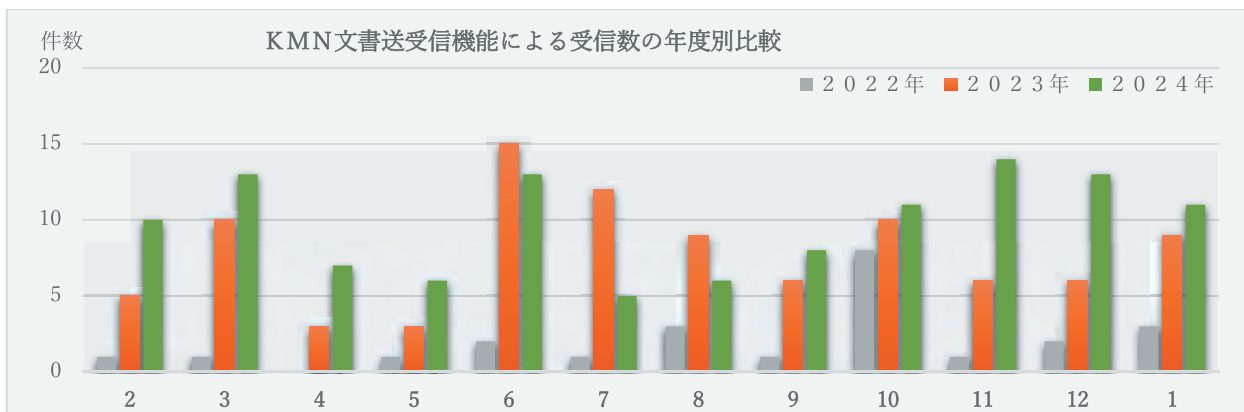
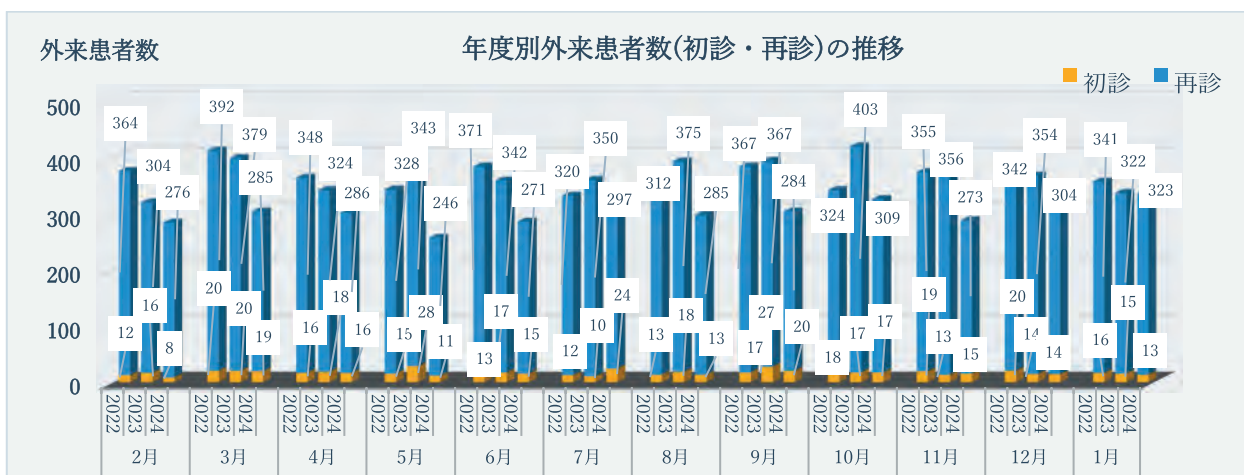
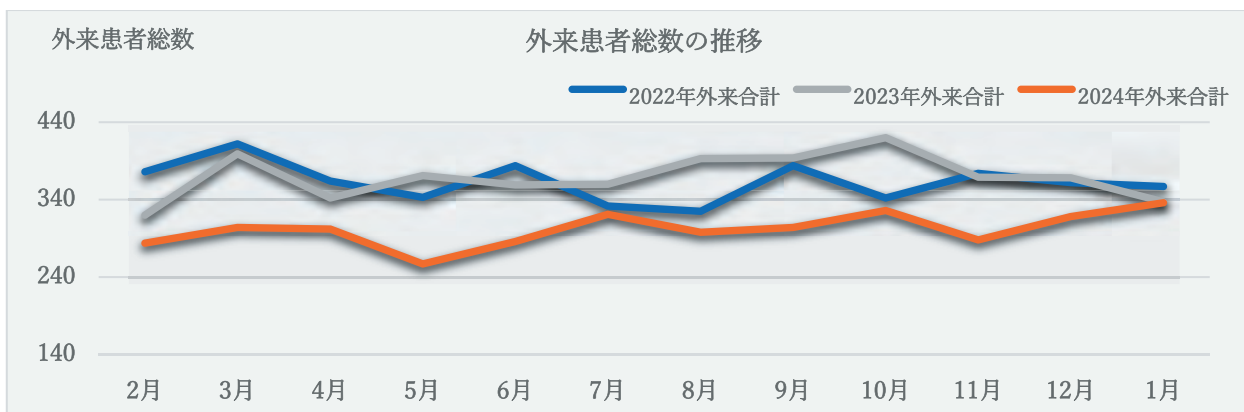
### 課題② 近隣医療機関・介護サービスとの連携

地域医療では一つの医療機関での診療科や対応可能な検査が限られている場合も少なくない。近隣の医療機関における診療科（対応可能な疾患）、対応可能な検査の情報が得られれば地域医療ネットワーク構築に有用であると考えられる。また、特に高齢者などでは、同一日に複数診療科の受診を要する場合も多く診療科間で情報を共有する

必要がある。

また、日常生活での介護を要する場合も多く、通常は入院の適応のない疾患においても自宅での生活が困難であるため社会的な入院となる例も多い。解決策としては、本人、キーパーソン、介護サービスとの連携が必要と考えられるが、地域における利用可能な介護施設などは限られている。

## 小国公立病院 整形外科



派遣先地域医療拠点病院	熊本県立こころの医療センター
氏名	都 剛太郎
診療科名	神経精神科
事業期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日

### 1. 本寄附講座事業における状況・成果概要

主に外来診療を対応している。こころの医療センターは、くまもとメディカルネットワーク未加入であるため、参加普及を促すよう働きかけを行った。

### 2. 県の修学資金貸与医師等若手医師へのキャリア支援や指導等の活動状況

若手医師や精神科専攻医への教育や診療相談の対応を行った。

### 3. 診療支援の取り組み及び成果（データに基づく）

外来患者は、1月当たり60名～80名の診療を行った。

また、精神疾患や認知症の患者が新型コロナに感染した場合の入院対応等も行った。

### 4. 派遣診療科におけるメディカルネットワーク普及状況（データに基づく）

くまもとメディカルネットワークに未加入

### 5. 地域医療拠点病院としての役割の推進状況

近隣の医療機関や診療所・クリニックとの連携をさらに深化させ、情報共有や緊急時の迅速な対応体制の確立に努めた。

### 6. 地域医療における今後の課題・解決策等

精神科を有する総合病院がほとんどなく、精神疾患を有する患者の身体加療を行う病院の選定に難渋している。

熊本県立こころの医療センター 神経精神科

